牛頸ハセムシ窯跡群 Ⅲ

福岡県大野城市大字牛頸所在窯跡群調査報告

大野城市文化財調査報告書
第41集

1993

大野城市教育委員会

P３２　図２２は以下のように分けられる

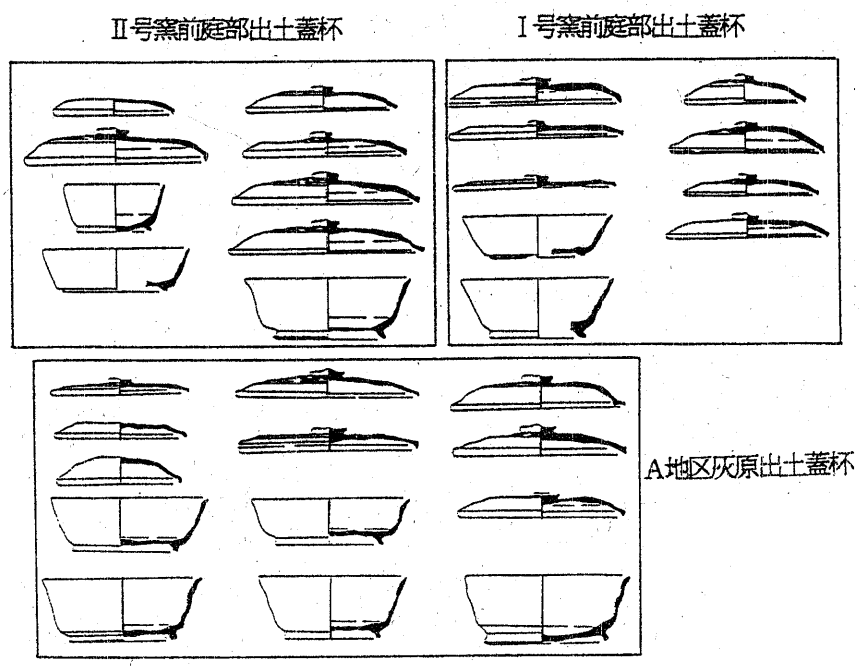


図22　26地区Ａ区灰原、26－Ⅰ、Ⅱ号窯前庭部出土蓋杯の種類

牛頸ハセムシ窯跡群 Ⅲ

福岡県大野城市大字牛頸所在窯跡群調査報告

大野城市文化財調査報告書
第41集



ハセムシ26地区



ハセムシ28地区

序

ハセムシ窯跡群は牛頸窯跡群内の一支群ですが、ここに大規模な団地造成が企画されたため、昭和62年～63年に10地点35基の窯跡を発掘調査しました。調査は大谷女子大学教授中村浩先生の全面的な協力の下に行われ、その成果は『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』、『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』として刊行したところです。ところが、工事の方は種々の理由で進展せず、調査した窯跡周辺を除いては伐採もされず木々が繁茂したままの状態がしばらく続きました。そして、平成4年になって本格的な工事が開始されましたが、それに伴い、重機による確認調査を実施したところ、新たに4地点5基の窯跡が見つかりました。このため、今までの経緯をふまえ、中村先生にご相談申し上げたところ、平成4年9月～10月の期末休暇を利用して現地調査をお願いできることになりました。当該団地造成工事に伴う発掘調査としては最後の調査となり、また、報告書も完結することになりました。

前回報告した「和銅6年銘ヘラ書き須恵器」はさまざまな反響を呼んでおります。本報告書が研究の深化に役立ち、その成果が市民に還元されることを願っております。

最後に、ご多忙な時期にもかかわらず、調査、整理に当たっていただいた中村先生および学生諸氏、考古地磁気測定のため遠路来ていただいた夏原技研 夏原信義氏、調査費用負担を快諾された（株）西洋環境開発、現地調査にご協力いただいた鹿島・青木建設工事共同企業体、そして地元牛頸区の皆様に対して心から感謝の意を表するしだいです。

平成5年6月30日

大野城市教育委員会

教育長 久 野 英 彦

例　　言

1．本書は平成４年９月から同年11月まで実施した福岡県大野城市所在牛頸ハセムシ窯跡群の発掘調査報告書である。

2．調査は株式会社西洋環境開発からの受託事業として大野城市教育委員会社会教育課 主査舟山良一を中心に行ったが、現地調査の多くを大谷女子大学教授中村浩が担当した。調査体制および調査補助員など参加者については後に掲げる。

3．遺物整理は大谷女子大学資料館において実施した。

4．遺物は、通し番号とし図版での統一をはかった。なお挿図はこの限りではない。

5．遺物写真は阿南辰秀氏、伊藤慎司氏の協力を得た。

6．本書の執筆は、各担当者が行い、各々文末に名前を記した。なお用語は原則として執筆者の意見に従っているが、一部統一したものもある。

7．本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の25万分の１『福岡南部』『不入道』を使用した。

本　文　目　次

序、例言

第１章　調査経過 …… 1

第２章　調査経過 …… 6

１．調査に至る経過

２．調査組織

３．調査の経過

４．遺物整理の経過

５．日誌抄

第３章　窯跡の調査 …… 15

１．概観

２．各地区の調査

(1)　26地区の調査

①分布の状況

②須恵器窯跡の調査

１）26－Ⅰ号窯　　２）26－Ⅱ号窯

(2)　27地区の調査

①分布の状況

②須恵器窯跡の調査

１）27号窯

(3)　28地区の調査

①分布の状況

②須恵器窯跡の調査

１）28号窯

(4) 29地区の調査

①分布の状況

②須恵器窯跡の調査

1）29－Ⅰ号窯

③その他の遺構

1）土坑　　2）焼土坑

第4章　出土遺物 ……28

1．概観

2．26地区の須恵器について

3．器種について

付1．牛頸ハセムシ窯跡出土炭化材の樹種同定 ……34

付2．牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定（その3） ……38

遺物観察表 ……43

挿　図　目　次

図１　牛頸周辺遺跡分布図
図２　29地区の調査状況
図３　調査状況
図４　窯体内セクションの状況(26－Ⅰ号窯)
図５　調査風景27地区
図６　灰原検出状況
図７　調査状況（清掃）
図８　熱残留磁気サンプリング状況
図９　平板測量状況
図10　27地区調査地遠望（航空写真）
図11　26地区遠望
図12　26地区の地形図
図13　26－Ⅰ、Ⅱ号窯前庭部の状態
図14　27地区地形図
図15　煙道部の状況
図16　28地区地形図
図17　28地区調査状況
図18　29地区地形図
図19　焼土坑実測図
図20　26地区窯体と灰原各区の配置
図21　26地区Ｃ区灰原出土蓋杯の種類
図22　26地区Ａ区灰原、26－Ⅰ、Ⅱ号窯前庭部出土蓋杯の種類
図23　Ｂ区灰原出土蓋杯の種類
図24　出土炭化材の電子顕微鏡写真
図25　出土炭化材の電子顕微鏡写真
図26　各窯跡ごとの各試料の残留磁化方向の等面積投影図
図27　昭和62、63年度の測定結果と８世紀のハセムシ窯跡の変化曲線および広岡曲線
図28　測定結果と８世紀のハセムシ窯跡の変化曲線および広岡曲線

表　目　次

表１　牛頸周辺遺跡地名表
表２　26地区遺物の出土地区分布と割合
表３　焼成度合と出土地区、器種の分布
表４　出土炭化材の樹種
表５　熱残留磁気測定結果
表６　考古地磁気測定結果
表７　考古地磁気年代推定結果

図　版　目　次

カラー図版　ハセムシ26地区、28地区

図版１　遺構実測図　26－Ⅰ号窯遺構実測図
図版２　遺構実測図　26－Ⅱ号窯遺構実測図
図版３　遺構実測図　27号窯遺構実測図
図版４　遺構実測図　26号窯灰原セクション実測図
図版５　遺構実測図　27号窯灰原セクション実測図
図版６　遺構実測図　28号窯遺構実測図
図版７　遺構実測図　29号窯遺構実測図
図版８　遺物実測図　26地区Ⅰ号窯燃焼部床面、焼成部床面、前庭部灰原、土坑出土遺物
図版９　遺物実測図　26地区Ⅱ号窯前庭部、窯体内埋土、窯体右側出土遺物
図版10　遺物実測図　26地区Ａ区灰原出土遺物
図版11　遺物実測図　26地区Ａ区灰原出土遺物
図版12　遺物実測図　26地区Ａ区灰原、Ｂ区灰原、Ｆ区灰原、ＡＦ区灰原、ＣＤ区灰原、灰原出土遺物
図版13　遺物実測図　26地区Ａ区灰原、Ｂ区灰原、Ｃ区灰原、Ｅ区灰原、灰原出土遺物
図版14　遺物実測図　26地区Ｂ区灰原出土遺物
図版15　遺物実測図　26地区Ｂ区灰原出土遺物
図版16　遺物実測図　26地区Ｂ区灰原出土遺物
図版17　遺物実測図　26地区灰原、Ｂ区灰原出土遺物
図版18　遺物実測図　26地区Ｂ区灰原出土遺物
図版19　遺物実測図　26地区Ｂ区灰原出土遺物
図版20　遺物実測図　26地区ＢＥ灰原セクション中出土遺物
図版21　遺物実測図　26地区ＢＥ灰原セクション中出土遺物
図版22　遺物実測図　26地区ＢＥ灰原セクション中出土遺物
図版23　遺物実測図　26地区ＢＥ灰原セクション中出土遺物
図版24　遺物実測図　26地区Ｃ区灰原出土遺物
図版25　遺物実測図　26地区Ｃ区灰原出土遺物
図版26　遺物実測図　26地区Ｃ区灰原出土遺物

図版27　遺物実測図　26地区Ｃ区灰原出土遺物
図版28　遺物実測図　26地区Ｃ区灰原出土遺物
図版29　遺物実測図　26地区Ｄ区灰原出土遺物
図版30　遺物実測図　26地区Ｄ区灰原出土遺物
図版31　遺物実測図　26地区Ｄ区灰原出土遺物
図版32　遺物実測図　26地区Ｅ区灰原出土遺物
図版33　遺物実測図　26地区Ｅ区灰原出土遺物
図版34　遺物実測図　26地区Ｅ区灰原出土遺物
図版35　遺物実測図　26地区Ｃ区灰原、Ｄ区灰原、Ｅ区灰原出土遺物
図版36　遺物実測図　27地区Ａ区灰原出土遺物
図版37　遺物実測図　28地区Ⅰ号窯灰原、Ｂ区灰原出土遺物
図版38　遺物実測図　29地区Ⅰ号窯Ｂ区灰原、左土坑、焚口、周辺出土遺物
図版39　遺物実測図　29地区Ⅰ号窯Ｂ区灰原、焚口、窯体内、灰層中、左土坑出土遺物
図版40　遺構写真　ハセムシ26地区遠景、近景
図版41　遺構写真　ハセムシ26地区Ⅱ号窯全景、Ⅰ号窯全景
図版42　遺構写真　ハセムシ26地区Ⅱ号窯置台配置状況上半部、窯置台配置状況中心部分、細部
図版43　遺構写真　ハセムシ26地区Ⅱ号窯たちわり後の状況、Ⅰ号窯たちわり後の状況
図版44　遺構写真　ハセムシ26地区灰原縦断セクション、横断セクション
図版45　遺構写真　ハセムシ27地区窯跡全景、燃焼部付近
図版46　遺構写真　ハセムシ27地区窯跡たちわり後
図版47　遺構写真　ハセムシ27地区窯跡奥壁部、窯跡奥壁及排水溝
図版48　遺構写真　ハセムシ28地区遠望、29地区遠望
図版49　遺構写真　ハセムシ28地区窯跡（焚口側から）、（煙道側から）
図版50　遺構写真　ハセムシ28地区窯跡及土坑、土坑細部
図版51　遺構写真　ハセムシ29地区窯跡及土坑、土坑細部
図版52　遺構写真　ハセムシ29地区土坑、前庭部
図版53　遺物写真　須恵器（蓋・高杯・杯）
図版54　遺物写真　須恵器（蓋・杯・皿）
図版55　遺物写真　須恵器（皿・杯・平瓶・壺・蓋）
図版56　遺物写真　須恵器（蓋・杯）
図版57　遺物写真　須恵器（蓋・杯・皿）
図版58　遺物写真　須恵器（蓋・杯・皿）

図版59　遺物写真　須恵器（壺・蓋・杯・皿）
図版60　遺物写真　須恵器（杯・皿・瓶子・蓋）
図版61　遺物写真　須恵器（蓋・杯・皿）
図版62　遺物写真　須恵器（蓋・杯・皿）
図版63　遺物写真　須恵器（蓋・壺・杯・皿）

第1章　調　査　経　過

ハセムシ窯跡群は九州最大規模を有する牛頸窯跡群中の一支群で、群中でも南部に属する。牛頸はそれほど高くない丘陵と小河川が造り出した狭長な低地が複雑に入り込んだ地形をなしている。このため小谷が多く造り出され、窯を築くに適している。須恵器窯跡は牛頸を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西４km、南北4.6kmの範囲に分布する。その数は300基を越えるであろう。年代的には６世紀中頃（ⅢＡ期）から８世紀後半（Ⅶ期）にかけてである。最終的に９世紀まで窯が造られたかはまだ判明していない。博多湾まで直線で13キロ、大宰府政庁跡まで４キロである。

さて、牛頸窯跡群は福岡平野の南端部に位置するが、平野全体がおおよそ三角形状を呈しており、扇子にたとえればその要の位置に近い所と言えよう。福岡平野には諸岡遺跡出土石器が物語るとおり先土器時代から人の住んでいたことがわかるが、大規模な開発が行われようになるのは縄文時代晩期からである。

最近の成果を中心に福岡平野の原始・古代の環境を概観してみたい。まず、ＪＲ竹下駅の東に広がる福岡市那珂遺跡群で縄文時代晩期の二重環濠が検出され注目を集めた。また、板付遺跡では同じくその頃の水田が見つかっており、縄文時代晩期に既に水田耕作を行ったり、環濠を持つ集落のあったことが判明している。また、東の月隅丘陵を越えた粕屋町江辻遺跡では当該期の円形住居跡９軒からなる集落が見つかり、判然としなかった環濠内部の集落構造の一端を知ることができるようになってきた。

弥生時代では前期の環濠集落である板付遺跡、中期の比恵遺跡、那珂遺跡が拠点集落と考えられる。また、奴国の中心地と考えられる春日市の須玖岡本遺跡周辺では精力的な調査の結果、永田、坂本、五反田など青銅器鋳造やガラス生産に関係する遺跡が次々と見つかり、担当者も鋳型の数を即座には答えきれないほどである。さらに福岡空港内で見つかった福岡市雀居（ささい）遺跡は低湿地の遺跡でさまざまな木製品と共に後期の３×１間（約8.7×7.1ｍ）の大型建物跡が検出された。吉竹高木遺跡の建物跡などと共に弥生住居の再検討をせまるものである。

古墳時代には、那珂川町、春日市、福岡市の那珂川流域に多く前方後円（方）墳が知られている。那珂八幡古墳、妙法寺古墳、安徳大塚、老司古墳、博多１号墳、剣塚北古墳、貝徳寺古墳、日拝塚、小丸１号墳、東光寺剣塚墳、下白水大塚、中原１号墳などである。また、規模の大きい群衆墳としては、那珂川上流右岸の観音山古墳群、東部月隈丘陵の持田ケ浦古墳群、乙金古墳群が知られている。

福岡平野周辺の須恵器窯跡について見れば、最も古い窯跡は朝倉窯跡群と総称される八並、

小隈（夜須町）、山隈窯跡群（三輪町）が挙げられる。また、筑紫野市の隈・西小田窯跡群でも７基が発掘調査されている。これからは陶邑Ⅰ型式１段階またはそれに続く時期の須恵器が出土している。また、以前から知られていた福岡市の新開窯跡は陶邑Ⅰ型式４段階頃の開窯と言われていたが、最近では３段階までさかのぼる須恵器もあると考えられている。それに次ぐものは同じく福岡市の重留窯跡で、九州編年のⅡＡ期として報告されている。陶邑のⅠ型式５段階～Ⅱ型式１段階頃のものである。九州のⅢＡ期（陶邑Ⅱ型式２段階頃）になると、各地に窯が築かれ始め、これ以後本格的な須恵器生産が始まったと思われる。宇美町の岩長浦窯跡群太宰府市の裏ノ田窯跡群、そして牛頸窯跡群で当該時期の須恵器を出土する窯跡が知られている。しかし、牛頸を除く他の窯跡群は数も１～２基で、Ⅳ期頃に操業をやめてしまう。牛頸はⅢＡ期の窯跡として知られているのは野添６号窯のみであるが、その後継続して造られ、大窯跡群へと発展していく。ただ、現在のところ、奈良時代までの窯跡は知られているが、平安時代のものは見つかっていない。

さて、663年の白村江の戦いの後北部九州は激動の時代を迎える。即ち、唐・新羅の攻撃を恐れて平野部には水城を、大野山には大野城を築いた。これらは大宰府防衛のためであったが、大宰府の前身は那津官家として博多湾の近くにあったと思われる。近年の調査で福岡比恵遺跡がその候補地として注目を集めることになった。

７世紀後半になると、牛頸窯跡群では窯が小さくなりだしそのかわり数が増える。８世紀になるとその傾向は強まる。当該期の宮ノ本遺跡（太宰府市）では窯跡以外に墳墓が見つかり、大宰府官人の墓と考えられている。

福岡平野の周辺の遺跡を概観した。


春日市
大野城市
太宰府市
筑紫野市
春日原ゴルフ場
春日原ゴルフ場
横峰
横峰
大佐野
大佐野
大佐野団地
大佐野
大佐野
大佐野
平野台団地
平野台団地
平野台二丁目
平野台四丁目
北谷
北谷
北谷

6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳4基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	〃　大字春日	窯跡1基以上	
8	惣利窯跡群	〃　〃	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査（9基）
9	惣利遺跡群	〃　〃	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査　縄文～中世
10	向谷遺跡群	〃　〃	甕棺・方墳、弥生～歴史時代住居跡	1979～82春日市教委調査
11	春日平田窯跡群	〃　〃	窯跡21基	1982～85春日市教委調査（21基）
12	九州大学筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	梅頭窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
14	上園遺跡	〃　〃	散布地	1985～大野城市教委調査
15	出口窯跡	〃　〃	窯跡1基	
16	唐土遺跡	〃　下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
17	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
18	水城	太宰府市・大野城市	土塁	（同指定特別史跡）
19	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基	1978太宰府市教委調査（2基）
20	篠振窯跡	〃　〃	窯跡2基	1974・85太宰府市教委調査（2基）
21	尊田窯跡	〃　〃	窯跡	
22	長浦窯跡	〃　大字向佐野	窯跡1基	1972福岡県教委調査（1基）
23	向佐野窯跡群	〃　〃	窯跡3基	同　上　（3基）
24	宮ノ木窯跡群	〃　大字向佐野	窯跡8基	1978・84太宰府市教委調査（8基）
25	谷蟹窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
26	野添窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査（2基） 1986大野城市教委調査（3基）
27	大浦窯跡群	〃　大字牛頸	窯跡5基	1968福岡県教委調査（2基）
28	平田窯跡群	〃　〃	窯跡9基	1972立正大学調査（4基） 1979～81大野城市教委調査（4基）
29	東浦窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1968国士館大学調査（3基）
30	上平田窯跡群	〃　〃	窯跡4基	1972福岡県教委調査（4基）
31	中通窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調査（6基）
32	中通古墳群	〃　〃	円墳19基	1972・73福岡県チブサン会調査（13基） 1975県教委調査（1基） 1979・80県教委・大野城市教委調査（5基）
33	原窯跡群	〃　〃	窯跡3基	土取りで灰原の一部を残すのみ
34	ハセムシ窯跡群	〃　〃	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市教委調査（15基）
35	井手窯跡群	〃　〃	窯跡39基以上	1982～86県教委調査（31基） 1988大野城市教委調査（3基）
36	道ノ下窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1982～86県教委調査（10基）
37	足洗川窯跡群	〃　〃	窯跡5基以上	182～86県教委調査（4基）

38	笹原窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡4基以上	1982～86県教委調査（4基）
39	長者ケ原窯跡群	〃　〃	窯跡16基	同　上　（16基）
40	野口窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基以上	
41	円入遺跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
42	惣利古墳	〃　〃	円墳1基	消滅（横穴式石室・須恵器出土）
43	春日平田遺跡群	〃　〃	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
44	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡2基	消滅
45	華無尾遺跡	〃　〃	散布地	旧石器～縄文（ナイフ形石器石鏃等出土）
46	塚原古墳群	春日市大字春日	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か？
47	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸	散布地	縄文～中世
48	畑ケ坂窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1基消滅
49	畑ケ坂古墳	〃　〃	円墳1基	
50	塚原遺跡群	〃　〃	円墳10基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987大野城市教委調査
51	胴ノ元古墳	〃　〃	円墳1基	
52	胴ノ元窯跡群	〃　〃	窯跡2基	
53	城ノ山窯跡	〃　〃	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
54	楠木遺跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生（中期）
55	大堤古墳群	〃　大字白水	円墳3基	（満水時水没）
56	イケ谷古墳群	〃　大字上白水	円墳3基以上	（春日原ゴルフ場内）
57	浦ノ原窯跡群	〃　大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査（8基）
58	浦ノ原遺跡	〃　〃	散布地	土師・須恵器
59	後田窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査（16基）
60	後田古墳群	〃　〃	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
61	小田浦窯跡群	〃　〃	窯跡13基以上	1976立正大学調査（4基） 1982～86大野城市教委調査（9基）
62	小田浦古墳群	〃　〃	円墳3基	1976立正大学調査（1基） 1987大野城市教委調査（2基）
63	月ノ浦窯跡群	〃　〃	窯跡2基	1982大野城市教委調査（1基）
64	月ノ浦古墳	〃　〃	円墳1基	消滅（横穴式石室）
65	大谷窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1971国土館大学調査（4基）
66	石坂窯跡群	〃　〃	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査（7基）
67	足洗川遺跡	〃　〃	散布地	旧石器（石刃出土）
68	上大利水城	〃　上大利	土塁	（国指定特別史跡）
69	出口遺跡	〃　下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査、『出口遺跡』

第2章　調　査　経　過

1．調査に至る経過

福岡県大野城市牛頸ハセムシほかに所在する須恵器窯跡群は、奈良時代以来太宰府への須恵器の配給地としてばかりでなく広く西日本地域全般に、その需要地を求めていた大生産地であった。とくに大阪府陶邑窯跡群、あるいは愛知県猿投山西南麓窯跡群とならんで日本三大須恵器生産地とも呼ばれている。

当該地域の開発計画が昭和60年はじめにもちあがり、大野城市教育委員会では開発施主である㈱西洋環境開発と協議を重ねた。やがて昭和61年5月に分布調査を行い、窯跡が確実視されるところ11か所、可能性のある場所4か所ほか1か所をリストアップした。やがて本格的な開発計画が提出され、その取扱についての協議が行われ、発掘調査の実施を提示することとなった。しかし市内の調査予定部分が未調査で残されており、その着手時期については早くても62年秋以降ということとなったが、その後、大谷女子大学の応援をえられることとなり、62月7月に着手することとなった。

調査は62年7月1日から8月14日まで行われ、期間中の8月2日に、現地説明会が行われ、地元はじめ多数の見学者で賑った。この期間には18・19・20地区の窯跡の調査を完了した。それらについては引き続き、大学で遺物整理を行い、報告書を作成した。『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』1988、がそれである。

やがて教育委員会にあっても事業が一段落したこともあり、62年11月には22地区、63年2月から6月までの期間に、12、23地区をそれぞれ行った。63年度にも昨年度に引き続き、大谷女子大学の応援を得て、1・2・6・7地区の比較的近接して所在する窯跡の調査を行った。さらに12地区では、文字の刻んだ破片が検出されたこともあり、再度教育委員会で調査を行った。これらの調査によって分布調査で確認されている窯跡のうち民家に近い8地区を除いて、ほぼ完了ということになる。しかし丘陵部分をすべて伐採し、表土を除去した段階での再度の確認調査が必要なことは、施主側に伝え了承を得ている。

なお当該年度の調査の報告は、前回調査に引き続き、大学で遺物整理を行い、報告書を作成した。『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』1989がそれである。

これらの調査が完了した後、しばらくは開発計画の検討や諸条件の解決のために、工事そのものが本格化せずに、今日に至った。

平成3年に至って、急速に開発計画が実施の方向へ発展し、一部の伐採や防災工事が着手さ

れるに至った。教育委員会では、先の取り決めに基づき、伐採完了時に分布調査を行い、かつ重機によって試掘調査を試みてきた。この結果、26・27・28地区が新たに検出された。しかしすでに開発工事に着手している現状から、その対応が急がれたが、市内の発掘予定地の状況は、容易に当該調査に着手できる状態ではなかった。



図2　29地区の調査状況

これらの状況から、かつての調査を応援頂いた大谷女子大学中村浩教授に調査の応援方を打診したところ、9月末の前期考査休暇中であれば、という条件で可能であるとの回答を得た。これを受けて、教育委員会では開発施主である㈱西洋環境開発と協議を重ね、大谷女子大学側の予定に従って、調査を行うことで合意した。

やがて中村教授が打ち合わせのため、何度か来福され、できるかぎりあらかじめ表土の除去を行っておくことなどの準備段階の指示が行われ、主として大野城市教育委員会舟山が、その任にあたり、平成4年9月24日から10月3日まで26・27・28地区の調査を実施し、ほぼ完了した。その後、28地区に近接して29地区が新たに確認されたため、これについては舟山が調査を行い、11月5日には窯跡の当初の予定箇所についてはすべて完了した。

2．調査組織

今回の調査の体制は以下の如くである。

大野城市教育委員会	教育長	久野　英彦
	教育部長	後藤　幹生
	社会教育課長	關　　隆昭
	社会教育課長補佐	白水　岩人
	社会教育課主査	舟山　良一
	社会教育課主事	浦山　敏弘
	社会教育課技師	向　　直也
	社会教育課技師	徳本　洋一

		社会教育課嘱託	秀嶋　和子
現地調査			
（発掘調査）	大谷女子大学	教　授	中村　　浩
		非常勤講師	井山　温子
		資料館職員	安井かをり
	大谷女子大学	卒業生	関井　澄子
	大谷女子大学文学部	学生	田之上裕子・柴永　真実
			貝谷多実恵・中山　千秋
			植山加奈子
	大谷女子短期大学	学生	浅田　淳子・浜田　浩子
			簸中智恵子・辻野　裕子

以上発掘調査関係

（遺物整理のみの参加者）

大谷女子大学卒業生、大阪府立高校非常勤講師　寺嶋　辰美

一般　藤野　孝子

以　上

3．調査の経過

すでに調査に至る経過でみたような状況から、出来るだけ速やかに調査に着手できるように、大学と地元の連絡を密にして、準備を怠りないように進めていった。機材関係については大阪から持参可能なものについては持参することにし、測量機械関係については、大野城市教育委員会に手配を依頼することにした。ともあれ資材関係についての手配、および配送が終わったのは出発日になってからという慌ただしさであった。



図3　調査状況

9月24日現地に到着し、ただちに26地区、および28地区の調査に着手した。26地区では、灰原がかなり大

きく広い範囲に広がっており、その状況から容易に複数の窯跡が存在することが予想された。表土を除去することによって、2基の窯跡が、ほぼ焚口の高さをほぼ等しくして並んでいるのが明らかとなった。左側をⅠ号窯跡、右側をⅡ号窯跡と命名し、26－Ⅰ、26－Ⅱと表記する。Ⅱ号窯跡の床面には、いわゆる馬の蹄鉄、あるいは爪のかたちをした置き台が全面にわたって残されていることが分かった。しかし焚口に近い側では、それらがずり落ちてしまったような痕跡が見られ、すべてが旧位置を動いていないという状態ではなかった。

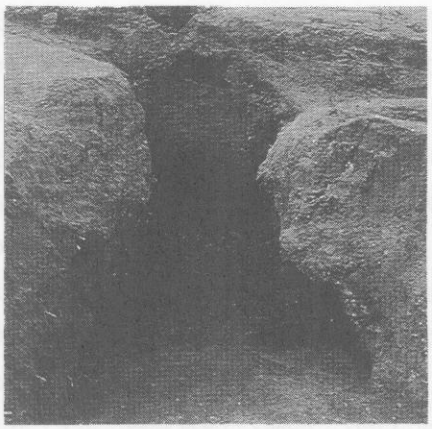


図4　窯体内セクションの状況（26－Ⅰ号窯）

28地区については、すべてに検出作業が完了したことから、ただちに実測の作業の準備に入り、完了後、断ち割りを行い、合わせて実測作業も加える。初日には、既に多くのことが準備されていたお蔭で、段取りよく調査が進展していった。さらに翌日には27地区の窯跡の確認作業に入った。窯跡は地下深く埋もれていたこともあり、当初表土除去のみでは確認できず、一



図5　調査風景27地区

部にサブトレンチを設定して確認した。天井部がかなりの部分残っているようにも見えたが、調査の進行段階で崩落が著しく、また残された部分についても崩落の危険があった部分については、あらかじめ除去して作業に当たった。なお除去する土砂がかなり多いこともあり、一部については重機の力によって排除した部分もある。全体の窯跡の形状は、他の地区と比較して大きく、かつ煙道部から排水溝が長く伸びているものであった。

各窯跡については窯跡内部セクションの観察を行い、その廃棄、放棄状況の観察を行った。さらに灰原については、26地区以外はあまり細かく区分することは行わなかったが、逆にこの区分による遺物整理段階での混乱も少ないだろう。

このように26・27・28地区を同時進行のかたちで調査をすすめたが、先ず28地区が完了し、次いで27、26地区がほぼ同時に完了した。またこれらの作業に並行して、開発地域全体について重機による試掘作業が継続して行われていた。この結果、29地区が確認されたが、残念ながら調査の主流をなしていた人員が、福岡を去ってからのことであり、これについては教育委員会舟山良一主査が担当して調査を完了させた。とくに調査状況については、窯跡が1基と、その側面に土坑が1か所確認されたというもので、ほかの窯跡に比較しても特筆すべきものはない。

4．遺物整理の経過

遺物は、調査完了後しばらく時間をおいて、大学資料館へ搬入された。これらについては、まず水洗いの行われていないものについては、水洗いから開始された。それが完了した段階から、出土地などを遺物本体に記録する注記作業に入った。

遺跡名については、すでに報告を行った当該牛頸ハセムシ窯跡群出土遺物についてＵＨＺという文字を用いていたこともあって、今回についてもこれを踏襲することにした。したがって26地区での注記例では、ＵＨＺ26－ⅠあるいはＵＨＺ26－Ⅱとなる。

次に出土した地区、ないしは検出した層であるが、灰原、窯体内ほかの例がもっとも多く見られた。さらに最終段には検出年月日を記入している。また遺物番号については、量的に尤大であり注記するのは不可能であるとの判断もあり、実測可能なもの、あるいは実測が完了したものについて記入することにした。復元接合についても、この注記と並行して行っているが、その作業は遅々として進まず、やむなく石膏復元を行った後に、接合固体が確認されるというようなこともしばしばであった。

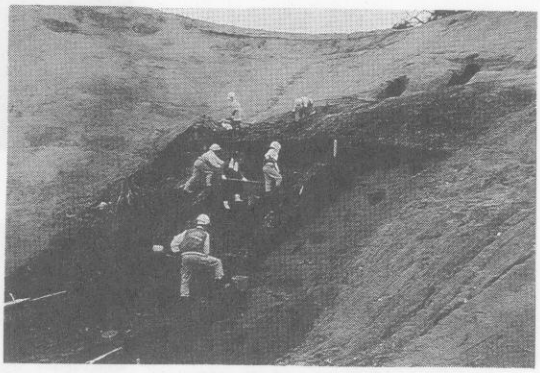
石膏復元は、まずできるだけ接合を重視して、それでも破片が確認できなかった場合に、行うことにした。したがって復元した遺物の復元部分は1／3を越えることができないようになっている。しかし特殊な形状のもので破片が見出せなかったものについては、やむなくその制限

を越えているものも見られる。この復元されたものについて、写真撮影を依頼しているが、同一器種のものについては、必ずしも写真を省いたものもあり、一概にすべてを対象としたとはいえない。

実測作業については、参加者を中心にして、できるかぎり多くに人間が対応することにした。しかし実測図という性格から、一定の基準による検査をパスしたもののみを図化の対象としてレイアウトしていった。

従って、本書に示された実測図は、全体で行った作業のすべてのものでないことが明らかであり、その点ご了解頂きたい。また歪や欠損による遺物の変形については、できるだけその原因が明らかなものについては、完全な形状のものに戻して、あるいはその形状が必ずしも復元できないものは、そのままの形状で図化している。さらに細かな観察の記録については整理した形で、後の観察表にまとめている。

最後に原稿については、調査担当者によって作成し、それを編集者がさらに校訂するという段階をへて印刷に付した。この点、各項目の当初執筆者の意図を反映していない部分があったとすれば、編集者の不徳の致すところである。





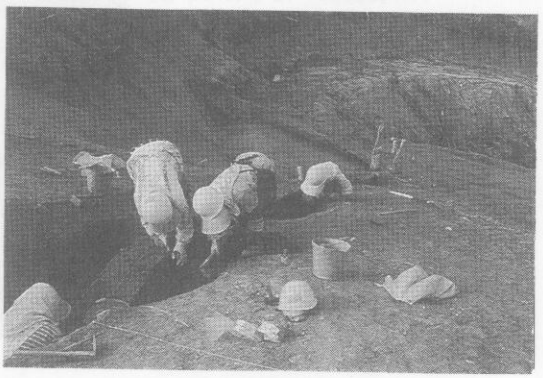


図6　灰原検出状況

5．日誌抄

平成4年（1992）

9月24日　26地区として確認されている2基の窯を、左よりⅠ号窯、Ⅱ号窯とする。26地区のⅠ・Ⅱ号窯の窯体検出作業。窯体内セクションの設定と写真撮影。Ⅱ号窯の床面には、置き台が、ほぼ全面にわたってみられるものと観察

される。27地区の灰原は確認しているが、窯体は未確認。灰原からは、甕片、蓋、杯が出土している。28地区の窯体検出作業終了。割り付け、たちわり作業を開始する。

25日　26地区のⅠ・Ⅱ号窯清掃、灰原の検出と地区設定（A～F区）、写真撮影。午後より26－Ⅰ・Ⅱ号窯の割り付け、実測。27地区の窯体確認作業、表土が厚いため未確認。灰原は広範囲に確認。28地区窯体の実測、レベリング、たちわり、灰原検出作業。

26日　26地区の灰原検出、たちわり作業。Ⅱ号窯の遺物取り上げ。27地区のユンボによる掘削と窯体検出作業。28地区のたちわり、灰原セクションの清掃、写真撮影。たちわり、灰原セクション実測。平板実測。

27日　26・27地区の平板測量、灰原検出作業とたちわり。28地区の灰原検出作業、灰原下層より遺物を多数検出。

28日　26・27・28地区の平板測量。26地区の灰原遺物検



図7　調査状況（清掃）



図8　熱残留磁気サンプリング状況

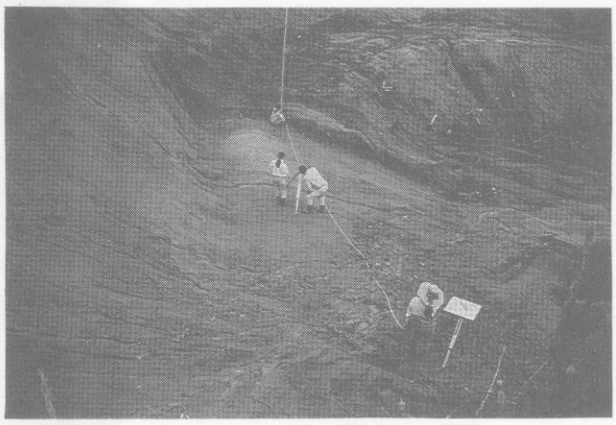


図9　平板測量状況

出（D・E・F区終了）。平板測量作業終了、たちわり実測。28地区の灰原遺物検出作業終了。

29日　午前中は雨のため作業中止。午後より作業を行う。26地区灰原（A区）遺物検出作業とD・E・F地区の清掃、写真撮影。27地区の平板測量と窯体の検出、ほぼ終了。28地区は作業を行っていない。

30日　26地区灰原A、B、C区の遺物検出セクション実測。27地区の窯体の割り付け、実測、たちわり作業と灰原の遺物検出、灰原は全体的に薄い。

10月1日　26地区の灰原セクションの実測、灰原B区の遺物検出作業。27地区のたちわり、実測作業と灰原C区の遺物検出作業。26～28地区の考古地磁気測定のサンプリング。

2日　26地区の灰原遺物検出作業。27地区の灰原セクション、たちわりの実測



図10　27地区調査地遠望（航空写真）

3日　26・27・28地区の全景、遠望写真撮影。26・27（C区）地区の灰原遺物検出作業。

4日　道具の撤収完了

21日　重機による確認調査中新たに窯跡1基を確認。29地点とし、遺構名を29－I号窯跡とする。

28日　器材搬入。調査開始。

29日　灰原、焚口部を除いて掘り終わる。窯跡左側に土坑があって、完形の蓋杯が出土。写真撮影。

30日　I号窯全景写真撮影。割り付け。灰原の主軸の西側を掘り上げ、断面写真撮影。

11月2日　29地区実測作業続行。

4日　たちわり作業、写真撮影、実測。平板による地形測量。焼土坑実測。

5日　器材撤収。

（舟山、井山、安井、中村）

第3章　窯跡の調査

1．概　　観

牛頸窯跡群は、福岡県大野城市、太宰府市、春日市にまたがる丘陵部に位置する九州地域最大の須恵器生産地域である。それらの調査は当初は開発面積に対応しての部分的な調査が細々と行われていたに過ぎなかった。

しかし大規模開発の全国的な展開は、当該地域にも波及し、牛頸中通り窯跡群の調査をはじめ、福岡県による牛頸ダム建設に伴う大規模な調査、さらには牛頸窯跡群ハセムシ地区に対する大規模住宅開発に伴う調査、牛頸地区区画整理事業に伴う調査など、近年の牛頸地域に対する開発に対応する発掘調査は目白押しに実施されてきた。

今回の調査の対象となったハセムシ窯跡群は、牛頸窯跡群の南部に位置する一支群である。当該牛頸ハセムシ地区窯跡群に対しては、昭和62・63年度に開発予定地区の山林の状態のままでの分布および発掘調査を行った。その成果については、報告書の刊行によって、すでに完了しているところである。また、これ以前の調査についての概略、あるいは牛頸窯跡群の若干の研究史についても、既刊報告書にまとめている。

今回の調査（平成4年9～10月）は、本格的造成工事の開始後に、窯跡などが確認された場合には調査を行うという協議に伴って、予定地区で新たに検出された26・27・28・29地区を対象に行ったも



図11　26地区遠望

のである。調査の対象となった遺跡の内訳は、須恵器窯跡5基と窯跡状遺構（焼土坑）1カ所である。

以下、各地区の調査結果について記述することにする。

2．各地区の調査

（1）26地区の調査

① 分布の状況

26地区は、昭和62年の調査地域であるハセムシ18地区の所在した、同一丘陵の北側東斜面に位置する。焚口の標高は138m前後をはかる。表土を除去した段階で、灰原が明瞭に確認できたが、窯跡の本体そのものは地下に埋まっており、表面観察では確認できなかった。やがて機械掘削が完了後、人力によって表土を除去したところ、丘陵東斜面中腹で、等高線を切るように2基の窯が、わずかな段差は認めるものの、ほぼ平行に並んで検出された。

両者ともに焚口から奥壁まで、ほぼ完全な状態で残っていたが、調査の進行上危険を除去するため天井部を除去した。いずれも焚口前方の前庭部の保存状態も良好であった。

東側に位置する窯跡を26－Ⅰ号窯、西側の窯跡を26－Ⅱ号窯と呼称して、順次調査を進めることとした。

② 須恵器窯跡の調査

1）26－Ⅰ号窯

位置と状況

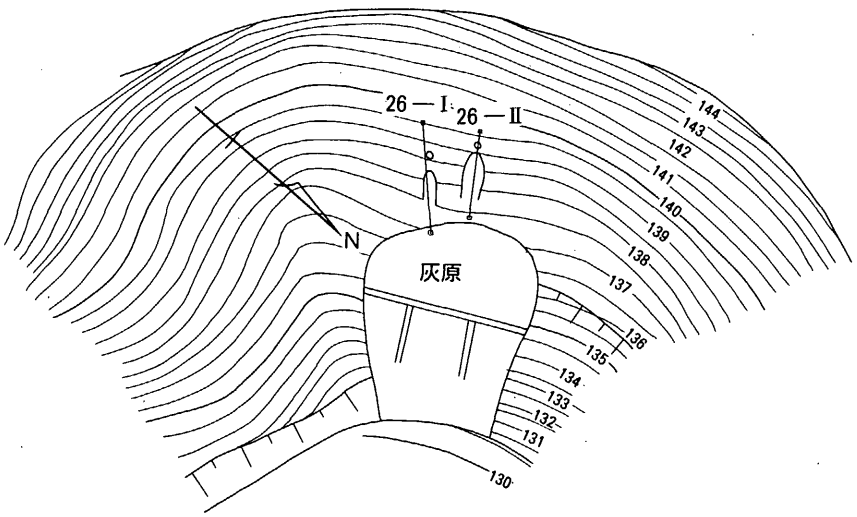


図12　26地区の地形図（S＝$\frac{1}{200}$）

丘陵東側の急斜面が、ややなだらかになった中腹部分に位置する。前庭部の標高は137.5m、煙道部は138.5mをはかる。主軸上の全長は3.4m、主軸方向はS—47° —Wを各々はかり、煙道付近の天井の一部を残している。灰原は保存状態は良好であるが、あまりにも両者が重複部分が多いことから、26－Ⅰ、Ⅱ号窯跡のいずれであるのか、判断がつかない可能性も十分予期されるところである。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口幅は約1.0m、傾斜変換点までの主軸上の延長は1.4mである。両側壁は焚口部分で斜めに削平された痕跡が見られ、その閉塞状況などは、全く明らかにできなかった。すなわち製品の窯体からの搬出に当該部分を削平して用いたものと考えられる。とくに左右の側壁の残存度合いが異なるのは、その大きな破壊が右側にあったことを示すものと考えられる。

燃焼部と焼成部の床面の交叉する角度は約155° をはかる。床幅は0.8～1.0mで、焚口から0.6m奥までは、床の幅がやや狭くなり、窯体内部の温度が逃げないように配慮されているようである。左側壁は主軸線上にほぼ平行であるが、右側壁は奥壁に向かって、外側に広がっている。側壁部分にはたちわりを設定していないため明らかではないが、左右の貼り壁の痕跡は若干ながら認められた。

床面部分では、主軸上のたちわりにより、焚口から奥壁にむかって0.6m付近まで黒っぽい茶褐色粘質土層が10～18cm、第2層に焚口から1.0m付近まで、遺物を含む黒色灰層が8～25cm前後堆積しており、焚口部に向かって厚くなっている。さらに下層には黒褐色土層が一部に認められ、次に黄褐色還元層と赤褐色酸化層が4cm、8～16cm前後の厚さでみられた。とくに後者の酸化層は焚口に向かって厚くなる傾向を示す。

B．焼成部

主軸上における長さは約2m、床面傾斜角は25～35° を測る。焼成部上部には幾つかの置き台が残存しており、下部の堆積土中からも床面から剥離した置き台が検出されている。たちわりA—A′では、床面では、黄褐色還元層から形成される床に補修の痕跡が認められなかったが、側壁は一部補修されていた。とくに右側の上部で、1枚、厚さ4cm前後の貼り壁が見られ、ほかの部分にもその痕跡がわずかに認められた。

C．奥壁、煙道部

焼成部と奥壁のなす角度は約100° を測り、床面基底線をたどれば、焼成部が次第に狭くなる形をとって奥壁へと続き、さらには煙道部へと続いている。煙道部は高さ約0.85mの残存をみるが、上部は削平されている。なお煙道部の直径は40cm（内径）をはかる。

前庭部

焚口から灰原方向に1.4m八の字状に広がった平坦面が認められる。右側では、Ⅱ号窯の前

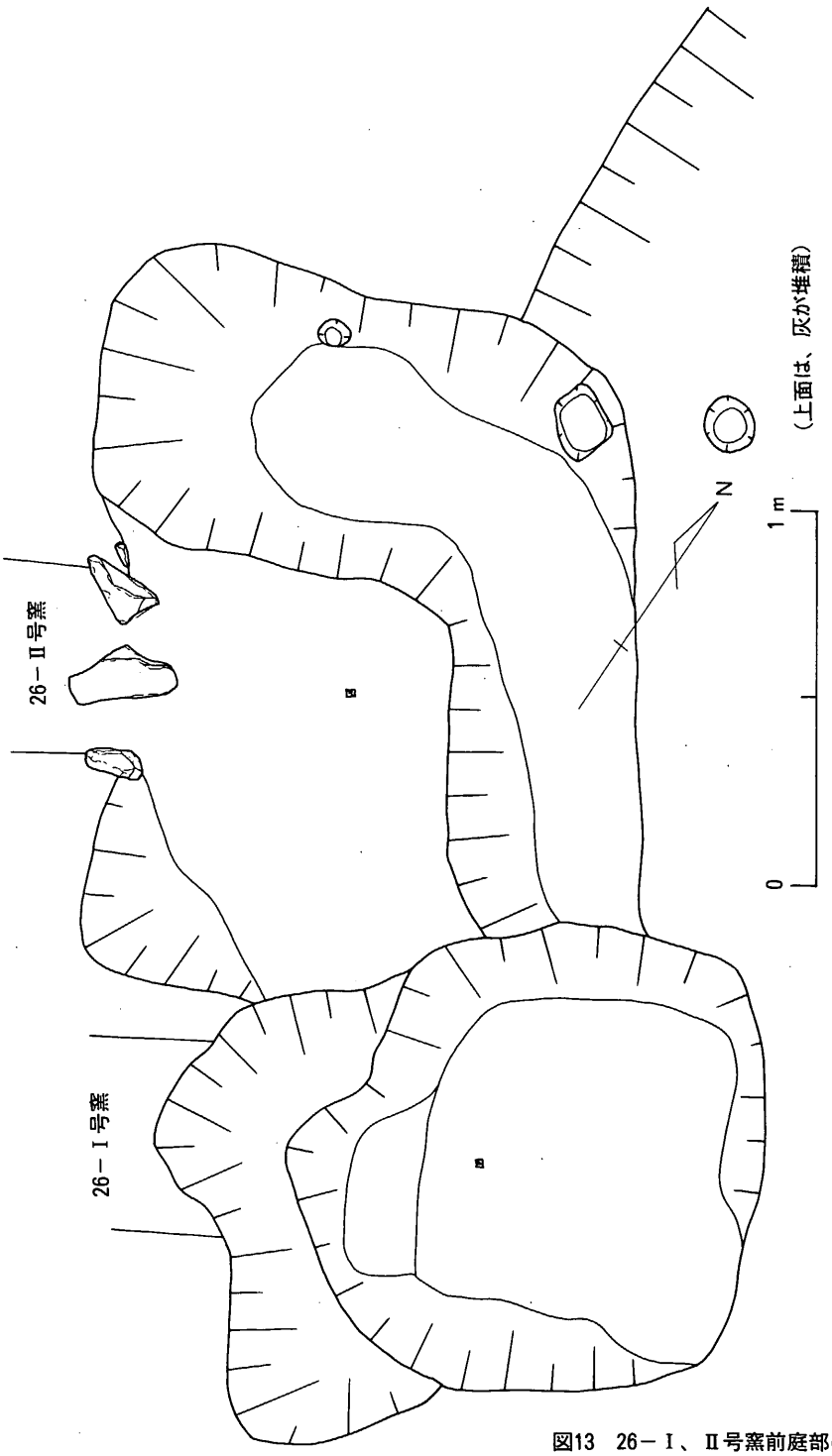


図13　26－Ⅰ、Ⅱ号窯前庭部の状態

庭部の一部を掘削し、一辺約2.4m、深さ0.4～0.8mをはかる方形の土坑を形成している。

灰原

前庭部より谷側に約20～25m、東西に約10mの範囲で、Ⅰ・Ⅱ号窯の灰原が認められる。内部からは、蓋杯、皿、壷などの須恵器の小型器種を主とする大量の遺物が検出されている。完形品に近い状態の遺物も多い。

Ⅰ号窯の主軸方向に設定した灰原セクションならび横断セクションの状態より、複数回以上の操業、焼成が考えられる。

遺物

灰原からの出土が大半である。器種は蓋杯が多く、皿、高杯、壷などが見られるが、とくに小型器種が多く見られる。また選別の基準が厳しかったせいか、廃棄された遺物が多いようである。

2）26－Ⅱ号窯

（位置と状況）

26－Ⅰ号窯と同斜面上の北西約1.3mに、ほぼⅠ号窯と平行して所在している。窯跡前庭部の標高は約137.7m、煙道部では約139.3mである。主軸上の全長2.7mを測るが、天井部は大半が崩落している。

（窯の構造）

A．焚口、燃焼部

焚口の幅は0.9～1.0m、傾斜変換点までは1.1mを測る。焼成部と燃焼部のなす角度は136°で、主軸方向はS—58°—Wを測る。床幅の基底線は、焚口より約0.7mの付近まで狭くなり、最も狭い箇所で約0.7mをはかった後、焼成部までは、ほぼ平行にのびている。

焼成部の床面は、ほぼ平に近く、10cm前後の黄褐色砂質土層が堆積していたが、主軸方向に設定したたちわりでは、床面の補修の痕跡は認められなかった。なお床面下層には4層が数えられ、外周の酸化層、還元層を除くと、床面あるいは灰層が残されるのみである。

B．焼成部

主軸上における長さは約2.4m、最大床幅1.1m、床面傾斜角は35～40°を測る。床面の基底線は、若干広がり気味ではあるが、ほぼ平行に上方奥壁までのびている。焼成部には、A—A′のたちわりを設定したが、床面、側壁とも3層の堆積状況を良好に確認したのみで、側壁や床面に対する補修の痕跡は、認められなかった。

埋土中より置き台と見られる馬爪状の粘土の焼き固まったブロックが多数検出されていることから、当該焼成部の床面には、置き台が設置されていたと考えられる。とくに床面下方部分では、上方部分から落下した置き台が折り重なって検出されたが、奥部では、整然と配列された当初の状態で確認されている。また置き台には、蓋杯の高台の明瞭な圧痕が見られるものも

あり、これが当該器種の焼成に供された可能性が濃いことを示している。ちなみに床面付近から検出された置き台の数量は49点を数えたが、灰原からはもっと多くの置き台及び破片を採集した。

C．奥壁、煙道部

焼成部と奥壁のなす角度は約140°をはかり、床面は焼成部から煙道付近まで平行にのびたのち、急に狭くなる形態をしている。煙道部は高さ0.8m、長さ0.2～0.4mの残存をはかる。上部に露呈している煙突の直径は0.4m前後を計る円形である。

前庭部

焚口より、ほぼ水平に東西1.7～南北2.4mの平坦面を形成している。その東部分より深さ0.5～0.1mの溝状遺構がⅠ号窯の前庭部にのび、それに削平された形をとっている。この溝状遺構の西部分より、直径10～25cm、深さ15～70cmのピット3個が検出されている。上層よりⅠ号窯の製品と推察される遺物が検出されている。

灰原

Ⅰ号窯の灰原と重複して所在しており、明確に両窯の灰原を区別することはできない。横断セクションの状態や前庭部の切り合い関係などについても輻輳しており、明確に区分することは困難である。

灰原の遺物は大半が須恵器で多数検出されているが、器種はⅠ号窯と同じく蓋杯、皿、壷などの小型器種が多かった。（井山、中村）

（2）27地区の調査

① 分布の状況

26号窯跡の位置する同一丘陵北側斜面から、検出された窯跡である。表土を機械掘削によって行い、ほぼ丘陵の谷部に面した斜面全体を除去したが、確認されたのは須恵器窯跡1基のみであった。なお上部を造成に伴う工事用進入路が設置されており、当該部分の調査は一部を除いては出来なかった。

② 須恵器窯跡の調査

1）27号窯

（位置と状況）

26地区より北約300mの同一丘陵、北側斜面に所在する。前庭部の標高は141m、煙道部の標高は143m、主軸上の全長は8.0m、主軸方向はS—20°—Wを測る。26地区のⅠ・Ⅱ号窯に比較してみると、圧倒的にゆるやな丘陵斜面に構築されており、窯体の規模もはるかに大きい。窯体部分の遺存状態は比較的良好であるが、灰原の大部分は、伐採工事に伴う道路造成のために削平されており、その痕跡の確認しか出来なかった。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口部の床面は幅１ｍをはかり、ほぼ平行に燃焼部からゆるやかにのびている。焼成部との傾斜変換点は、床面の傾斜が全体的にゆるやかなため明確には認められないが、側壁の状況より判断すると、焚口より1.6ｍ前後に求められると考えられる。床面の傾斜角度は、ほぼ水平にちかい。当該部分に設定したたちわりＣ－Ｃ’によると、両側の側壁の残存度合いは、あまり良好とはいえないものがあるが、少なくとも左側壁では１枚、２㎝前後を確認することが可能である。その周囲には黄褐色還元層、赤色酸化層が５～15㎝の厚さでめぐっているのが認められる。なお左側壁の状況から右側にも貼り壁があったものと考えられる。なお床面下層については、ほとんどが製品の搬出時に削平され、わずかに床としても用いられた可能性がある砂質の黄褐色還元層２～４㎝が確認されたに過ぎない。

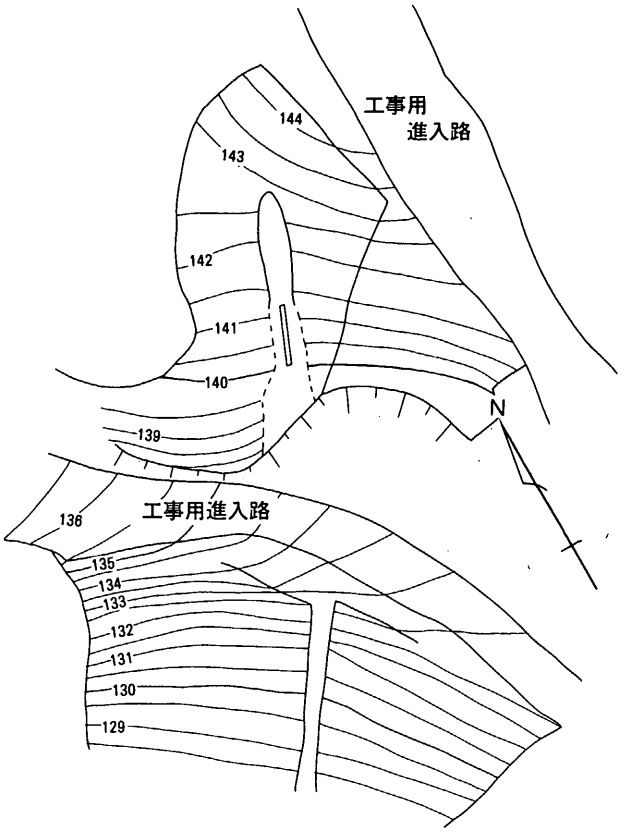


図14　27地区地形図（S＝$\frac{1}{200}$）

B．焼成部

床面の基底線は、燃焼部よりほぼ平行に約１ｍ程のびた後、左右に広がって、焼成部中位で最大幅をなし、やがて徐々に狭まって奥壁部分に至るという比較的細長い形状を示している。主軸上の延長は5.5m、最大床幅1.3m、傾斜角度18～22°を測る。

焼成部には２か所にたちわりを設定して側壁や床面の状態を検討している。

燃焼部に近いたちわりＢ－Ｂ’では、左右の側壁の補修状況が各１枚、厚さ４㎝前後であることが明らかとなる。しかし調査中の側壁の破片などから明らかに数回の補修、張り壁が行われていたことが容易に推定される。窯体の構築されていた基盤土の状態は、花崗岩のバイラン状態の土質であり、崩落が起こりやすい状態でもあった。事実調査途上でも度々の崩落によって、側壁の大半部分を失っており、その状況から当該実測図に示されたのは、最小限のものと判断して良いだろう。

床面下層の状況は、合計３層を数えるが、外周の赤色酸化層の４～６㎝は、床として利用されていないものであり、除外しなければならない。また次の第２層についても、還元層と酸化層の中間的なものであり、床面としての利用は考え難い。したがって床面としては、灰白色砂層を用いていたと考えられる。

奥壁部に近いたちわりＣ－Ｃ’では、左右の側壁が各２枚ずつ、厚さ６～８㎝が確認された。また床面では４層が確認されており、そのうちの外周２層を除く２層が床面として利用された可能性のある部分である。この２層はいずれも砂質層であり、当該地域あるいは、窯跡の床面としてよく用いられる質の土砂を用いている。これらは、遠方から調達したというものではなく、近接地域からの山砂を搬入して用いたものと考えられる。また外周部分に認められる酸化層であるが、右側にやや大きく偏よって見られるが、これは土質の差異に伴うもので、窯体内部での火力の変化に伴うものではないと考えられる。

また奥壁部分に設定している縦断たちわりから観察すると、奥壁に向かって大きく２ないし３度の床面の作り替えが行われていることが分かる。すなわち最初の段階は焼成部からなだらかに床面傾斜が上っているが、それに土砂を加えてやや傾斜を急に変更させ、さらに次の段階でも同様に土砂を加えて床面傾斜を変えている。さらに上方部分には、奥壁が見当たらず、溝状の落ち込みに連なっている。下層部分の第１次焼成の場合には奥の溝状遺構の奥壁に該当する部分に焼土面が確認されることから、この溝状遺構を利用していることが明らかであるが、上部の場合には、その痕跡が明瞭には確認されず、果たしてそのものが利用されていたのかどうかは明らかではない。

この溝状遺構については、当初排水溝として考えられていたようであるが、近時は焼成段階での炎の調整に用いたと考えられるダンパー的なものと理解することが多くなってきた。実際面での操業期間中に窯体内部温度の調整は困難であり、このような施設の存在によって一部可能になったものと考えられる。また当該窯体内部に見られる床面の作り替えは、この施設の利用に伴っての改造あるいは、施設の利用を行わないことからくる改造の、いずれかと考えることができるだろう。

ところで当該窯跡では、その窯体の大きさから判断して、大型甕の焼成用に構築された窯であると考えられるが、床面に残された遺物は、ほとんどなかった。側壁は地山面より深い所で約１ｍ程掘り込まれていることから、天井部は高いところで1.3ｍ程度あったと考えられる。

Ｃ．奥壁、煙道

焼成部と奥壁のなす角度は約100°である。煙道は天井部が欠失しており、全く残存していない。煙道部床面より0.8ｍ上方の右煙道側壁部には、直径0.3ｍの焼成不良の皿が放置されていた。その出土状態より、当該窯で焼成された製品の残存ではなく、意図的に置かれていた可能性もある。煙道の閉塞用に置かれたという考えも一部にあったが、その可能性は窯体の構造

を考えれば全く成立しないことが明らかである。なおその皿は、通常当該古窯跡群で生産されている須恵器と形状は異なっていないが、何らかの祭祀をおこなった後に放置された可能性もある。煙道部から西方には、幅0.7～0.2m、検出された延長5.6m、深さ0.3～0.6mをはかる素堀の溝状遺構がのび、煙道上部と接合している。この用途については、すでに焼成部の該当箇所で記述したが、その先端部分は従来の説のように排水の用に供されたことは否定できないだろう。

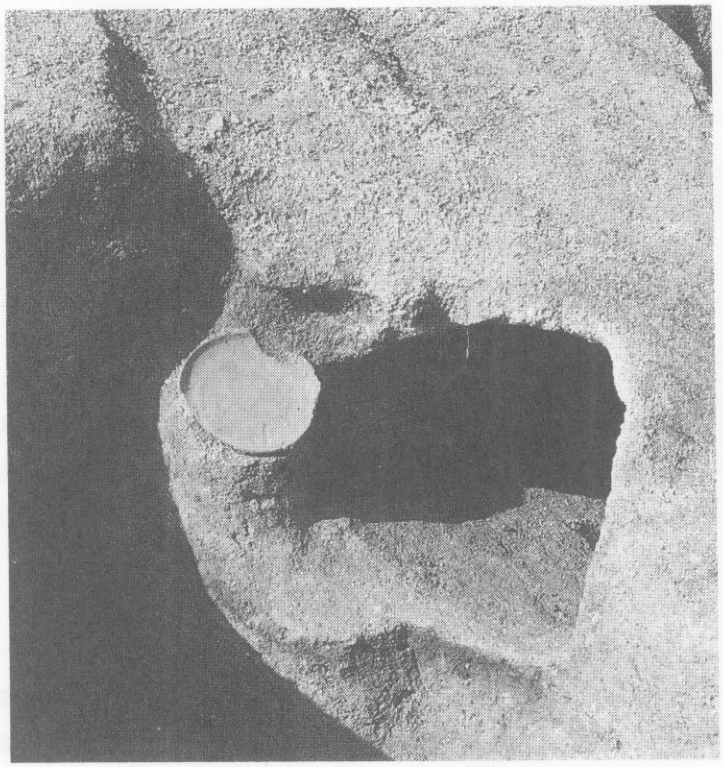


図15　煙道部の状況

前庭部

前庭部は、灰原部分の灰が残っている状態では、ほぼ水平な状態でテラス面を形成していたが、灰層を除去すると、かつての丘陵部に大きくピットを掘り込んだ状態の凹凸面が検出された。なお当該前庭部より、純粋な灰原までの距離は約２ｍである。

灰原

前庭部より深さ約1.0mの落ち込みが所在し、そこに灰が堆積して、灰原が形成されていたが、本来の灰原は、より下方の谷へ流出している。標高138mをはかる部分より下方の谷側に、流出した灰原は、大部分が造成工事の道路によって削平されているが、北側斜面の下方、標高134m前後をはかる斜面付近には、一部灰層の遺存が認められた。

遺物

遺物には、須恵器の甕片、蓋杯などの種類が見られた。量は少なく整理箱２箱程度を数えたに過ぎなかった。遺物の型式、時期から推定すると、26、28、29地区の窯の出土遺物よりも時期が溯るようである。また谷下方付近の灰原セクションは、層位が撹乱によって逆転していると考えられる。（井山、中村）

（３）28地区の調査

① 分布の状況

伐採によって26地区からは明瞭に当該地区を見ることができたが、かつては全く視界のきかない部分であった。26地区からは、北東に位置し、丘陵を2つ越えることになる。そのもっとも28地区に近い丘陵上、東斜面には22地区が位置しており、当該28地区とは対照的な丘陵面となる。調査の結果は、須恵器窯跡1基と土坑1か所が検出された。窯跡は丘陵斜面が急であったことから自然流出のため一部失われた状態であった。

② 須恵器窯跡の調査

1）28号窯

（位置と状況）

26地区の北東に所在する丘陵の南側斜面に28地区が位置する。28号窯は、斜面中腹部の標高150.5～150.0mの所に所在している。煙道、奥壁、天井部分は自然流出によって失われた状態で検出された。残存長は2.2m、主軸方向N—76° —W、傾斜角度は上方ほど急になり、焼成部中程で傾斜角度35° を測る比較的小型の窯である。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口は右半分の床面が欠失しており、その形状は明らかにできない。床面幅は約0.8m、若干広がり気味に上部へとのびていると推察される。焚口にはその側壁部分の強化、あるいは閉塞に用いられたと見られる30cm四方の石が検出されている。恐らく、当該石は側壁部の強化のため両面に配置されていたものと考えられる。床面はゆるやかに上部にのびており、燃焼部と焼成部の傾斜変換点は明確ではない。なお床面の角度は約158° である。

B．焼成部

床面は、燃焼部よりゆるやかに広がりながら、上部へとのびている。主軸上の残存長は約2.4m、最大残存床幅1.1mを測る。燃焼部より上方1.6m付近より奥壁に向かって、比較的角度をもって狭まっている。たちわりA—A′による観察では、左側壁に1枚の貼り壁補修が認められ、当該部分の厚さは2cmをはかる。

C．奥壁、煙道

奥壁の位置が推定できる範囲は残存していない。従って、その構造は明らかにできない。

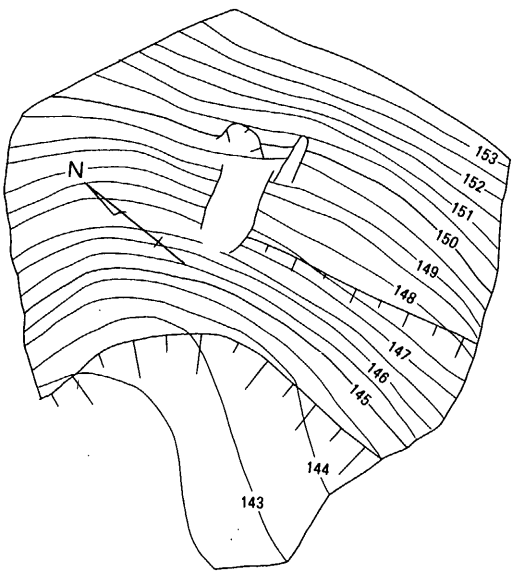


図16 28地区地形図（S＝$\frac{1}{200}$）

前庭部

焚口と下方部から急な斜面となっており、前庭部は確認できない。

土坑・灰原

窯の左側壁部に接して、南北約4.0m、東西約2.4m、深さ0.2～1.0mを測る不定形の土坑内に灰層が堆積しており、その内部から遺物が検出されている。灰原は土坑下方、標高146.5m付近まで幅2.6mの範囲で所在している。

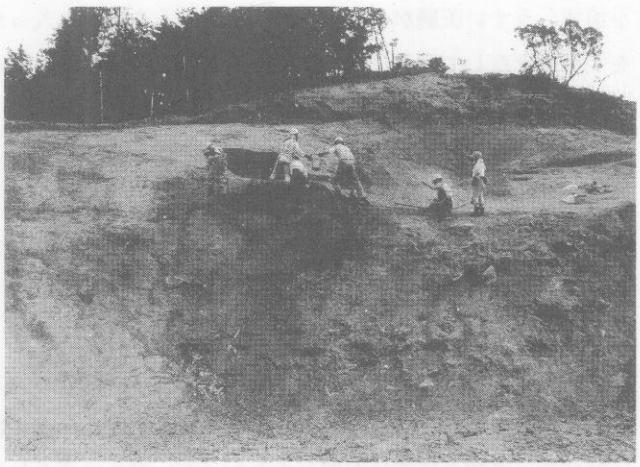


図17　28地区調査状況

遺物

土坑部分および灰原等から出土した須恵器である。器種には蓋杯が大半を占めており、大型の器種はほとんど確認できない。（舟山、井山、中村）

（4）29地区の調査

①　分布の状況

26地区の北西約50mに位置する。26、27両地区はほぼ南北に伸びる主丘陵から東側に派生する小丘によって作り出された小支谷に立地するが、29地区は主丘陵の西側に派生する尾根によって作り出された小谷の南東斜面に位置する。重機による確認調査を東側にある小支谷を南から順に行い、北端まで達した後西側小支谷を北から南へと行ったため、26地点に近いのにもかかわらず最後に確認されることになった。確認されたのは窯跡1基と土坑1基である。高所にあるため、牛頸川やその流域の平地を見わたすことができる。

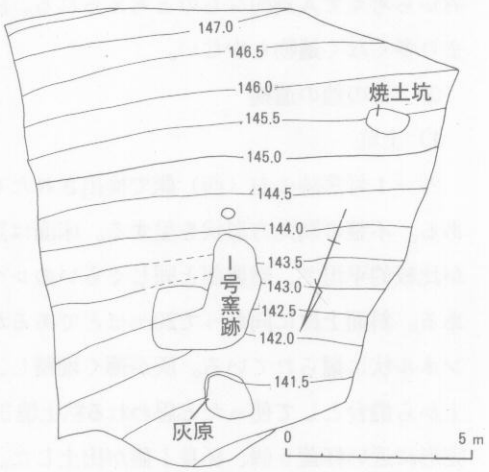


図18　29地区地形図（S＝$\frac{1}{200}$）

②　須恵器窯跡の調査

1）29－Ⅰ号窯

（位置と状況）

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口の幅は約0.7m、傾斜変換点までに長さ約1.1mである。燃焼部と焼成部のなす角度は約165°を測る。床幅は0.7～0.9mで焚口から0.4m奥まではやや狭くなる。左側壁は内側に弧を描くが、右側壁は主軸にほぼ平行である。床面はほぼ

平坦で、うすい灰層がのる。また、焚口からやや奥へ入った床面上で粘土塊が検出された。熱を受けて赤変しており、閉塞時に使用したものではないかと考えられた。

B．焼成部

主軸上における長さは約2.2m、床面傾斜角は始めゆるく約20°、上位は約45°を測る。床面は最大0.9mの幅を持つ。左側壁は徐々に内側に向かってせばまってくるが、それに合わせるようにして右側壁が外側に開いていくため、結果としてあまり幅が変わらない。しかし、プランが右に変形した形となる。

C．煙道、奥壁

焼成部床面と奥壁のなす角度は約140°を測る。焼成部のプランがゆがんだ隅丸方形状を呈するが、煙道はその一隅から立ち上がるような形状となる。煙道は円筒状を呈し、ほぼ垂直方向に伸びる。当初の煙道は上端がやや左（東）寄りに造られているが、より中央にくるように右寄りに改修している。その結果、左側に貼り付けた部分が残る。煙道は約0.7mの深さを残している。

前庭部

焚口から前方へ0.35m平坦部分が続く。この部分が前庭部と思われる。

灰原

ほとんど流失していたが、前庭部端から0.5m下がった部分に径約1.2mの円形の灰の堆積部分が見られたため、掘り下げたところ浅い土坑状の窪みとなった。しっかりしたものではないが、位置から考えて人為的なものと考えられる。灰はあまり多くなく遺物も少ない。

③　その他の遺構

1）土坑

29－Ⅰ号窯跡の左（西）側で検出されたものである。不整の隅丸方形状を呈する。床面は窯体側が比較的平坦で、燃焼部と同じぐらいのレベルである。斜面上位に向かって20cmほどであるが、トンネル状に掘られている。灰が薄く堆積し、その上から焼台として使ったと思われる粘土塊3個と、完形に近い杯蓋5個、杯身1個が出土した。杯蓋は1個で、上向きで、その他は裏がえしで出土し

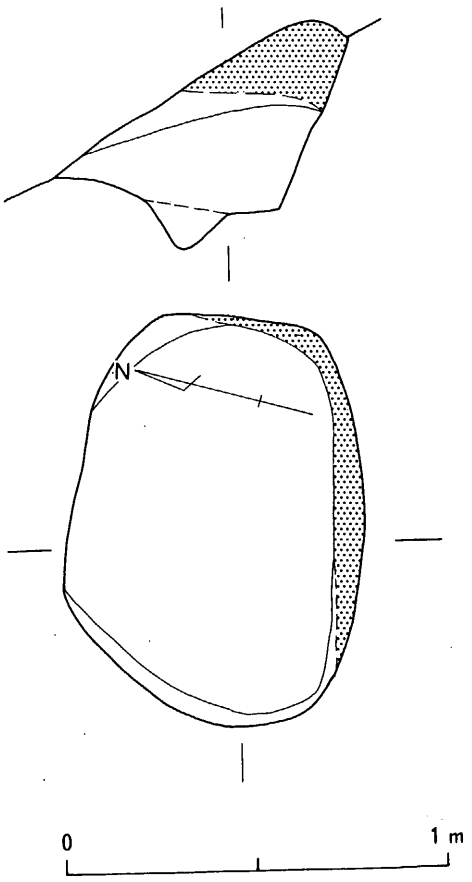


図19　焼土坑実測図

た。杯身は正位置で検出された。何らかの形で作業場として使われたものと考えられる。

2）焼土坑

29－Ⅰ号窯の煙道から約4.5m南々西の方向で、レベルとしては約1m高い位置で検出された。おおむね楕円形を呈し、1.1×0.75mの大きさである。床面はしっかりとしておらず、深さは最も深い所で約0.4mを測る。斜面上位側に当たる南壁と西壁が熱のため赤変している。遺物の出土はなかった。

（舟山）

第4章　出土遺物

1．概　観

今回の調査は、窯跡をその対象としたことから明らかなように、出土遺物の殆ど全ては須恵器である。またその大半は窯体そのものからの出土ではなく、いずれも失敗品の捨て場ともいえる灰原からのものであった。

またハセムシ地区では、最終段階の調査ということにもなる。しかし今回の対象となったハセムシ26地区、27地区、28地区、29地区では、既に遺構の部分で触れたように、遺構そのものの残りが不良で、かつそれらに関連する灰原も同様に不良な残存状況であり、そこでの観察が全体を把握するということは到底不可能な状況である。

従って、最も良好な遺存状態であった26地区を例にとって出土遺物について若干の記述を行いたいと思う。

2．26地区の須恵器について

26地区ではパンコンテナ合計140箱にものぼる量の遺物が採集された。これらのうち、ほとんどは須恵器であり、わずか数片土師器が含まれていたにすぎない。

検出されたすべての器種をあげると、蓋杯、高杯、平瓶、短頸壺、長頸壺、壺、鉢、皿、杯、である。これらのうち、蓋杯が大半を占めており、わずかにその器種では破片のみが確認されたにすぎないというものも多い。とくに皿を除くと、ほぼすべてが点数以内という破片数しか確認されていないものである。

また出土した須恵器の破片をほぼ80%以上、個体区分をした結果では、表1のようになる。圧倒的に蓋杯が多きを占めている事実は変わらないが、場所によって各々の割合が異なるのは注目されよう。

表1を見ると、A、B、C、D、Eの各灰原での蓋の量が多いことに気づくだろう。この地区はⅠ、Ⅱ号窯跡がともに焚口から失敗品を掻きだしたとすると、丁度この部分に集中することになる部分である。

C区では、蓋と杯が割合がほぼ1／2ずつであるのに対し、他では蓋が多くを占めるような傾向を示す。これらは、同じ破片であっても蓋のほうが、細かく割れている事を物語っているようである。また他の器種については、Ⅰ号窯跡焼成部での検出が最も多いことは、当該窯跡

でそれらが生産されていたことを示しているにほかならない。このことは、当該窯跡に近い灰原の区画から、同じく蓋杯以外の器種が出土していることからも証明されるであろう。

ちなみに窯跡と灰原の各地との位置関係は、図20に示したごとくであり、前庭部は、いずれも焚口前方のわずかな平坦部分を示している。

次に灰原A、B、Cの各地区の須恵器の焼成状況についても、任意に選びだしたパンコンテナの相当量から、分類したものが表2である。ここでは焼成度合を堅、良、甘いの三者に区分している。これは堅は文字どおり堅く焼け締まったものを示しており、一般的な須恵器といわれるものを示している。金属音を発するのもこのように焼成されたものである。次の良としたものは、やや堅く焼けているというもので、色調にこだわらず、触ってみて表面の土が手に付かない程度のものを示している。いずれも複数の人間によっており、個人差による分類の差異はないように心掛けている。

表2によると、やはり器種的には蓋が多いことが目立っている。その背景についてはすでに記述したので、ここでは繰り返さない。なお表3で見ると、全体に焼成度合の軟質なものあるいは甘いものは40%前後であることがわかる。Ⅰ号窯跡の製品が多く含まれているA地区灰原では焼成良好な

表2　26地区遺物の出土地区分布と割合

破片数、(　)内は%

器種名 / 出土地区	蓋	杯	その他	合　計
A区灰原	2691 (86)	418 (13)	8 (1)	3117 (100)
B区灰原	874 (94)	51 (5)	6 (1)	931 (100)
C区灰原	2445 (55)	1955 (44)	26 (1)	4426 (100)
D区灰原	1852 (63)	1057 (36)	4 (1)	2913 (100)
E区灰原	2088 (80)	510 (19)	3 (1)	2601 (100)
F区灰原	181 (57)	134 (42)	2 (1)	317 (100)
Ⅰ号室前庭部	87 (62)	51 (36)	2 (2)	140 (100)
Ⅰ号室焼成部	42 (30)	30 (21)	68 (49)	140 (100)
Ⅱ号室前庭部	376 (98)	3 (1)	2 (1)	381 (100)
合　計	10636 (71)	4209 (28)	121 (1)	14966 (100)

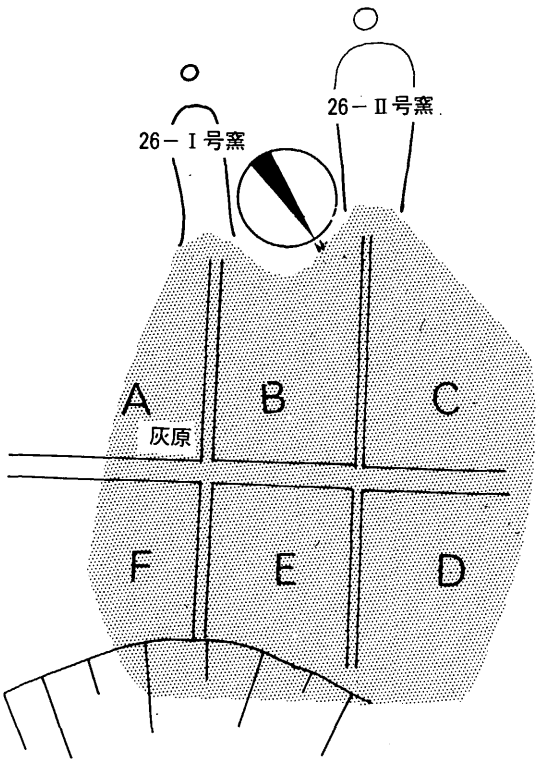


図20　26地区窯体と灰原各区の配置

表3　焼成度合と出土地区、器種の分布　(　)内は各々の器種内での%を示す

器種と度合 / 地区	蓋			杯			その他			蓋杯判別不能			合計		
	堅	良	甘	堅	良	甘	堅	良	甘	堅	良	甘	堅	良	甘
A地区灰原	231 (33)	275 (40)	184 (27)	38 (32)	45 (38)	36 (30)	1 (14)	3 (43)	3 (43)	157 (29)	152 (28)	232 (43)	427 (31)	475 (35)	455 (34)
B地区灰原	96 (59)	25 (16)	40 (25)	20 (40)	12 (24)	18 (36)	2 (67)	− 	1 (33)	31 (30)	9 (8)	65 (62)	149 (47)	46 (14)	124 (39)
C地区灰原	1190 (52)	628 (27)	492 (21)	144 (27)	130 (24)	269 (49)	23 (77)	4 (13)	3 (10)	288 (15)	196 (11)	1357 (74)	1645 (35)	958 (20)	2121 (45)
合計	1517 (48)	928 (29)	716 (23)	202 (28)	187 (26)	323 (46)	26 (65)	7 (17.5)	7 (17.5)	476 (19)	357 (14)	1654 (67)	2221 (35)	1479 (23)	2700 (42)

ものと不良なものが30%前後で、ほぼ等しいという結果が示されている。一方その位置関係から、Ⅱ号窯跡の製品が多く含まれているはずのC地区灰原では、45%が焼成不良という状況を示している。焼成良好な製品は35%前後である。しかし器種で見れば必ずしも同じ状況ではなく、蓋では良好なものが52%を占めている。

B地区灰原は、2基の窯から出される製品の多くが集まっている部分である。ここでの傾向はA地区灰原に近似しており、製品としては焼成良好なものが47%も見られるということを示している。

このように灰原の位置関係にあっても微妙に、そこに堆積する遺物の性格や種類が異なることがわかり、興味深い。さらにいえば従来このような分析を行ってこなかったため、製品がどのように分布しているのか、あるいは焼成の堅いもの軟らかいものの分布がどのようになっていたのかは明らかではなかった。

本稿によってその幾分かは明らかになり、さらに今後の分析次第では、焚口からどのように、どの方向に排出されていたかのかは少なくとも明らかにすることができるだろう。いずれにしても、過去人類の生活文化の復原という大きな命題の考古学にとって、先ず大切なものは目の前にある、遺跡、遺物という事実そのものの解明であり、そのものの手法なりの復原から始めねばならないだろう。

3．器種について

すでに記述したように、今回の調査対象となったハセムシ26地区の26－Ⅰ、Ⅱ号窯2基の窯跡からは、蓋杯を中心とする須恵器が大量に出土している。それではそれらの蓋杯がいずれも同じ名称で呼ばれた同一器種であったのだろうか。恐らくは、口径や器高の差という法量で区分、あるいは微妙に異なっている口縁部のカーブなどは、明らかに同じ名称で呼ばれた同じ器

種と言うには問題が多いと考える。

すなわち『延喜式』主計などの文献史料によっても、法量の差によって、例えば甕にも実に様々な種類があることを我々は知っている。このことから、当該蓋杯についても多分に多種類の名称あるいは器種名称があったと考えられる。不幸にも現在まで、その名称が伝えられていないかもしれないが、その復原の端緒として、法量あるいは形状から当該ハセムシ26地区での須恵器、蓋杯が幾種類あるのかを考えておきたい。

先ず法量から区分すると図21～23のようになる。蓋杯が各々セットとして把握出来れば申し分ないが、残念ながらこの点は、問題がまだ有るのでここでは別々の器種として見ることにした。これによって口径などの差によって、前庭部では、Ⅰ号窯は蓋7種類、杯身2種類、Ⅱ号窯では、蓋6種類、杯身3種類であった。A区灰原は、Ⅰ号窯の製品の可能性の濃い地区であるが、ここでは蓋8種類、杯身5種類であった。B区灰原ではⅠ、Ⅱ号が、混在するとみられるが、蓋8種類、杯身11種類となる。またC区灰原は、Ⅱ号窯が多くみられる地区であり、蓋13種類、杯身10種類となる。

次に形状から見ると、金属の写しと見られる器種とそうでないものの二者に大別されよう。さらに丸みのあるもの、あるいはないもの、すなわち平らに近いものやそうでないものなど区分の種類はいくつかあろうが、このように外観からの形状によっても同様に区分の材料として

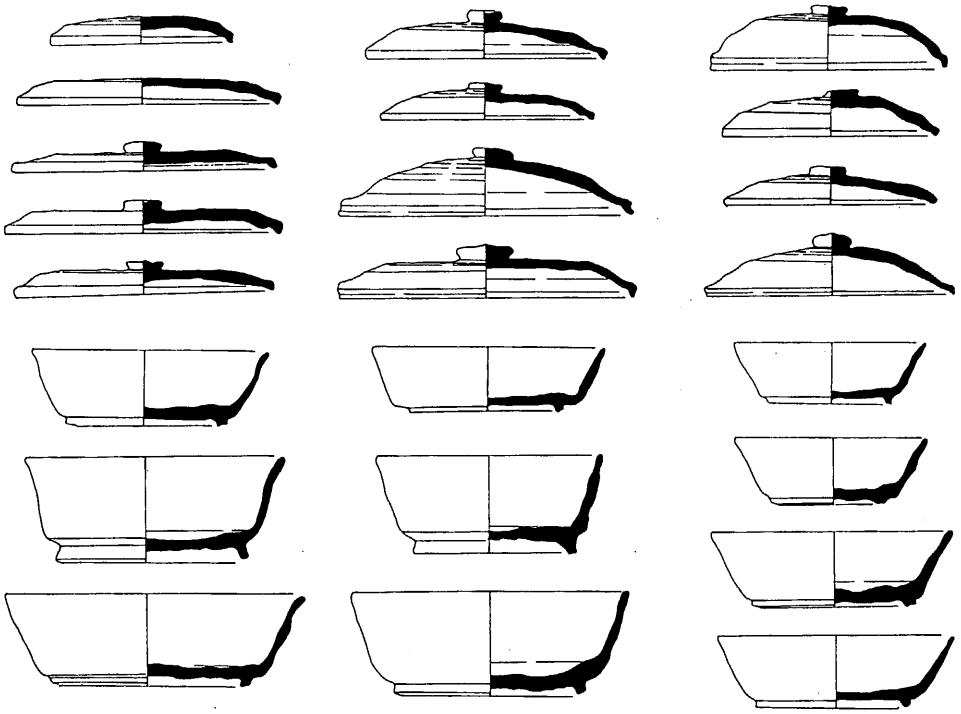


図21　26地区C区灰原出土蓋杯の種類

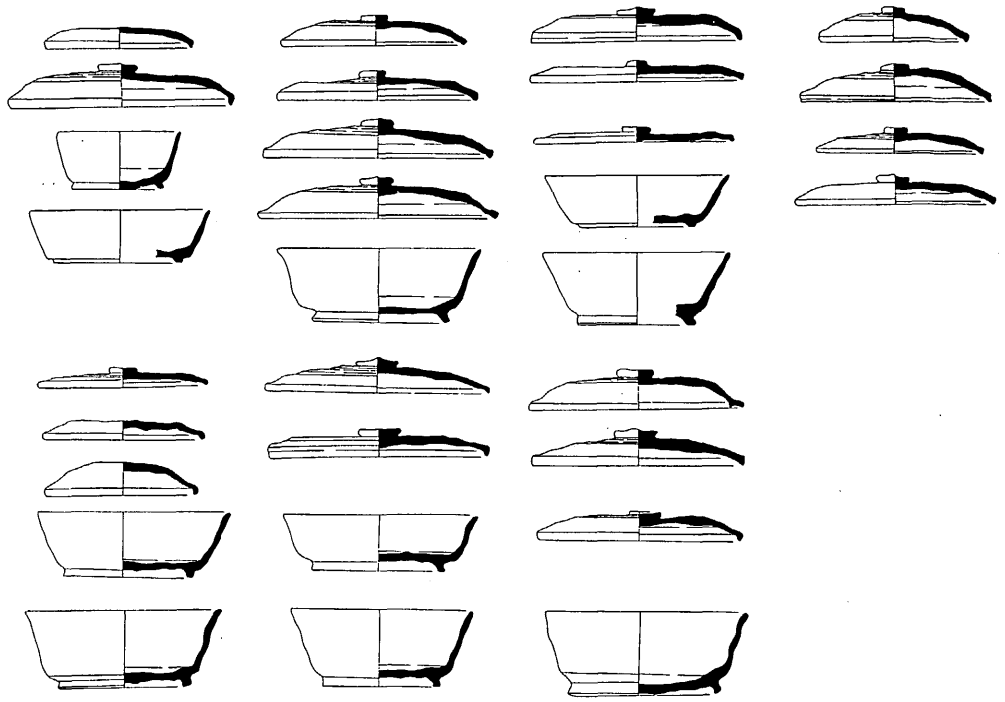


図22　26地区Ａ区灰原、26－Ⅰ、Ⅱ号窯前庭部出土蓋杯の種類

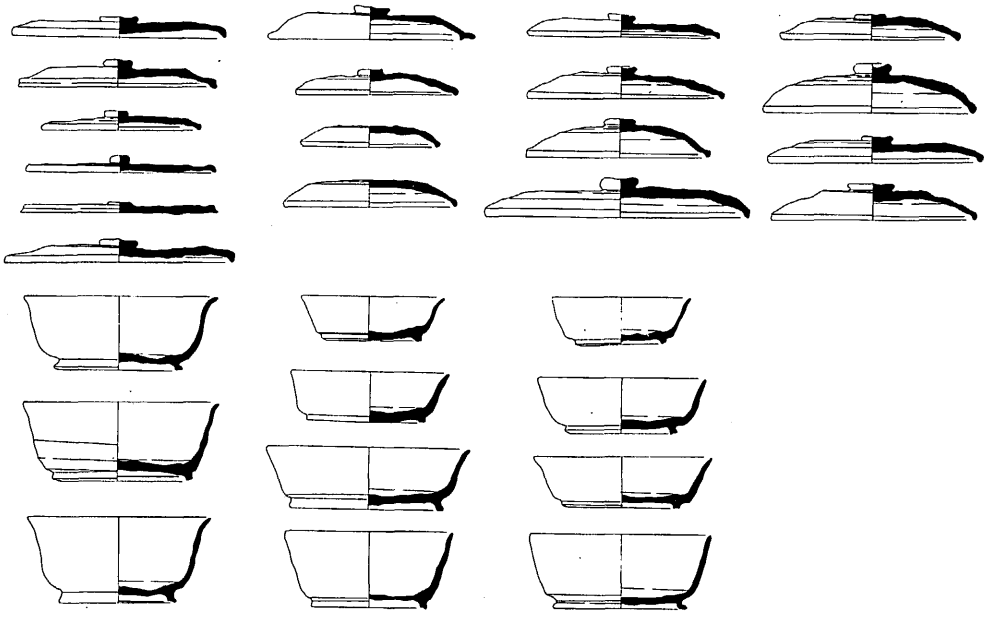


図23　B区灰原出土蓋杯の種類

加味してある。

以上、全く同一器種として処理することの多い蓋杯について見ても、既に述べたような基準を用いることのように細分することが可能である。またこのことはこれらの名称、用途にも各々差が認められることになる。この点は今後の課題である。（中村）

付１　牛頸ハセムシ窯跡出土炭化材の樹種同定

１．方法・記載および結果

試料は、26地区灰原Ｂ灰層中３点と26地区灰原Ｃ灰層中１点そして27号窯ＡＢ区灰原１点の合計５点である。これらの炭化材は、実態顕微鏡下で、それぞれカミソリ刃などを用いて横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の３断面を作成する（図24）。これら試料は、直径１㎝の真鍮製試料台に固定、金蒸着した後、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製ＪＳＭＴ－100型）で観察・同定した。表４にその結果を示す。なお、樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。

表４　出土炭化材の樹種

試料No.	出土位置	樹　種
1	26地区灰原Ｂ灰層中	コナラ節（ブナ科）
1	〃	ヒサカキ（ツバキ科）
2	〃	アカガシ亜属（ブナ科）
3	26地区灰原Ｃ灰層中	サクラ属（バラ科）
4	27号窯ＡＢ区灰層	ヒサカキ（ツバキ科）

コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科　図24　１ａ～１ｃ.

年輪のはじめに大型の管孔が１列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。

以上の形質からブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（Q.serrata）やミズナラ（Q.mongolica var. grossesrrata）、カシワ（Q.dentata）、ナラガシワ（Q.aliena）などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20ｍ、幹径１ｍを超える落葉広葉樹である。

アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科　図24　２ａ～２ｃ.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、チロー

スが見られる（放射断面または接線断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ（Q.scuta）やアラカシ（Q.glauca）やシラカシ（Q.mysinaefolia）をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素である。

ヒサカキ Eurya japonica Thunb. ツバキ科　図24　3a～3c.

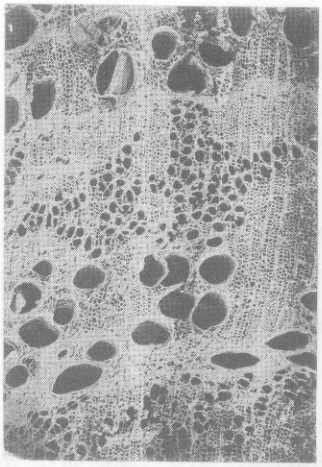
小型の管孔が単独ないし2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である（横断面)。道管のせん孔は階段状である（放射断面)。放射組織は、異性1～2細胞幅。1～13細胞高で、端部および単列部は長く異性である。

以上の形質から、ツバキ科のヒサカキの材と同定される。ヒサカキは、本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する樹高10mに達する常緑広葉樹である。

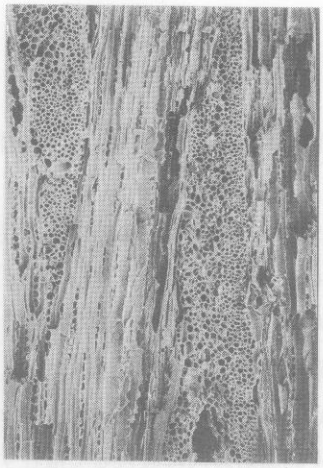
サクラ属 Prunus バラ科　図25　4a～4c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔在である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる（横断面)。道管のせん孔は単一である（放射断面)。放射組織は、同性に近い異性で、1～3細胞幅、2～37細胞高で、道管の内壁には明瞭ならせん肥厚が見られる（接線断面)。

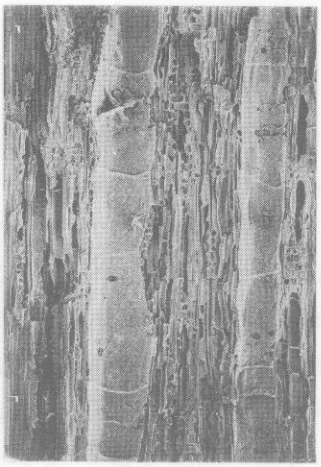
以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達するヤマザクラ（P.jamasakura）など数種類ある。



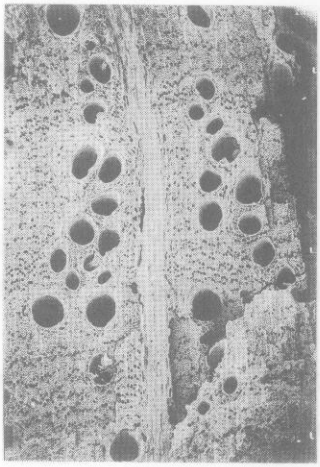
1a. コナラ節(横断面) No.1 bar:0.5mm



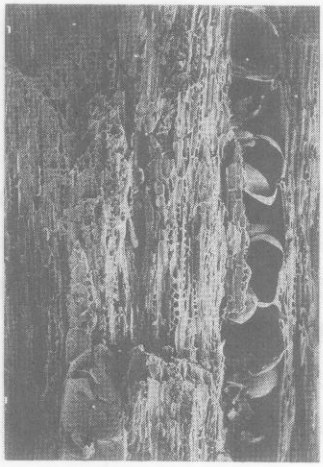
1b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



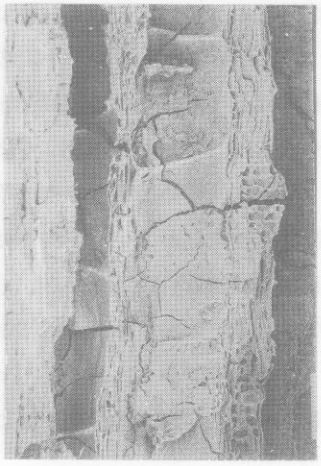
1c. 同 (放射断面) bar:0.5mm



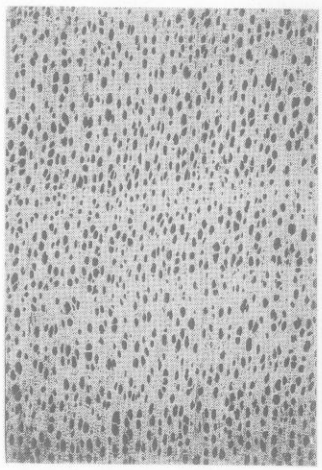
2a. アカガシ亜属(横断面)No.2 bar:1mm



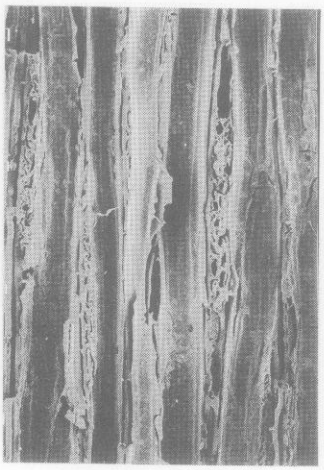
2b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



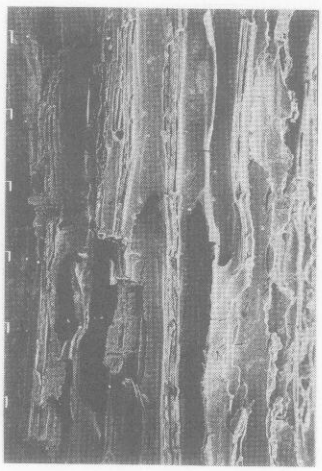
2c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



3a. ヒサカキ(横断面) No.1 bar:0.1mm

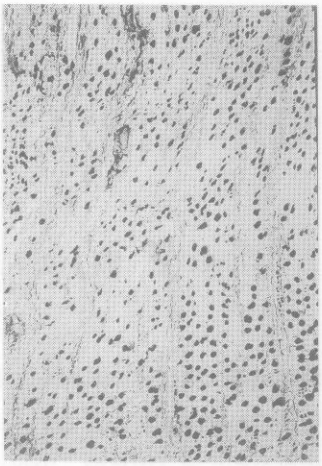


3b. 同 (接線断面) bar:0.1mm

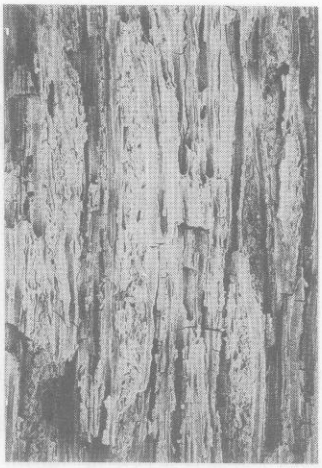


3c. 同 (放射断面) bar:0.1mm

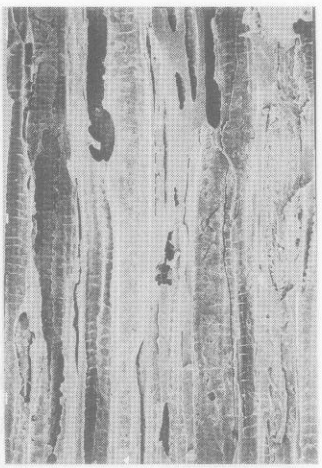
図24　出土炭化材の電子顕微鏡写真



4a. サクラ属（横断面） №3 bar:0.5㎜



4b. 同（接線断面） bar:0.5㎜



4c. 同（放射断面） bar:0.1㎜

図25　出土炭化材の電子顕微鏡写真

付２　牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定

（その３）

（株）夏　原　技　研

牛頸ハセムシ窯跡群で発掘調査された遺構の焼土から、考古地磁気年代推定用の試料を、平成４年10月１日に採集した。その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果を報告します。

考古地磁気年代推定の原理や測定方法等については、昭和62年度の報告書（中島他，1988）や中島・夏原（1981）で詳しく解説しているため本報告では省略します。

測 定 結 果

牛頸ハセムシ26－Ⅰ、26－Ⅱ、27、28号窯の４基のそれぞれの窯床から計41個の考古地磁気用の定方位試料を採取した。このうちの１個を試料整形時に破損したため熱残留磁化を測定できなかった。

試料の方位を磁気コンパスで測定しているため、熱残留磁気測定で得られる偏角は磁北に対する角度である。これを真北からの角度に補正する必要がある。補正するには、試料採取地点の現在の地磁気偏角を知ることである。牛頸ハセムシ窯跡群での現在の地磁気偏角は、国土地理院の1990年の地磁気偏角図から読み取った6.2°Wである。

熱残留磁化の測定は、スピナー磁力計で行った。残留磁化強度は、10^{-3}emuのオーダーであり窯跡の焼土

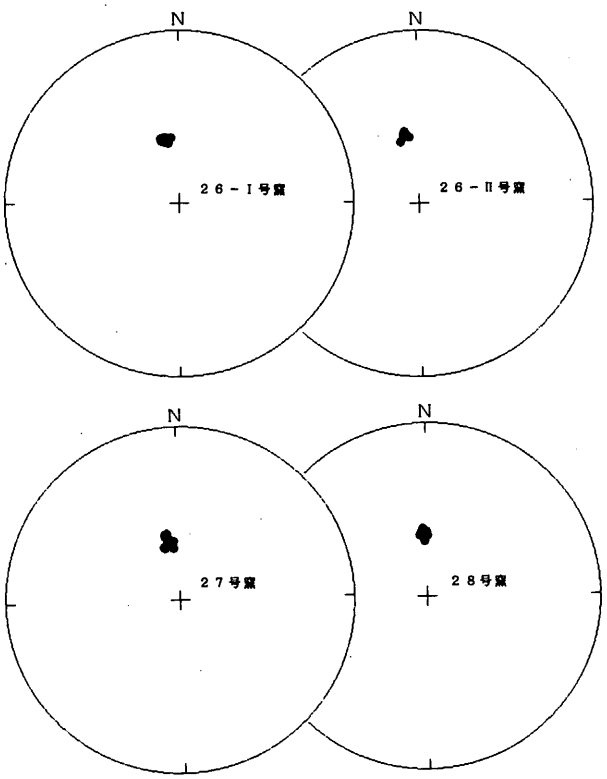


図26　各窯跡ごとの各試料の残留磁化方向の等面積投影図（シュミット・ネット）

としては標準的なものであり、高温で焼成されたことは間違いなく、考古地磁気に適した試料であった。

測定結果は図26と表5、表6にまとめた。図26は、それぞれの試料の磁化方向（偏角、伏角）をシュミット・ネット上に投影したものである。円の中心と測定点を結ぶ直線の真北（円の中心とNを結ぶ方向）からの角度が偏角であり、この直線上で円周から測定点までの角度が伏角を表している（円周上で0度，円の中心で90度）。

表5は、個々の試料の熱残留磁気測定結果（Di、Ii）である。表6に、各窯跡の磁化方向の平

表5　熱残留磁気測定結果

26－Ⅰ号窯

	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 $\times 10^{-2}$
US-11	-10.9	59.6	2.64
US-12	-13.7	57.6	3.28
US-13	-16.3	59.4	3.87
US-14	-12.9	60.4	4.87
US-15	-11.5	58.3	3.85
US-16	-6.9	58.6	3.52
US-17	-10.4	60.9	2.68
US-18	-11.8	60.2	3.00
US-19	-16.3	57.9	2.27
US-20	-14.4	59.6	3.33

26－Ⅱ号窯

	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 $\times 10^{-2}$
US-21	-12.4	56.1	2.74
US-22	-15.8	59.4	2.80
US-23	-11.1	55.6	2.26
US-24	-11.8	57.0	2.25
US-25	-11.0	57.4	3.01
US-26	-10.1	56.9	2.32
US-27	-12.6	56.7	2.76
US-28	-7.8	57.8	2.95
US-29	-10.9	54.8	1.78
US-30	-12.0	56.7	1.85

27号窯

	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 $\times 10^{-2}$
US-41	-12.1	58.8	1.43
US-42	-16.1	64.0	1.40
US-44	-10.1	57.9	1.11
US-45	-5.4	61.8	1.13
US-46	-10.1	57.8	1.61
US-47	-12.0	58.3	2.66
US-48	-10.4	61.6	2.18
US-49	-7.5	62.3	2.52
US-50	-6.2	64.9	3.54
US-51	-14.7	64.5	3.18

28号窯

	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 $\times 10^{-2}$
US-01	-3.4	57.7	3.74
US-02	0.4	59.4	1.57
US-03	-1.5	60.6	3.06
US-04	-2.7	63.8	2.47
US-05	1.6	61.2	1.86
US-06	-0.1	60.1	1.34
US-07	-1.4	60.1	2.95
US-08	-6.4	61.1	2.61
US-09	-3.2	60.8	1.83
US-10	-5.6	59.8	2.05

表6　考古地磁気測定結果

遺構名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{95} (°)	k	平均磁化強度 $\times10^{-2}$
26－Ⅰ号窯	10	-12.5	59.3	1.1	1929.7	3.33
26－Ⅱ号窯	10	-11.5	56.9	1.0	2385.8	2.47
27号窯	10	-10.4	61.2	1.9	628.4	2.08
28号窯	10	-2.2	60.5	1.2	1646.0	2.35

表7　考古地磁気年代推定結果

遺構名	考古学推定年代	考古地磁気推定年代（AD）
26－Ⅰ号窯	8世紀中から後期	720±10
26－Ⅱ号窯	8世紀中から後期	740±10
27号窯	7世紀末から8世紀前半	710±10
28号窯	?	710±20

均値（Dm、Im）、誤差角（α_{95}）と信頼度係数（k）および平均磁化強度を示した。表6の試料数（n）は平均値を計算した試料数である。図26と表5、6の偏角はすべて、国土地理院の1990年の地磁気偏角図から読み取った6.2°Wで補正した値である。

個々の窯についての信頼度係数も大きく、今回の測定結果は良くまとまった測定精度の高いデータといえる。

昭和62年度の報告書で8世紀前後の地磁気分布に大きな地域差がある可能性を指摘し、63年度の報告書では、62年、63年の全測定結果を伏角値を基礎に同じ磁気方向とみなせる3つのグループに分け、同時代の大阪府と石川県の測定結果を参考にして、5つの仮定のもとに8世紀の牛頸ハセムシ窯跡群の地磁気変化曲線を求めた。図27に昭和62年度と63年度の測定結果をまとめた。

今回の推定でも63年度の報告書で得られた牛頸ハセムシ窯跡群での変化曲線と比較することで年代推定を行った。図28に測定結果と牛頸ハセムシ窯跡群での変化曲線（実線）を示した。破線は広岡(1977)の地磁気永年変化曲線である。

測定結果は、良く曲線と一致しており26－Ⅰ号は720年，26－Ⅱ号は740年、27号・28号は710年となる。表7に推定年代をまとめた。

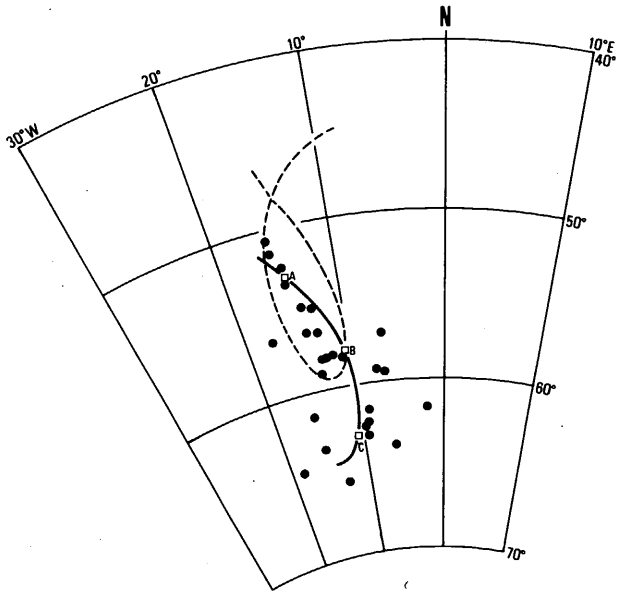


図27　昭和62、63年度の測定結果と８世紀のハセムシ窯跡の
変化曲線（実線）および広岡曲線（破線）
Ａ、Ｂ、Ｃはハセムシ窯の年代区分

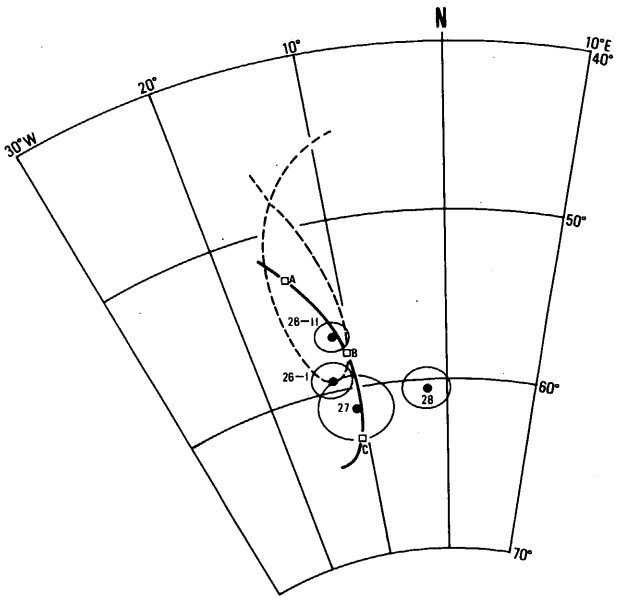


図28　測定結果と８世紀のハセムシ窯跡の変化曲線（実線）
および広岡曲線（破線）

引 用 文 献

広岡公夫(1977)　考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向，第四紀研究，15，200-203.

広岡公夫・岡田　宗・吉村勝之・井口滋存(1988)　小松市古窯の考古地磁気，石川県小松市教育委員会.

中島正志・夏原信義(1981)　考古地磁気年代推定法，ニューサイエンス社，95Ｐ.

中島正志・長谷川千恵・三田村憲一・夏原信義(1988)　牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定，大谷女子大学資料館報告書，第18冊（牛頸），75-81.

Shibuya,H.(1980)　Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means archaeomagnetism，大阪大学大学院基礎工学研究科修士論文，54p.

中島正志・谷崎有里・林　昌代・夏原信義・宮崎義信(1989)　牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定－その２，大谷女子大学資料館報告書，第23冊（牛頸Ⅱ），126-136.

遺物観察表

例　言

1．観察表の作成は、実測図と現物とを対照して行った。色調は、「標準土色帖」によって判断した。
2．形態、手法の特徴の表記は、原則として『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅰ』に従っている。
3．法量については復元値によって記述しているものも多い。なお歪みの著しいものについては実測段階での復元図をもとに計測している。単位は、いずれもcmである。
4．各自が行った観察を、文体、用語の統一を行っており、必ずしも当初の原稿の通りでないものもある。
5．本作業は、大谷女子大学考古学研究会の協力を得て行った。

26 号 窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	2	I号窯燃焼部床面	口径 12.6 器高 2.0	口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。天井部は、やや偏平である。やや偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 その他は回転ナデ。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好。 色調　7.5Y6/1灰色。 ひずみあり。
同上	3	同上	口径 15.1 器高 2.3	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。 天井部はなだらかで、ほぼ中央に、偏平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2回転ヘラ削り。 天井部内面2/3ナデ調整。 その他は回転ナデ。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　やや不良。 色調　2.5Y8/1灰白色。
蓋杯(身)	5	同上	口径 14.8 器高 3.3	口縁部は上外方に伸び、端部はやや丸い。 底部はやや浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ切り。 その他は回転ナデ。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　5Y8/1灰白色。
同上	6	同上	口径 14.0 器高 4.0	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。 八の字形の低い高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ切り。 その他は回転ナデ。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　10Y7/1灰白色。
同上	7	同上	口径 17.4 器高 1.6	口縁部は外反し、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ切り後、不整方向ナデ。 その他は回転ナデ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　10GY6/1緑灰色。
蓋杯(蓋)	8	I号窯焼成部床面	口径 14.7 器高 3.0	口縁部は、内傾したのち外反する。 端部はやや鋭い。天井部はやや高くなだらか。小さめの擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 天井部内面2/3不整方向ナデ。 その他は回転ナデ。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好。 色調　N4/灰～8/灰白色。
同上	10	同上	口径 15.4 器高 1.2	口縁部は外傾し、端部は丸い。天井部は極めて低く、平ら。全体に薄く、小さめの偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 その他は回転ナデ。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。(白色微粒子多し) 焼成　良好堅緻。 色調　10Y7/1灰白色。
蓋杯(身)	12	同上	口径 14.3 器高 3.3	口縁部はやや内彎して上外方に伸び、端部はやや鋭い。底部はやや浅く丸い。 高台はなし。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ削り。 体部周辺外面にケズリ、その他回転ナデ。	胎土　やや粗。(青黒色粒子多し) 焼成　良好堅緻。 色調　10BG5/1青灰色。
蓋杯(蓋)	13	I号窯土坑	口径 15.0 器高 2.8	口縁部周辺で凹んだのち端部にむかって垂直よりやや外傾し下がる。 端部はやや鋭く、天井部は低く平ら。 やや小さめの偏平な擬宝珠様つまみを付す。全体にやや厚手。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 天井部内面2/3不整方向ナデ。 その他は回転ナデ。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5GY8/1明緑灰～10YR6/2灰黄緑色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	19	I号窯前庭部	口径16.4 器高 1.7	口縁部はほぼ垂直に下がり端部は丸い。 天井部は低く偏平。 中央部分に偏平で小さいつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 天井部内面2/3オサエのちナデ。 その他は回転ナデ。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　10YR5/2灰黄褐色。
高杯	21	I号窯前庭部灰原	底径 8.1 器高 5.0	脚部は外反しながら下外方に開き、下部で水平方向に角度を変え外方に伸びた後、小さく下外方に屈曲して端部にいたる。端部は丸い。杯部はほぼ欠損するが杯底部は浅く、中央より下外方にのびる。口縁部は上外方に立ち上がったのち、ほぼ水平に屈曲し、端部に至る。端部はやや鋭い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部内面不整方向ナデ。 その他は回転ナデ。 脚部はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　N7/灰白色。 杯部はひずみあり。
蓋杯(蓋)	22	II号窯前庭部	口径11.8 器高 1.7	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部はやや低く、つまみ痕はみとめられない。	天井外面は回転ヘラ削り。 内側は不定方向のナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/灰色。
同上	23	同上	口径15.2 器高 2.3	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部は回転ヘラ切り未調整。 口縁部、その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗、白色砂粒を含む。 焼成　不良 色調　10YR7/3にぶい黄橙色。
同上	30	同上	口径17.2 器高 2.0	口縁部は短く、やや内傾し端部はやや鋭い。 天井部は低くなだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面は4/5回転ヘラ削り。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　10GY6/1緑灰色。
蓋杯(身)	38	同上	口径 8.4 器高 4.4	口縁部は、上外方にまっすぐのび、端部は丸い。 底部は深く、凹面をなす。 八の字形の高台を付し内側に設置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向のナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切りのちナデ調整。 ヘラ記号「一」あり。 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　甘い。 色調　YR5/4にぶい赤褐色。
同上	40	同上	口径15.1 器高 4.5	口縁部は上外方にやや外反気味にのびる。端部は丸い。 底部は深く、平ら。 高台は剝離している。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向のナデ調整。 底部外面、回転ヘラ削り調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5GY4/1暗緑灰色。
同上	41	同上	口径15.6 器高 5.7	口縁部は上外方に外反気味にのびる。 端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向のナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り未調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/灰色。
皿	42	II号窯体右側	口径16.2 器高 1.7	口縁部は上外方にまっすぐにのび、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内面、不整方向のナデ調整。 底部外面、回転ヘラ切り未調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　7.5Y7/1。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	43	A区灰原	口径16.5 器高 3.1	口縁部は下外方に下がり端部は丸い。内傾するかえりを有し、かえり端部はやや鋭い。天井部はやや低くなだらか。偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　5Y6/1灰オリーブ色。
同上	54	同上	口径16.2 器高 2.8	口縁部は垂直に下がり端部は丸い。天井部は低く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y5/2灰オリーブ色。
同上	68	同上	口径11.5 器高 2.6	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。天井部はやや低くなだらか。つまみ痕はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y6/1灰色。
蓋杯(身)	70	同上	口径15.0 器高 4.4 底径 9.4	口縁部は外反して、上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや浅く、平ら。垂直な高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整 高台はハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	72	同上	復元口径 14.9 器高 5.2 底径 10.1	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。垂直な高台を付し、外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　10Y5/1灰色。
同上	79	同上	口径15.0 器高 6.1 底径 9.5	口縁部は外反して、上外方に伸び、端部は丸い。底部は深く、平ら。八の字形の高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	82	同上	口径19.3 器高 2.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は平面をなす。底部は浅く、ほぼ平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　10Y4/1灰色。
蓋杯(蓋)	85	灰原灰層中	口径12.6 器高 2.4	口縁部は短く、垂直下がり、端部は丸い。天井部は低くなだらか。偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/1灰色。
同上	92	F区灰原	口径16.1 器高 3.2	口縁部は短く、垂直に下がり、端部はやや鋭い。天井部はやや高く、なだらか。偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　5Y7/2灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(杯)	93	灰原灰層中	口径 6.7 器高 2.8	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	96	A区灰原	口径 14.9 器高 5.7 底径 9.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　10YR4/1褐灰色。
同上	97	F区灰原	口径 12.8 器高 4.5 底径 8.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。 底部外面に板状圧痕あり。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	98	同上	口径 18.2 器高 6.1 底径 10.5	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、凹面をなす。 垂直な高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質。 色調　2.5Y4/1黄灰色。
同上	100	同上	口径 15.0 器高 6.8	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 高台は欠損。 底部穿孔。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　やや甘い。 色調　52.Y6/2灰黄色。 置き台？
同上	103	C区灰原	口径 27.2 残存高 2.5	口縁部は内傾し、端部は端部は丸い。 天井部はやや低く、平らに伸びたのちなだらかに下外方に下がる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　5Y8/2灰白色。
高杯	105	同上	口径 27.2 残存高 2.6	杯底部は浅くなだらかに上外方に伸び口縁部は低く垂直に立ちあがる。 端部は内傾する平面を成す。 脚部裾部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部外面約1/2回転ヘラ削り。 杯底部内面約1/3不整方向ナデ調整 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　5Y6/2灰オリーブ色。
鉢	107	同上	口径 26.6 残存高 16.9	体部から口縁部にかけて約75°上外方に伸び端部は平ら。 底部は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部内面削り気味のやや強い回転ナデ調整。 外面は丁寧な回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。（やや軟質） 色調　5Y8/3淡黄色。
同上	108	同上	残存高 6.2 底径 16.8	体部から口縁部にかけて欠損。 体部はやや内彎し、上外方にたち上がる。 底部は薄く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ切り。体部外面、回転ヘラ削り。底部内面、中央部分より約1/2強い指オサエのち不整方向ナデ調整。体部内側、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。（やや軟質） 色調　5Y8/3淡黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
平瓶	109	BE区灰原セクション	最大径 22.0 残存高 9.0	体部は内彎しつつ、上外方に伸び、肩部で大きく角度を変え、上内方に屈曲して伸びる。 頸部は外反し、上外方にたち上がる。 口縁部、体部2/3、底部、欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 体部外面、回転ヘラ削り。 その他は回転ナデ調整。 頸部はハリツケたのち回転ナデ調整。	胎土　やや粗。(1～3㎜白色礫含む) 焼成　やや不良。 色調　5Y灰白8/1。 113も平瓶の一部と見られる（上面に格子叩きあり）
長頸壺	111	E区灰原	口径 15.1 残存高 15.3	口頭部は基部比較的太く、外彎して上外方にのび、さらに端部へ外方へ大きく曲げ、端部を丸く仕上げている。 中位から下方に波線を一条巡らせている。基部以下欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 全体に回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N6/灰色。
壺	112	A区灰原	口径 15.5 残存高 6.1	口頭部基部太く外彎して上外方にのび端部は丸い。 外面中上位に粗な波状文二条を巡らせている。	マキアゲ・ミズビキ成形。 全体に回転ナデ調整。 ヘラによる波状文はかなり粗である。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　2.5Y7/2灰黄色。
蓋杯(蓋)	116	B区灰原	口径 15.1 器高 2.0	口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く平ら。 偏平な擬宝珠様つまみを付す。 全体に薄い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 天井部内面2/3不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。(最大2㎜白色礫含む) 焼成　良好堅緻。 色調　N6/灰色。
同上	118	同上	口径 16.7 器高 2.1	口縁部は内傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 天井部中央に偏平なやや大きめのつまみを付す。 全体にやや薄い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約2/3回転ヘラ削り。 天井部内面2/3オサエのち不整方向ナデ調整。その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。(1～7㎜礫含む) 焼成　良好堅緻。 色調　5Y6/2灰オリーブ色。
同上	125	同上	口径 14.8 器高 2.4	口縁部は内傾し、端部はやや丸い。 天井部はやや偏平。ひずみあり。 天井部中央に、やや小さめの偏平な擬宝珠様つまみを付す。 全体に薄い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5回転ヘラ削り。 天井部内面2/3不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。(1～3㎜礫含む) 焼成　良好堅緻。 色調　10GY5/1緑灰色。
同上	135	BE区灰原セクション	口径 20.8 器高 3.2	口縁部は内傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 ややひずみを生じ、天井部中央に大きめの偏平な擬宝珠様つまみを付す。 全体に厚い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約4/5回転ヘラ削り。 天井部内面約4/5不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　7.5YR6/1褐灰色。
同上	136	B区灰原	口径 10.7 器高 1.8	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 つまみ痕はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3回転ヘラ削り。 天井部内面2/3不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　粗 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	137	同上	口径 12.7 器高 2.1	口縁部は短く、垂直に下がり端部は鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り後ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	138	B区灰原	口径 14.2 器高 3.2	口縁部は短く、垂直に下がり端部はやや鋭い。 天井部は高く、なだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後ナデ調整。天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/1灰色。
同上	142	同上	口径 15.4 器高 2.5	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部はやや低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	146	同上	口径 15.8 器高 3.0	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部はやや低く、水平に伸びた後、下外方へ下がる。 偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N6/灰色。
同上	151	同上	口径 16.2 器高 2.4	口縁部は短く、内傾した後下がり、端部は鋭い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	154	同上	口径 15.5 器高 2.1	口縁部は短く、下外方に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り後ナデ調整。天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　2.5Y6/2灰黄色。
同上	161	同上	口径 16.0 器高 3.7	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。 ひずみが著しい。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	169	同上	口径 15.4 器高 2.1	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。
同上	170	同上	口径 15.1 器高 1.3	口縁部は短く、垂直に下がり端部は鋭い。 天井部は低く、平ら。 中心よりややずれて擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y5/1灰色
同上	175	同上	口径 13.2 器高 2.2	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 つまみ痕はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや密。 焼成　甘く軟質。 色調　10YR7/3にぶい黄橙。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	178	B区灰原	口径12.8 器高 3.0	口縁部は短く、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。
同上	179	同上	口径12.4 器高 1.6	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 中心よりややずれて偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/灰色。
同上	181	同上	口径12.8 器高 2.1	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 つまみ痕はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質 色調　2.5Y6/3にぶい黄色。
同上	188	灰原灰層中	口径14.2 器高 3.1	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 偏平なつまみ痕を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　5GY3/1暗オリーブ灰色。
同上	189	同上	復元口径 16.0 器高 2.5	口縁部は短く、下外方に広がり端部は丸い。垂直に下がるかえりを有し、かえり端部は鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。 つまみは欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質。 色調　2.5Y8/3淡黄色。
同上	192	灰原表採	口径15.3 器高 2.5	口縁部は短く、垂直に下がり端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　2.5Y6/3にぶい黄色。
皿	202	B区灰原	口径14.3 器高 2.5	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　7.5YR5/2灰褐色。
蓋杯(身)	205	同上	口径11.4 器高 3.6 底径 7.2	口縁部は外反して上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、やや凹面をなす。 垂直な高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　5Y6/2灰オリーブ色。
同上	208	同上	復元口径 12.4 器高 4.0 底径 8.9	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、やや凹面をなす。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　甘く軟質。 色調　2.5Y7/2灰黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	220	B区灰原	口径 15.0 器高 6.1 底径 10.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部外面、回転ヘラ削り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N6/灰色。
同上	221	同上	口径 16.1 器高 4.9 底径 12.1	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、外側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質。 色調　5Y7/2灰白色。
同上	223	同上	口径 13.9 器高 5.5 底径 10.3	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、凸面をなす。 八の字形の高台を付し、外側で接地する。 ひずみが著しい。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/灰色。
蓋杯(杯)	229	同上	復元口径 14.3 器高 5.8 底径 9.5	底部は中央がやや下がっているがほぼ平らで、口縁部はなだらかに上外方へのび、端部は丸い。底部端からやや入った部分に高台を貼付する。外端面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部中央内面ナデ調整。 外面ヘラ削り調整を行う。 高台はハリツケ。 その他はすべて回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	228	同上	口径 14.8 器高 6.2 底径 8.5	底部は深く平らで口縁部はなだらかなS字を描いて上外方にのび、端部は丸い。高台は底部端からやや入った部分に貼付する。内端面で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部中央内面ナデ調整。 外面ヘラ削り。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　N3/暗灰色。
皿	238	同上	復元口径 20.2 器高 2.5	底部は浅く平らで、口縁部はわずかにS字を描いて上外方にのびる。端部は丸く仕上げられている。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 底部中央内面ナデ調整。 底部外面ヘラ削り。 他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
蓋杯(蓋)	243	BE区灰原セクション	口径 14.1 器高 3.2	口縁部は短く、やや内傾して下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 偏平なつまみを付す。。	マキアゲ・ミズビキ成形・ 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	253	同上	口径 12.0 器高 2.4	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。 偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	255	同上	口径 15.1 器高 2.4	口縁部は短く、やや外傾して下がり、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y6/1灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	256	BE区灰原セクション	口径 15.3 器高 2.3	口縁部は短く、下外方に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質。 色調　10YR6/2灰黄褐色。
同上	263	同上	口径 14.7 器高 1.5	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　2.5GY5/1オリーブ色。
同上	265	同上	口径 11.5 器高 2.2	口縁部は短く、内傾し端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 つまみ痕はみとめられず。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約1/2、回転ヘラ削り。 天井部内面中央部オサエのちナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや密。(白色粒子多し) 焼成　良好堅緻。 色調　2.5Y3/1黒褐色。
同上	266	同上	口径 16.4 器高 3.3	口縁部は外下方に下がり、端部は丸く内傾するかえりを有し、かえり端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、なだらか。 大きめの偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 かえり部分と、つまみははハリツケ。	胎土　やや密。(黄白色粒子多し) 焼成　良好。 色調　5Y7/1灰白色。
同上	272	同上	口径 13.8 器高 2.7	口縁部は内傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 巾が広くやや高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約1/2、回転ヘラ削り。 天井部内面中央部はオサエは、2/3不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや密。(灰黒色粒子多し) 焼成　やや不良。 色調　2.5Y8/1灰白色。
同上	275	同上	口径 14.8 器高 3.0	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 やや偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整回転ナデののちナデ微調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/灰色。 ややひずみあり。
同上	278	同上	口径 13.6 器高 1.9	口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低い。 小さめのやや偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻 色調　N4/灰色。
蓋杯(身)	290	同上	口径 13.3 器高 4.5 底径 9.1	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　10YR6/2灰黄褐色。
同上	298	同上	口径 13.9 器高 4.0 底径 7.7	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 ほぼ垂直な台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	301	BE区灰原セクション	口径 15.2 器高 6.6 底径 10.5	口縁部は外反して上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　2.5Y5/1黄灰色。
同上	302	同上	口径 15.5 器高 4.7 底径 10.6	口縁部は外反して上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　10Y6/1灰色。
同上	306	同上	口径 12.0 器高 3.8 底径 8.0	口縁部は上外方に伸び、やや外反する。端部は丸い。 底部は深く、なだらか。 高台は八の字形で内側で接地する。 内底面に重ね焼きの痕あり。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。(白色砂粒を僅かに含む) 焼成　良好。 色調　N4/4灰色。
同上	308	同上	口径 13.3 器高 3.8 底径 8.3	口縁部は大きく、外方へ開く。端部は丸い。 底部は浅く、なだらか。 高台は八の字形で内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内外面とも不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　5Y6/1灰色。
同上	311	同上	口径 14.3 器高 4.6 底径 9.8	口縁部は上外方に伸び、外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 高台は太く八の字形で内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　5Y7/3浅黄色。
同上	312	同上	口径 14.0 器高 6.0 底径 10.6	口縁部は上外方に伸び、僅かに外反する。端部は丸い。 底部は深く、平ら。 高台は八の字形で内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。(白色砂粒を含む) 焼成　不良。 色調　外面は7.5Y4/1灰色。内面は5YR5/6明赤褐色。
同上	314	同上	口径 17.0 器高 5.2 底径 11.7	口縁部は上外方に伸びる。端部は丸い。 底部は浅く平ら。 高台は直立し、内面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　7.5Y5/1灰色。
皿	316	同上	口径 18.4 器高 2.5 底径 15.2	口縁部は上外方に伸びる。端部は丸い。 底部は低く平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。。 口縁部回転ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　7.5YR7/2にぶい黄橙色。
長頸壺	317	同上	残存高 12.6 底径 12.2 体部最大径 20.0	口頸部欠損、肩部から体部にかけて残存。肩部は丸く下外方に下り、体部3/4上方に最大径を有する。 底部は平らで、底部端に高台を有する。 高台は八の字形である。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　10Y5/1灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	318	C区灰原	口径 16.8 器高 3.9	口縁部は凹面をなし、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ切り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　2.5Y8/1灰白色。
同上	321	同上	口径 19.7 器高 3.1	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面1/2、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　2.5Y5/2暗灰黄色。
同上	330	同上	口径 15.3 器高 2.6	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好 色調　10Y5/1灰色。
同上	342	同上	口径 11.1 器高 1.5	口縁部は、外傾して下がり、端部はやや鋭い。 天井部は平らに伸びた後、下外方に下がる。つまみ痕はみとめられない、ひずみが著しい。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y4/1灰色。
同上	344	同上	口径 17.0 器高 2.7	口縁部は、外反して外反方に下がり、端部は丸い。垂直なかえりを付し、かえり端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、なだらか。 つまみは欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　やや不良。 色調　5Y8/3淡黄色。
同上	346	同上	口径 13.6 器高 2.8	口縁部は短く、垂直に下がり、端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、なだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y6/1灰色。
同上	355	同上	口径 16.8 器高 2.8	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、なだらか。 凹面をなすつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。
同上	368	同上	口径 16.0 器高 2.0	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　5Y7/1灰白色。
蓋杯(身)	378	同上	口径 13.5 器高 4.4 底径 8.2	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　N6/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	380	C区灰原	口径13.2 器高 3.8 底径 8.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	391	同上	口径11.0 器高 3.4 底径7.2	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 垂直な高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。
同上	396	同上	口径14.0 器高 4.4 底径 8.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。 高台の断面は凹面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　2.5Y5/1黄灰色。
同上	398	同上	復元口径 12.9 器高 5.8 底径 8.9	口縁部は、ほぼ垂直に上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好。 色調　7.5YR7/6橙色。
同上	403	同上	口径14.1 器高 4.8 底径 8.9	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、なだらかに凹面をなす。。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　2.5Y6/2灰黄色。
同上	406	同上	口径15.4 器高 5.8 底径10.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 八の字形の高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　やや甘い。 色調　5Y5/2灰オリーブ色。
同上	407	同上	口径14.2 器高 6.6 底径 9.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深くほぼ平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　2.5Y5/2暗灰黄色。
皿	413	同上	口径19.0 器高 2.8 底径15.0	口縁部は、やや内彎したのち上外方に伸びる。端部は丸い。 底部は浅く、やや丸みをおびる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、不整方向ナデ調整。 底部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　やや密。 焼成　やや不良。 色調　外2.5Y8/4淡黄、内5Y6/1灰色。
同上	414	同上	口径21.2 器高 2.4 底径17.2	口縁部は、やや内彎したのち上外方に伸びる。端部は鋭い。 底部は浅く、中央部にむけてやや内反する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、板状圧痕あり。 底部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　やや密。 焼成　やや不良。 (軟質) 色調　7.5YR8/3浅黄橙色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	415	C区灰原	口径 22.0 器高 2.6 底径 17.7	口縁部は、上外方に伸びる。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。ヘラなどによる損傷みられる。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他はやや強めの回転ナデ調整。	胎土　やや粗。(1～3㎜灰白色礫他含む) 焼成　やや不良 色調　2.5Y8/2灰白色。
蓋杯(身)	417	同上	口径 23.7 器高 4.0 底径 17.8	口縁部は、上外方に伸びる。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字形の低く、やや厚めの高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　5Y8/1灰白色。
杯	422	同上	口径 13.0 器高 3.9 底径 9.5	口縁部は、やや内彎気味に上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、丸みをおびる。 高台の痕跡は認められない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　やや粗。(白色、金色微粒子多し) 焼成　やや不良。 色調　10YR7/4にぶい黄橙色。
同上	423	同上	口径 14.2 器高 4.0 底径 9.8	口縁部は、やや内彎気味に上外方に伸びたのち、上外方にまっすぐ伸びる。端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 高台の痕跡は認められない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、不整方向ナデ調整。底部内面、ややオサエ気味の不整方向ナデ調整。 その他回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　5Y7/2灰白色。
皿	424	同上	口径 13.8 器高 1.8 底径 11.3	口縁部は、上外方にやや外反気味に伸び、端部はやや鋭い。 底部はやや浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 その他回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　5Y5/1灰色。
壺底部	425	同上	残存高 8.9 底径 9.9	肩部、口縁部を欠損。 体部はゆるやかに内彎し、上外方に立ちあがる。最大径は上位にもとめる。 底部はやや丸みをおび八の字形の高い薄目の高台を付す。高台の内側で接地。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 体部及び底部内面、不整方向ナデ調整。 体部外面回転ヘラ削り。 高台はハリツケ。	胎土　やや密。(1～2㎜白色粒子を含む) 焼成　良好堅緻。 色調　5Y7/1灰白色。
瓶子	426	同上	口径 5.0 器高 6.4	たち上がりは外反しながら伸び、端部近くで大きく外反し、段をなしたのち垂直に立ち上がる。端部はやや丸い。 肩部には張りがあり、体部上方に最大径をなすと思われる。底部は欠損。全体に薄い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口縁部、体部共に回転ナデ調整。	胎土　やや密。(青灰色粒子多し) 焼成　良好堅緻。 色調　10YR4/1褐灰色。
高杯	427	同上	口径 24.8 器高 2.4	杯部口縁部は、短く垂直に立ち上がる。端部は円傾する面をなし、平ら。 杯部底部は浅く中央より口縁部に向かってゆるやかに約10°上外方に伸びる。	マキアゲ・ミズビキ成形。 杯底部外面、回転ヘラ削り。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　7.5YR6/3にぶい褐色、口縁端部周辺10Y5/1灰色。
甕	428	同上	口径 23.4 残存高 5.4	体部から口縁部にかけて、円彎ぎみに垂直に立ち上がり、端部近くで大きく上外方に屈曲する。端部は外傾した丸い面を持つ。 全体厚い。	マキアゲ・ミズビキ成形。 口縁体部内側、外側共に一部オサエのち回転ナデ調整。	胎土　粗。(黄白色粒子多し) 焼成　良好。 色調　内5Y6/2灰オリーブ色、外10YR4/2灰黄褐色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	429	D区灰原	口径 26.6 器高 3.7	口縁部は外下方に下がり端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部も丸い。天井部は高く平ら。中央部分に比較的大きめの偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約3/4、回転ヘラ削り。 天井部内面約2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　やや不良。 色調　5Y8/1灰白色。
同上	431	同上	口径 16.0 器高 2.8	口縁部は外下方に下がり凹線上の段差をなす。端部は丸く、ハリツケ。 天井部はややなだらかでほぼ中央に、偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約1/2、回転ヘラ削り。 天井部内面約3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　やや不良。 色調　2.5Y8/2灰白色。
同上	433	同上	口径 14.8 器高 3.8	口縁部は内下方に下がり、端部はやや鋭い。 天井部は高くなだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部にヘラ記号を有す。天井部外面2/3、回転ヘラ削り。天井部内面約2/3不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。(黄白色粒子多し) 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。 ひずみあり。
同上	435	同上	口径 13.4 器高 3.7	口縁部は内傾し、端部は丸く。 天井部はなだらかでやや高い。 小さい擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約2/3、回転ヘラ削り。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好。 色調　10YR5/3褐色。
同上	451	同上	口径 14.5 器高 2.3	口縁部はほぼ垂直に下がり、端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、偏平。 小さくやや偏平に近い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面4/5、不整方向ナデ調整。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや密。(礫も含む) 焼成　良好堅緻。 色調　5Y6/2灰オリーブ色。 ひずみあり。
同上	452	同上	口径 14.2 器高 2.8	口縁部はやや外傾し、端部は丸い。 天井部は偏平で低い。 天井部中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面約1/3、回転ヘラ削り。 天井部内面約2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 まみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y8/2灰白色。
同上	453	同上	口径 10.5 器高 1.2	口縁部は下外方に下がったのち内側に屈曲する。端部はやや鋭く天井部は低くやや偏平。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り。 口縁周辺近く強いナデ調整。 天井部内面4/5指オサエ、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。(1～3㎜白色礫含有) 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y4/1灰色。
同上	455	同上	口径 11.4 器高 1.3	口縁部は、外傾気味に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　N6/灰色。
同上	456	同上	口径 12.1 器高 2.7	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	465	D区灰原	口径14.9 器高 2.9	口縁部は垂直に下がり、端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5N5/1灰色。
同上	472	同上	復元口径 14.5 器高 2.4	口縁部は短く、垂直に伸びた後、下外方に下がり、端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。 ボタン状のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り後ナデ調整。天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y6/1灰色。
蓋杯(身)	477	同上	復元口径 14.0 器高 3.5 底径 8.2	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。
同上	480	同上	口径14.4 器高 4.4 底径 8.7	口縁部は外反して、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 垂直な高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　不良。 色調　10Y5/1灰色。
同上	484	同上	口径13.2 器高 5.8 底径 9.1	口縁部は上外方に伸び端部は丸い。 底部は深く平ら。 八の字形の高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　10Y6/1灰色。
同上	488	同上	口径15.3 器高 5.3 底径10.1	口縁部は外反気味に上外方へ伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 八の字形の高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　不良。 色調　5Y8/1灰白色。
同上	491	同上	口径15.4 器高 6.6 底形10.7	口縁部は外反気味に上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　7.5Y6/1灰色。
蓋杯(蓋)	499	E区灰原	口径14.7 器高 2.4	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、水平に伸びた後、下外方に下がる。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　2.5Y7/1灰白色。
同上	500	同上	口径15.4 器高 2.7	口縁部は短く、内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好。 色調　2.5Y6/2灰黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	501	E区灰原	口径 16.7 器高 3.1	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質。 色調　7.5Y5/3にぶい褐色。
同上	514	同上	口径 16.0 器高 1.7	口縁部は短く、垂直に下がり、端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y6/1灰色。
同上	527	同上	口径 12.4 器高 1.7	口縁部は短く、外傾気味に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平らに伸びた後、下外方に下がる。 つまみ痕はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/灰色。
同上	532	同上	口径 15.7 器高 2.4	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、凹面をなす。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y6/1灰色。
同上	533	同上	口径 16.4 器高 2.1	口縁部は短く、外傾して下がり、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。 天井部内面1/2、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　やや甘い。 色調　2.5Y6/2灰黄色。
同上	535	同上	口径 15.6 器高 2.2	口縁部は短く、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、平らに伸びた後、下外方に下がる。 凹面をなすボタン状のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好堅緻。 色調　10Y5/1灰色。
蓋杯(身)	542	同上	口径 10.0 器高 4.7 底径 5.8	口縁部は上外方に伸び、端部はやや鋭い。 底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y4/1灰色。
同上	543	同上	口径 12.7 器高 3.5 底径 7.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。
同上	546	同上	口径 11.7 器高 3.6 底径 7.0	口縁部はやや内彎気味に上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 八の字形の高台を付し、全面で接地する。ひずみあり。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	555	E区灰原	復元口径 13.6 器高 4.0 底径 9.8	口縁部は上外方に伸びた後やや外反し、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 八の字形の短い高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　やや甘い。 色調　5Y6/1灰色。
同上	560	同上	口径 13.8 器高 6.0 底径 9.2	口縁部はやや外反気味に上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、なだらかな凹面をなす。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　粗。 焼成　良好。 色調　10Y5/1灰色。
同上	562	同上	復元口径 14.4 器高 4.8	口縁部は上外方に伸び、端部はやや鋭い。 底部はやや深く、丸味を帯びている。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面1/3、回転カキ目、2/3回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　粗。 焼成　良好。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	564	同上	口径 15.6 器高 4.6	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、なだらかな凸面をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや密。 焼成　良好堅緻。 色調　N5/灰色。
短頸壺	565	C区灰原	口径 11.2 残存高 3.8	口頸部は短く、外傾気味に立ち上がり、端部は平ら。 体部の大半を欠損。 頸部下位にわずかな凹線を有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	胎土　やや粗。(白色砂粒を含む) 焼成　良好堅緻。 色調　2.5YG6/1オリーブ灰色。
同上	566	同上	口径 10.2 残存高 4.1	口頸部は短く、やや外傾しながら立ち上がり、端部は平ら。 体部は大半を欠損しているが、残存部末端で傾斜が下むきに変化している。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	胎土　やや密。(白色砂粒を含む) 焼成　良好。 色調　7.5Y5/1灰色。
同上	567	同上	口径 11.0 残存高 5.5	口頸部は短く、やや内傾気味に立ち上がり、端部は平ら。 体部は丸く、なだらかに下がり、やや肩が張っている。 焼成時の大きなヒビを有す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 回転ナデ調整。 外面下位は回転ヘラ削り後、ナデ調整。	胎土　やや密。(白色砂粒をやや多く含む) 焼成　良好。 色調　7.5Y5/1灰色。
壺(体部)	569	同上	残存高 11.0 底径 10.8	体部上位に最大径を有し、丸みをもつ。 最大径部に沈線1条を巡らす。 底部に外反する高台を付し、高台底部は凹状を呈する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内面上位は回転ナデ調整。 底部は不整方向のナデ調整。 外面は回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。(白色砂粒を含む) 焼成　良好堅緻。 色調　10Y5/1灰色。
長頸壺	571	灰層灰原	残存高 6.6 体部最大径 16.8	体部上位に最大径を有し、沈線2条を巡らす。 全体は丸みをもち、肩部がやや張っている。 頸部以上を欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内面は回転ナデ調整。 外面上位は回転ナデ調整。 沈線のやや下より回転ヘラ削り未調整。	胎土　密。(白色砂粒を含む) 焼成　良好堅緻。 色調　2.5GY4/1位オリーブ灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
長頸壺	573	D区灰原	残存高 8.4 体部最大径 16.6	体部上位の最大径部で強く屈曲し、明瞭な稜をつくる。 頸部との接合面は多傾している。 頸部以上を欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内面は回転ナデ調整。 頸部近くにシボリ痕を有す。 外面稜部より上位は回転ナデ調整。 下位は回転ヘラ削り未調整。	胎土　やや粗。（黒色粒をやや多く、白色砂粒を少量含む） 焼成　やや不良。 色調　5Y6/1灰色。
壺（体部）	574	E区灰原	残存高 17.2 体部最大径 27.5	体部上位に最大径を有し、丸みをもつ。最大径部よりやや下方に、2条の幅広い凹線を有す。 底部に外反する高台を付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内面上位は回転ナデ調整。 底部は不整方向のナデ調整。 外面上位は回転ナデ調整。 下位は回転ヘラ削り後、回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや密。（白色砂粒を含む） 焼成　良好堅緻。 色調　N4/灰色。

27号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	575	灰原表土中	口径 15.0 残存高 1.9	口縁部はなだらかに下外方に伸び、端部は丸く、端部近くに内傾する。薄く短いかえりを有する。かえり端部はやや鋭い。 天井部欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内外面ともに回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　良好堅緻。 色調　10BG5/1青灰色。
同上	576	灰原A	口径 14.4 器高 1.8	口縁部は短く、内傾し、端部はやや鋭い。天井部は低く、凹面をなす。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　N4/1灰色。 ひずみあり。
甕	578	灰原灰層中	口径 32.0 残存高 7.4	口頸基部以下欠損。 口頸は太い基部から外反し、端部で大きく肥厚させ端部は内傾する平面をなす。端部外面上位には突帯を付し、口頸部上位に粗な五条からなる波条文を施す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 内外面ともに回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　7.5Y6/1灰色。

28号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	583	I号窯灰原	口径 19.5 器高 1.7	口縁部は短く、外側に下る。端部は丸い。 天井部は低くなだらか。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ切り。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　2.5Y8/2灰白色。
同上	584	B区灰原	口径 15.2 器高 2.0	口縁ぶは短く、下外方へ下り、端部付近で僅かに外反する。 天井部は低く、平ら。 偏平なつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/5、回転ヘラ切り。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　5Y8/3淡黄色。

28 号 窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	593	灰原灰層中	口径 20.2 器高 2.2	口縁部は短く、下外方へ下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く平ら。 高い擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　5Y7/2灰白色。
蓋杯(身)	596	B区灰原	口径 13.1 器高 4.2 底径 9.6	口縁部は上方へ緩く彎曲した後、直立する。 底部はやや深く、平ら。 高台は垂直に下り内側を接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部内外面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　不良 色調　2.5Y7/2灰黄色。
杯	602	同上	口径 14.1 器高 3.7 底径 11.7	口縁部は上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　2.5Y8/2灰白色～N6/灰色。
同上	605	同上	口径 15.0 器高 4.0 底径 9.6	口縁部は外方へ伸び、端部は丸い。 底部は浅く、なだらか。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　2.5Y8/2灰白色。
同上	606	灰原灰層中	口径 13.7 器高 5.9 底径 8.3	口縁部は内彎しながら上方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り。 他は回転ナデ調整。	胎土　密。(白色石粒を含む) 焼成　良好。 色調　N4/灰色。

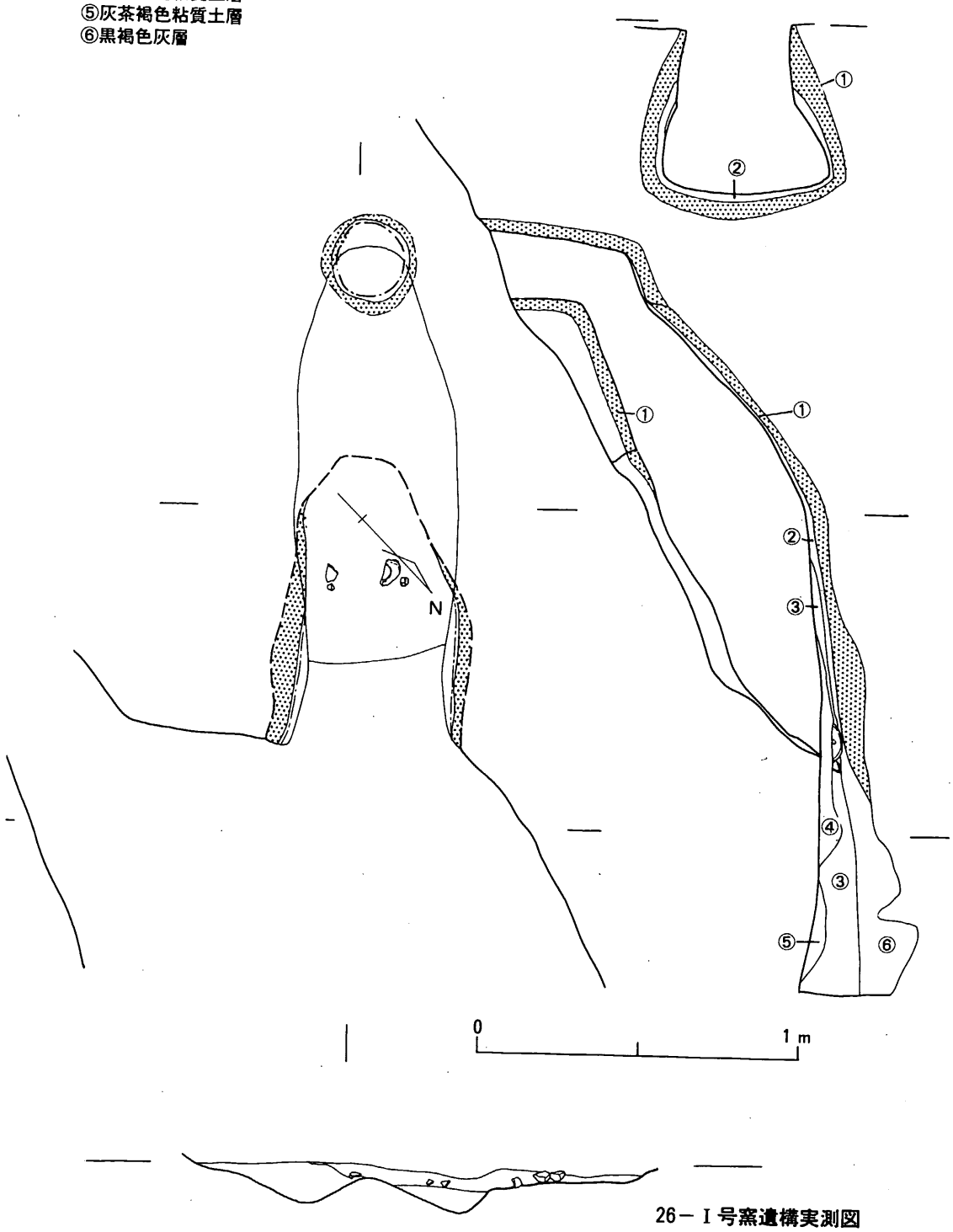
29 号 窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	607	B区灰原	口径 15.3 器高 1.9	口縁部は短く、外傾し、端部は丸い。 天井部は低く、ほぼ平ら。 偏平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り。 天井内面3/4、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻 色調　2.5Y7/3浅黄色
同上	618	同上	復元口径 18.8 器高 2.6	口縁部は垂直に下がり、端部は平面をなす。 天井部はやや低く、ほぼ平ら。天井部中央は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り後、ナデ調整。 天井部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　やや粗。 焼成　やや不良。 色調　5Y6/1灰色。
同上	626	I号窯灰原	口径 15.1 器高 3.4	口縁部は垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。 擬宝珠様つまみを付す。 ひずみが著しい。	マキアゲ・ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ切り。 天井部内面2/3、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　良好堅緻。 色調　5Y5/1灰色。

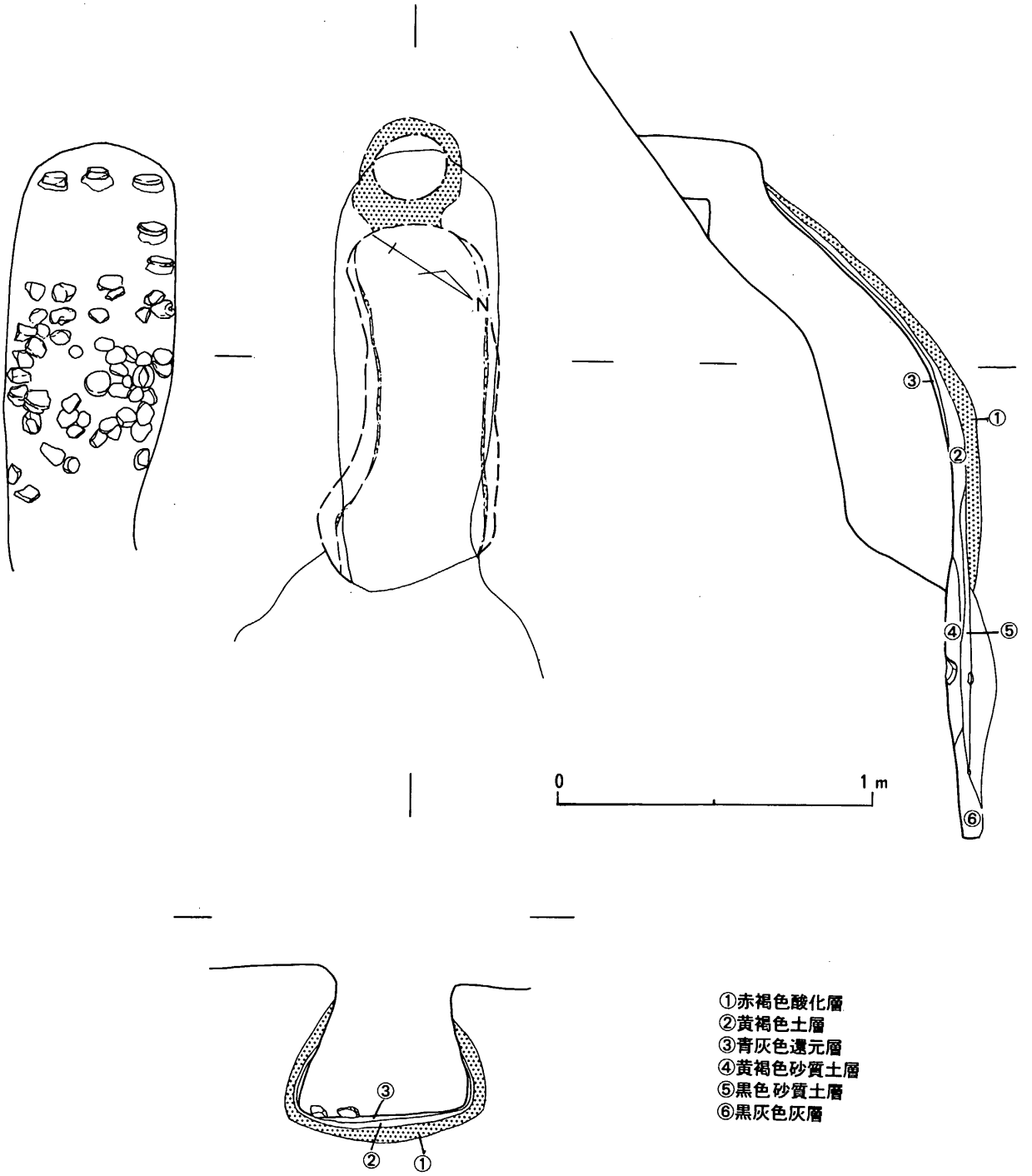
器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	638	B区灰原	口径 18.3 器高 6.2 底径 12.5	口縁部は内彎気味に上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 垂直な高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　不良。 色調　7.5Y8/1灰白色。
同上	639	同上	口径 14.2 器高 3.3	口縁部は、ほぼ垂直に上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、なだらかな凸面をなす。 高台はみとめられない。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　7.5Y8/1灰白色。
皿	640	同上	復元口径 22.6 器高 2.4 底径 14.6	口縁部は、内彎気味に上外方に伸びた後、外反し、端部は丸い。 底部は深く、凸面をなすが、底部中央部は欠損。 垂直な高台を付し、全面で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　密。 焼成　やや不良。 色調　2.5Y8/2灰白色。
蓋杯(身)	646	灰原灰層中	口径 13.4 器高 4.0 底径 8.6	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 垂直な高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向ナデ調整。 その他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土　やや粗。 焼成　甘く軟質。 色調　2.5Y8/3浅黄色。

図　　版

①赤褐色酸化層
②黄褐色土層
③黒色灰粘質土層
④暗茶褐色粘質土層
⑤灰茶褐色粘質土層
⑥黒褐色灰層

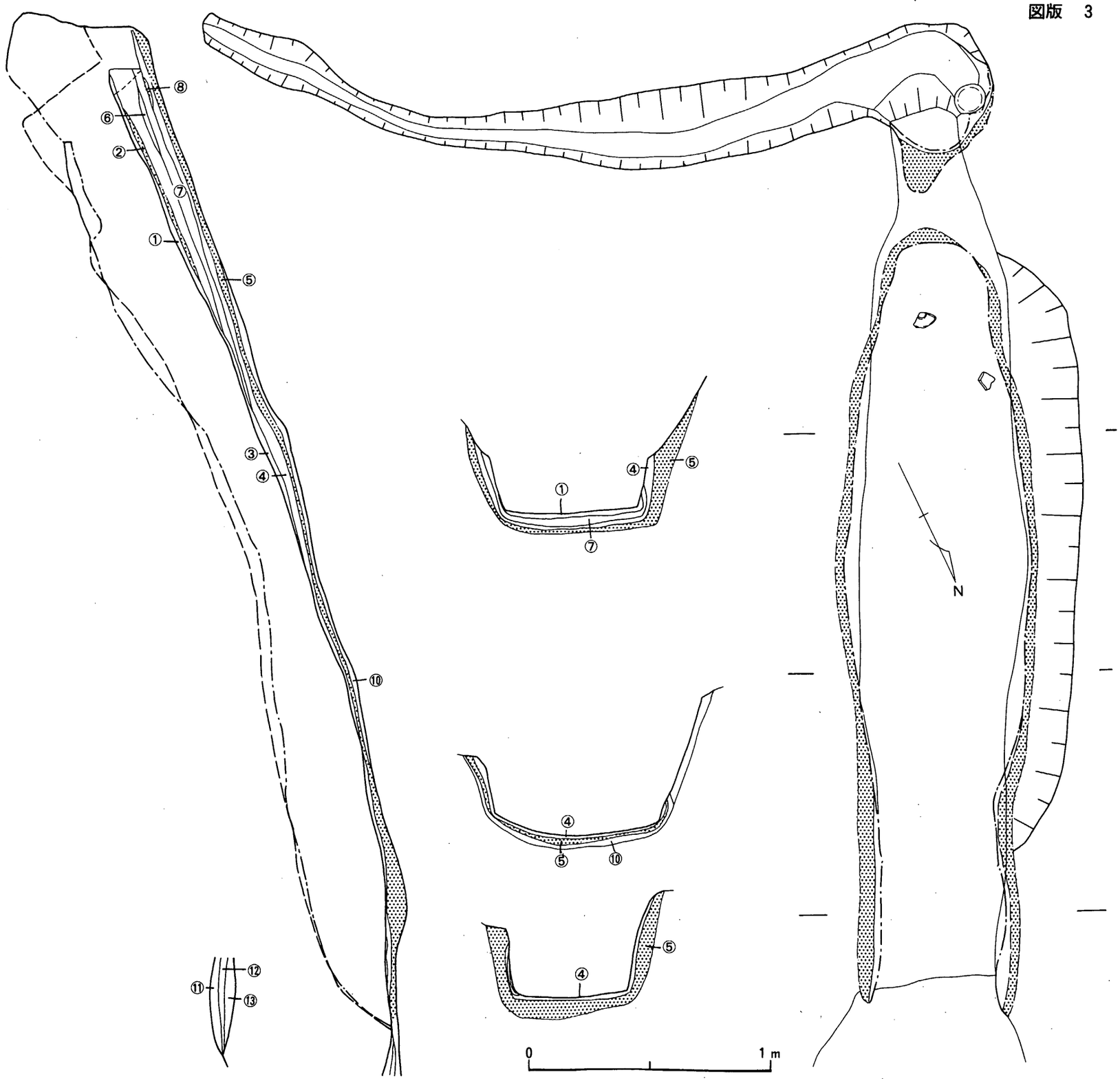


26－Ⅰ号窯遺構実測図



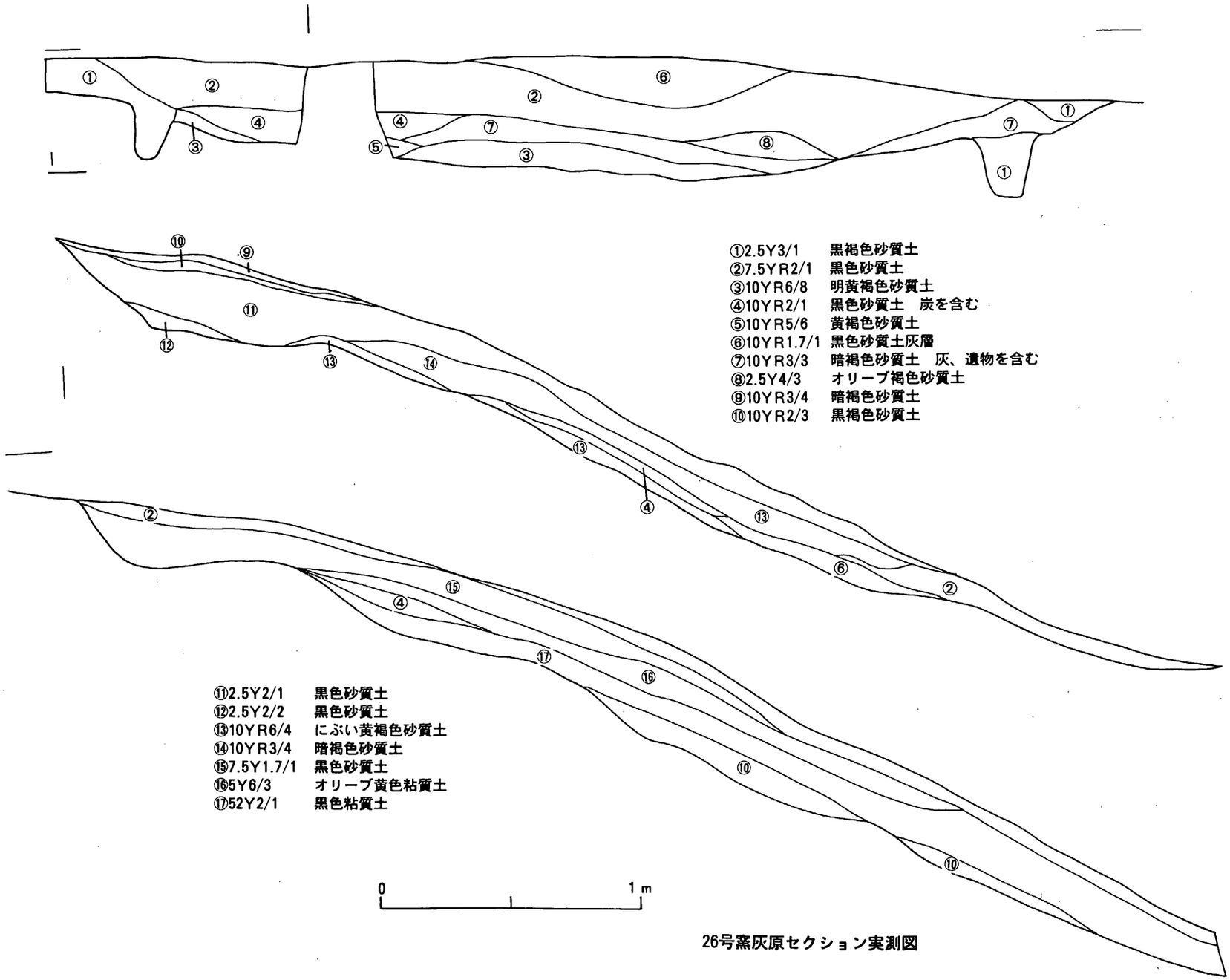
①赤褐色酸化層
②黄褐色土層
③青灰色還元層
④黄褐色砂質土層
⑤黒色砂質土層
⑥黒灰色灰層

26－Ⅱ号窯遺構実測図

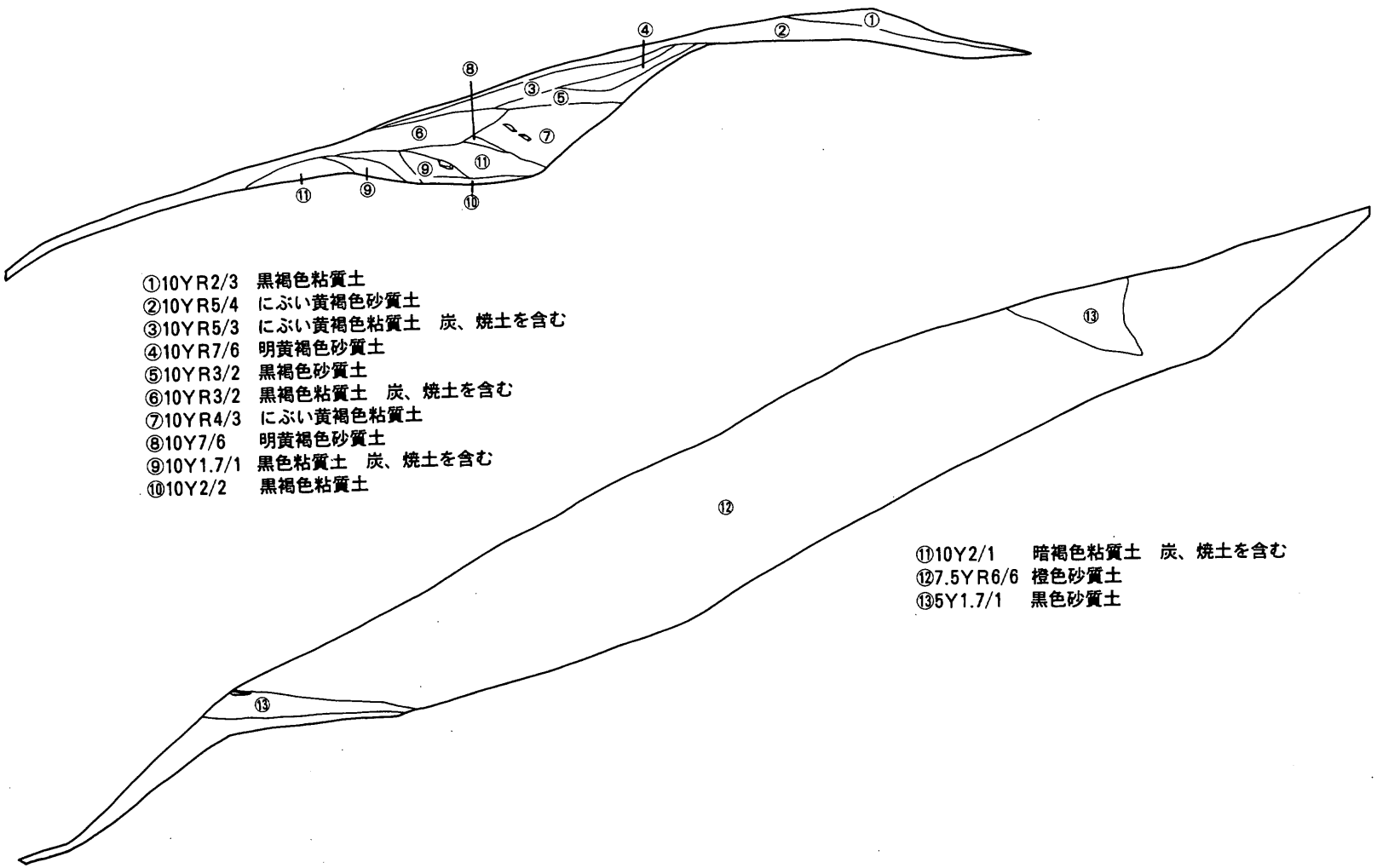


①10YR8/3　浅黄橙色砂質土
②10YR3/2　暗赤褐色砂質土
③7.5Y6/2　灰オリーブ色砂質土
④7.5Y8/3　浅黄橙色砂質土
⑤10R6/4　にぶい赤橙色酸化層
⑥10YR3/1　黒褐色砂質土
⑦10YR4/2　オリーブ灰色砂質土
⑧2.5YR3/4　暗赤褐色砂質土
⑨10GY6/1　緑灰色還元層
⑩7.5R2/3　極暗赤褐色砂質土
⑪10YR6/6　明黄褐色砂質土
⑫10YR3/1　黒褐色砂質土
⑬2.5Y7/6　明黄褐色砂質土

27号窯遺構実測図



26号窯灰原セクション実測図



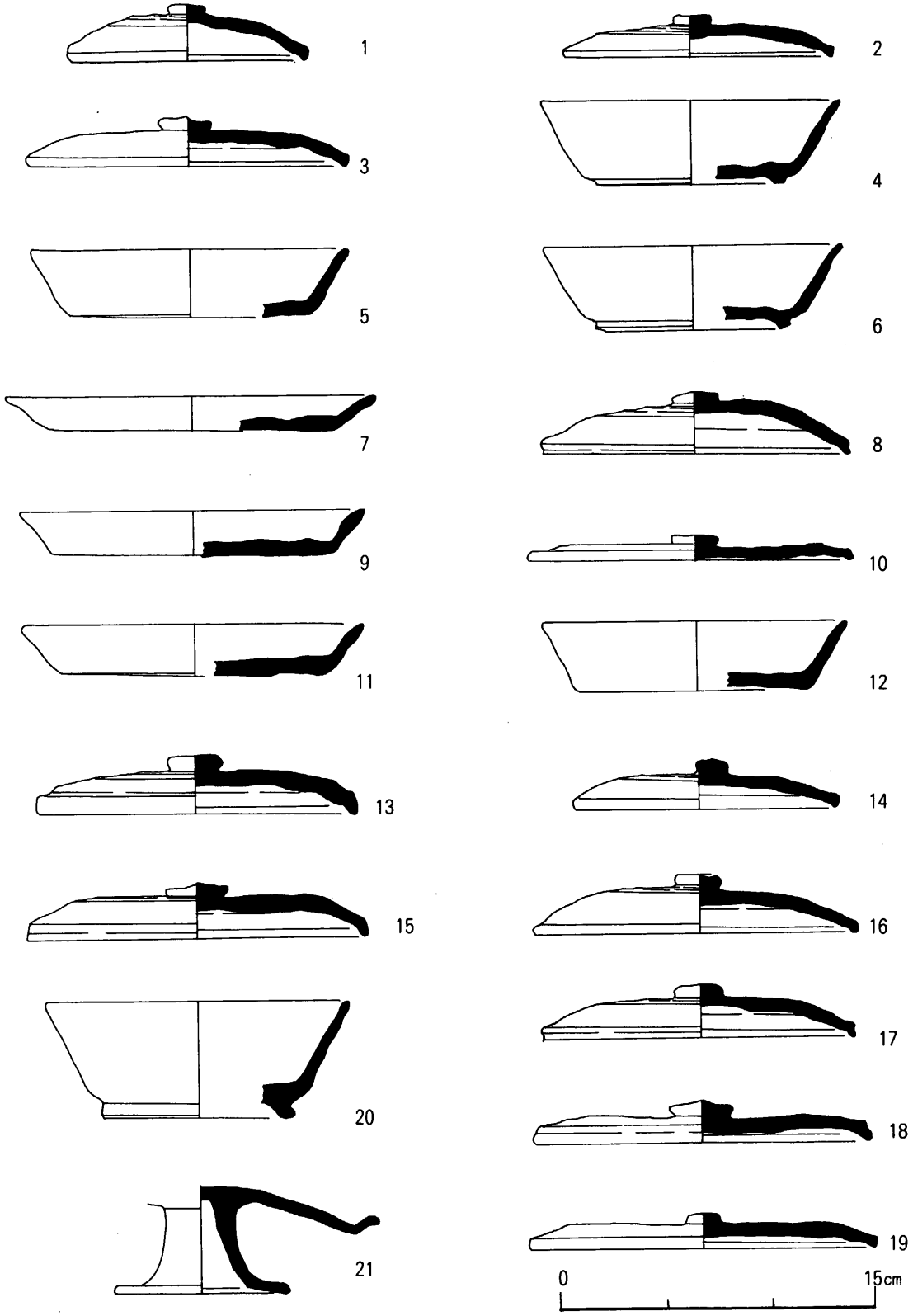
27号窯灰原セクション実測図

①
②
③
④
⑤
⑥
①赤褐色酸化層
②黄褐色土層
③青灰色還元層
④灰黄褐色やや粘質土
⑤黒灰色やや粘質土
⑥黒色土層土器・窯壁を含む

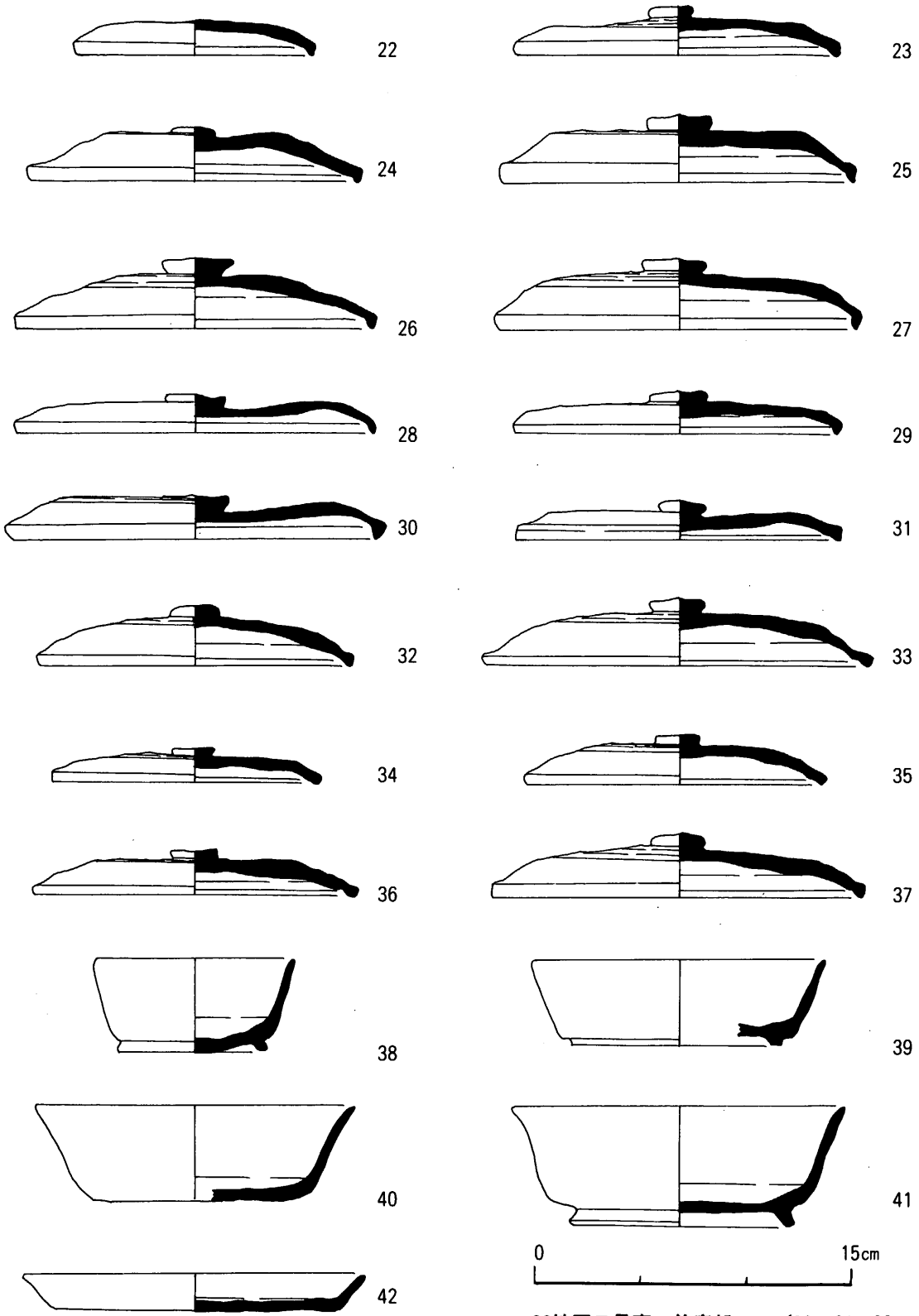
28号窯遺構実測図

①赤褐色酸化層
②青灰色還元層
③黒色灰層
④褐色土層　粘土・焼土を含む
⑤褐色粘質土を含む黒色灰層
⑥淡褐色土層　炭を含む
0
1 m

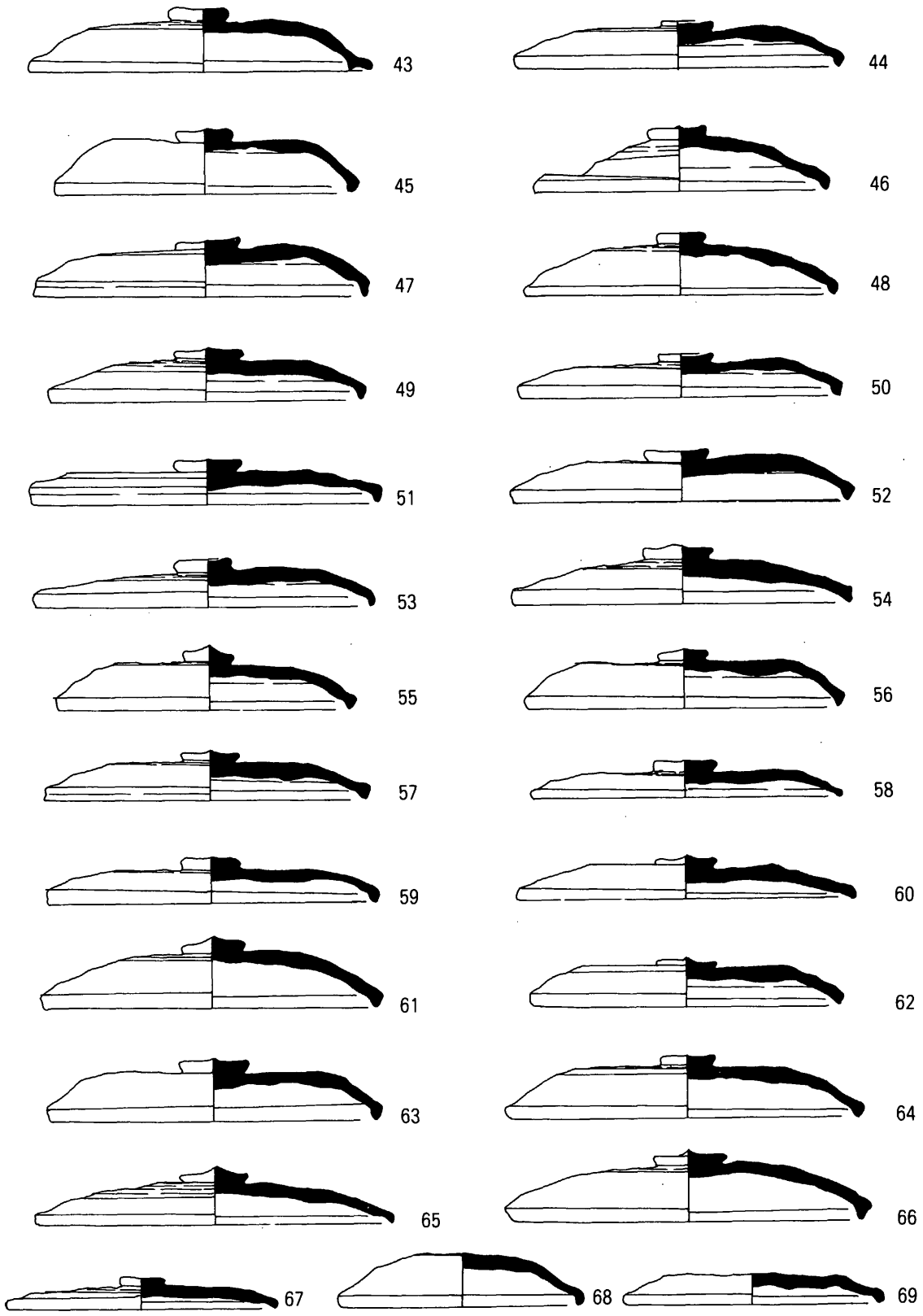
29号窯遺構実測図



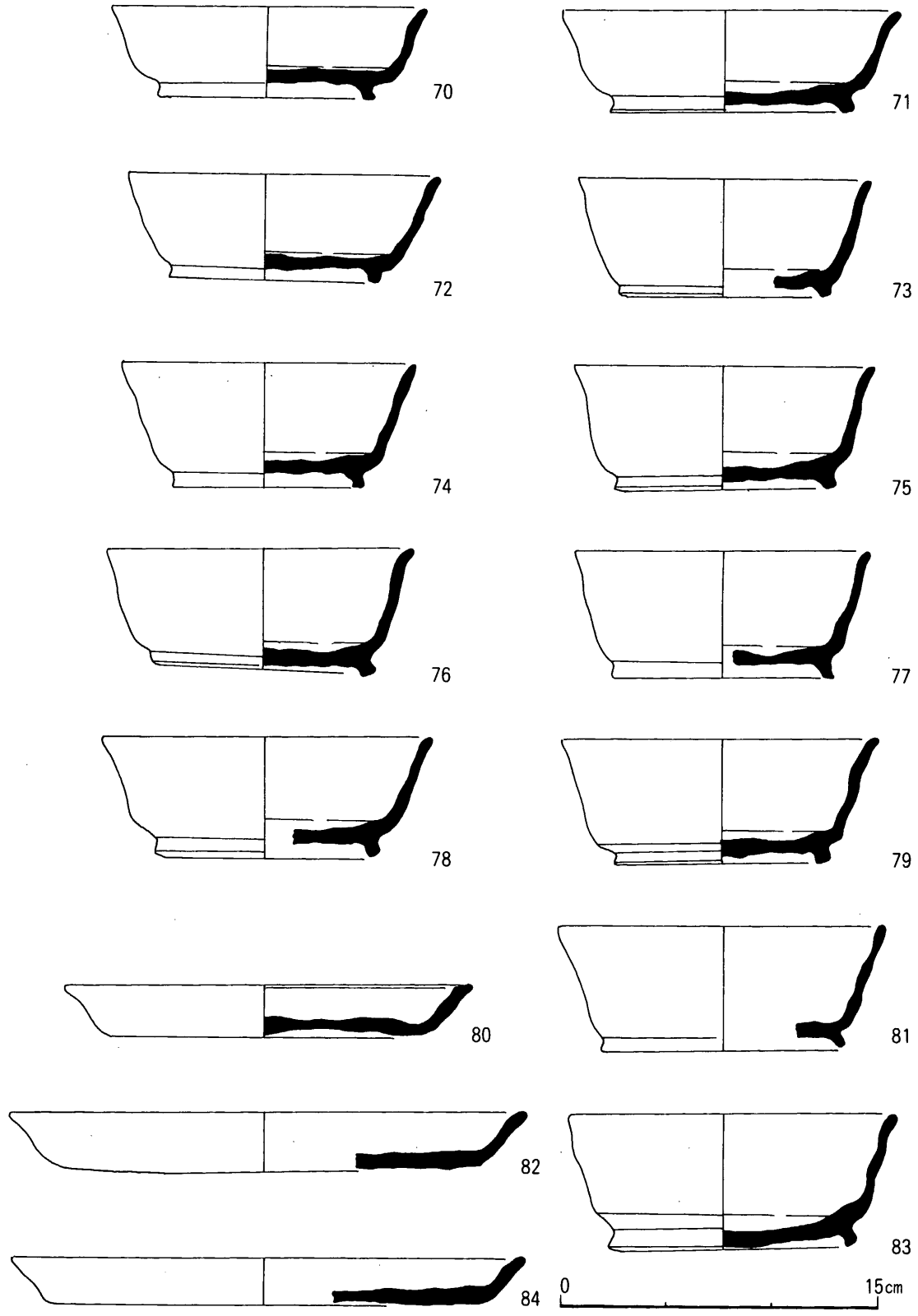
26地区Ⅰ号窯　燃焼部床面（1～7）
同　上　焼成部床面（8～12）
同　上　前庭部灰原（14～21）
同　上　土坑　（13）



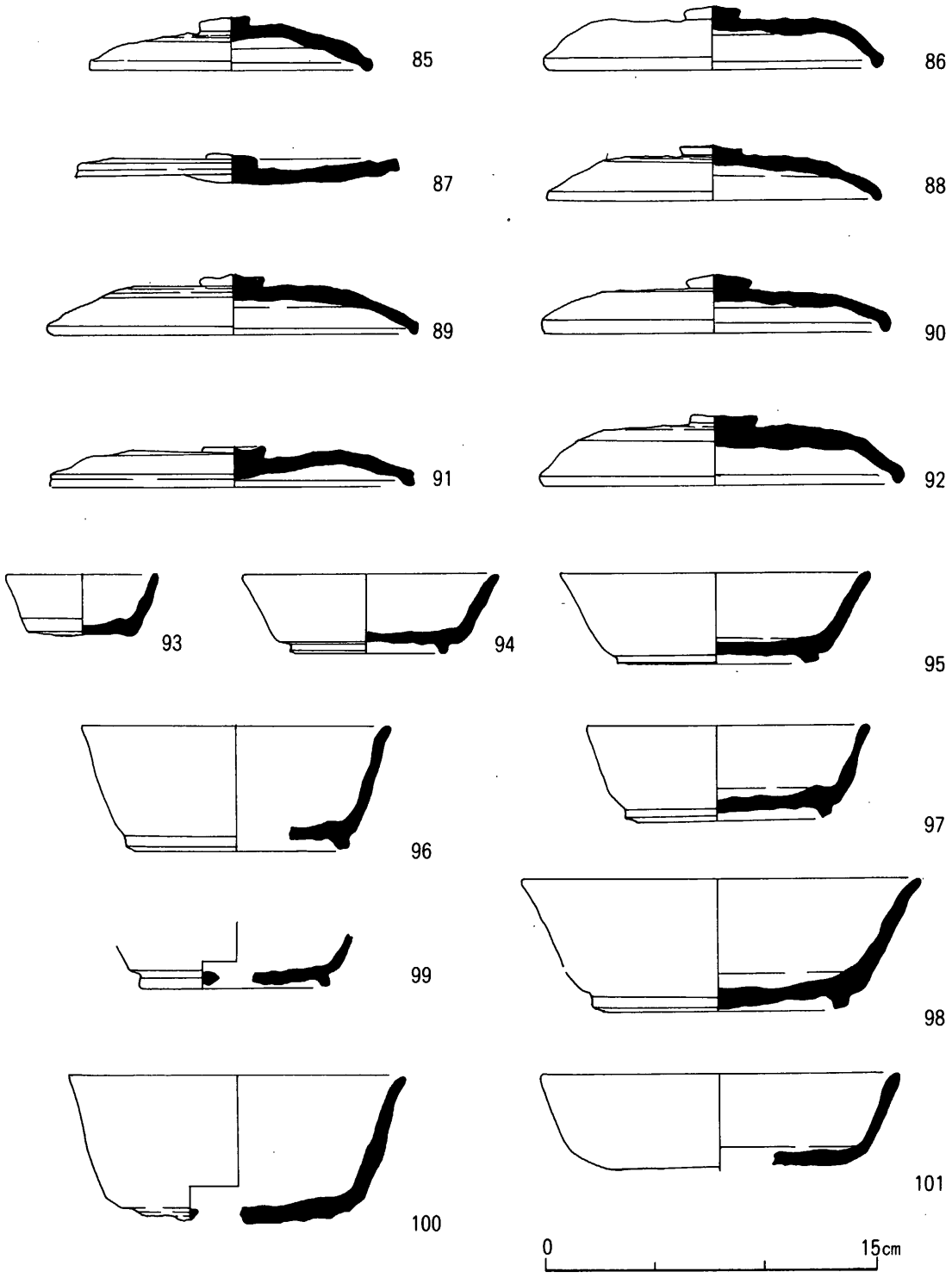
26地区Ⅱ号窯　前庭部　(22～31, 38～41)
同　上　窯体内埋土 (32, 33)
同　上　窯体右側　(34～37, 42)



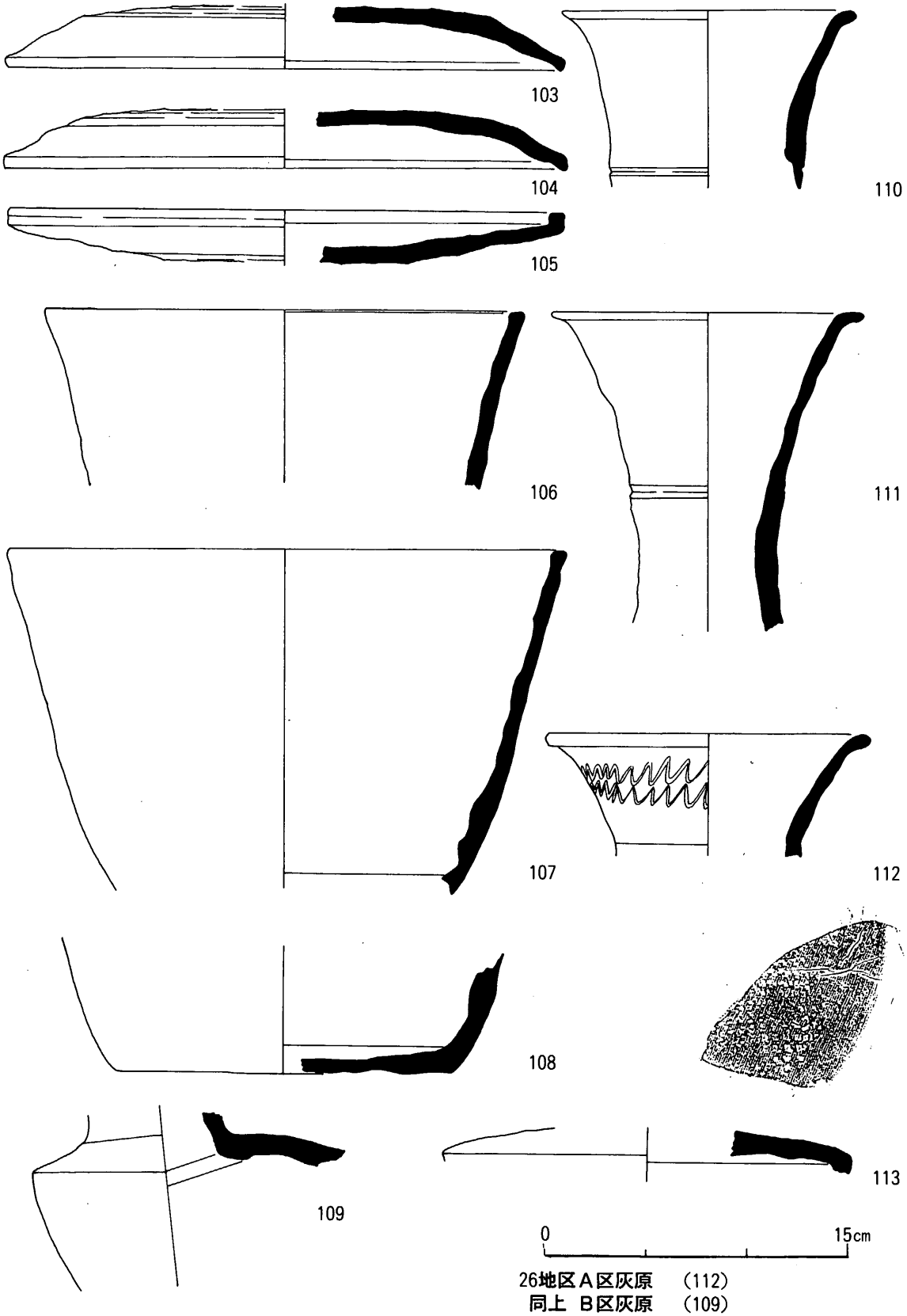
26地区Ａ区灰原（43～69）



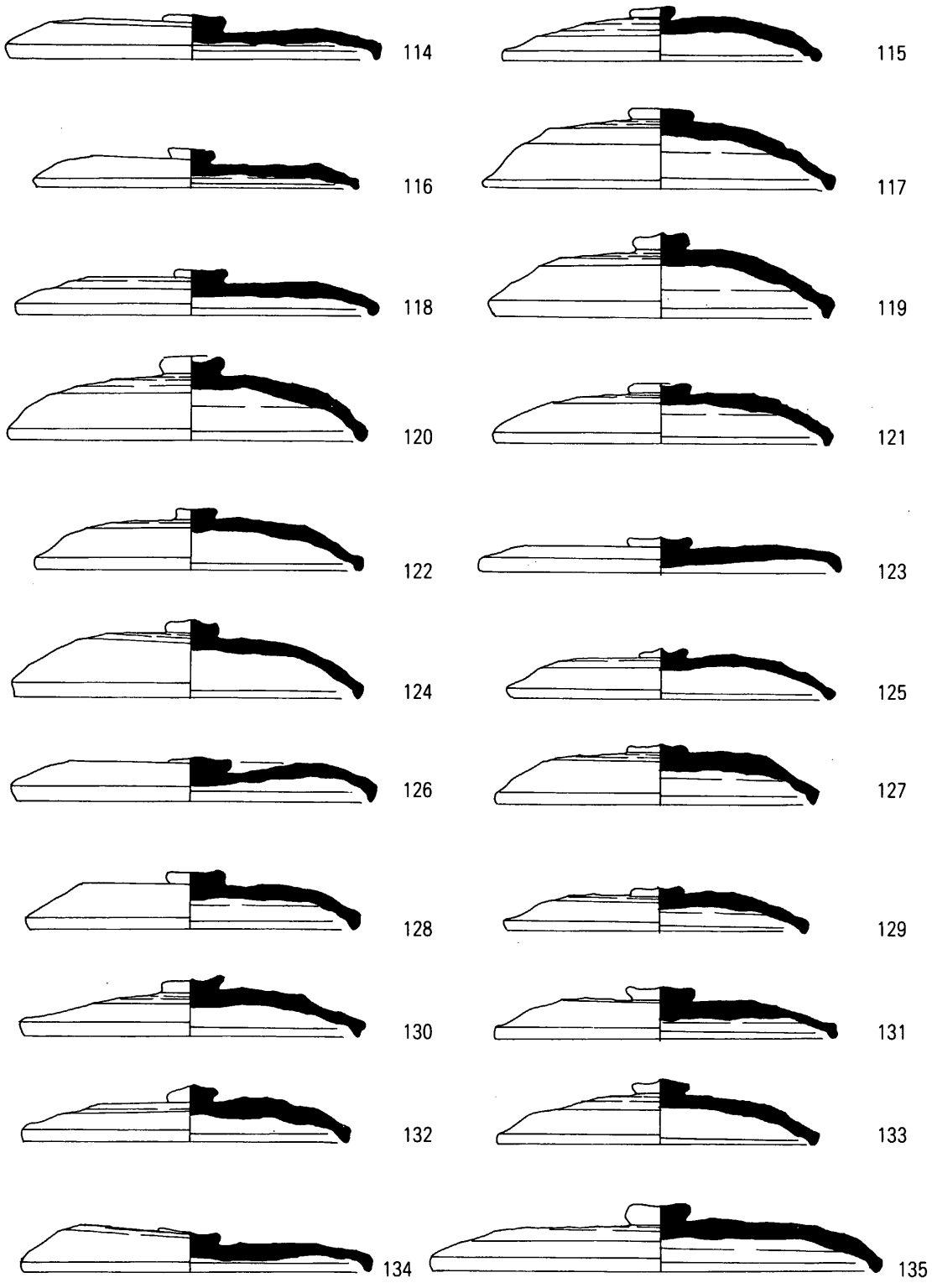
26地区Ａ区灰原（70～84）



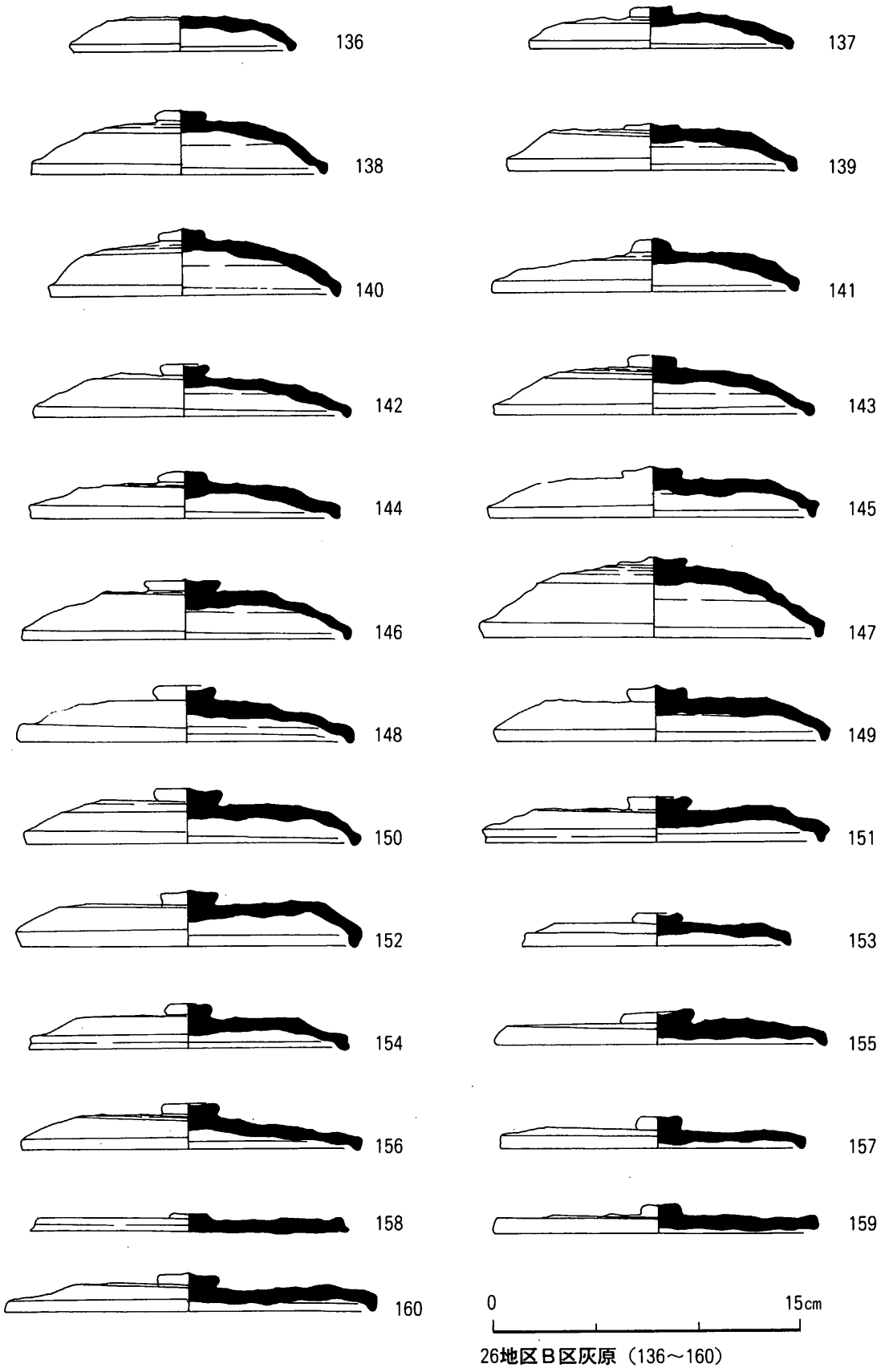
26地区A区灰原　(86, 96, 99)
同上　B区灰原　(102)
同上　F区灰原　(91, 92, 97, 98, 100)
同上　AF区灰原　(87, 88)
同上　CD区灰原　(89, 90 ,94, 95)
同上　灰原　(85, 93, 101)



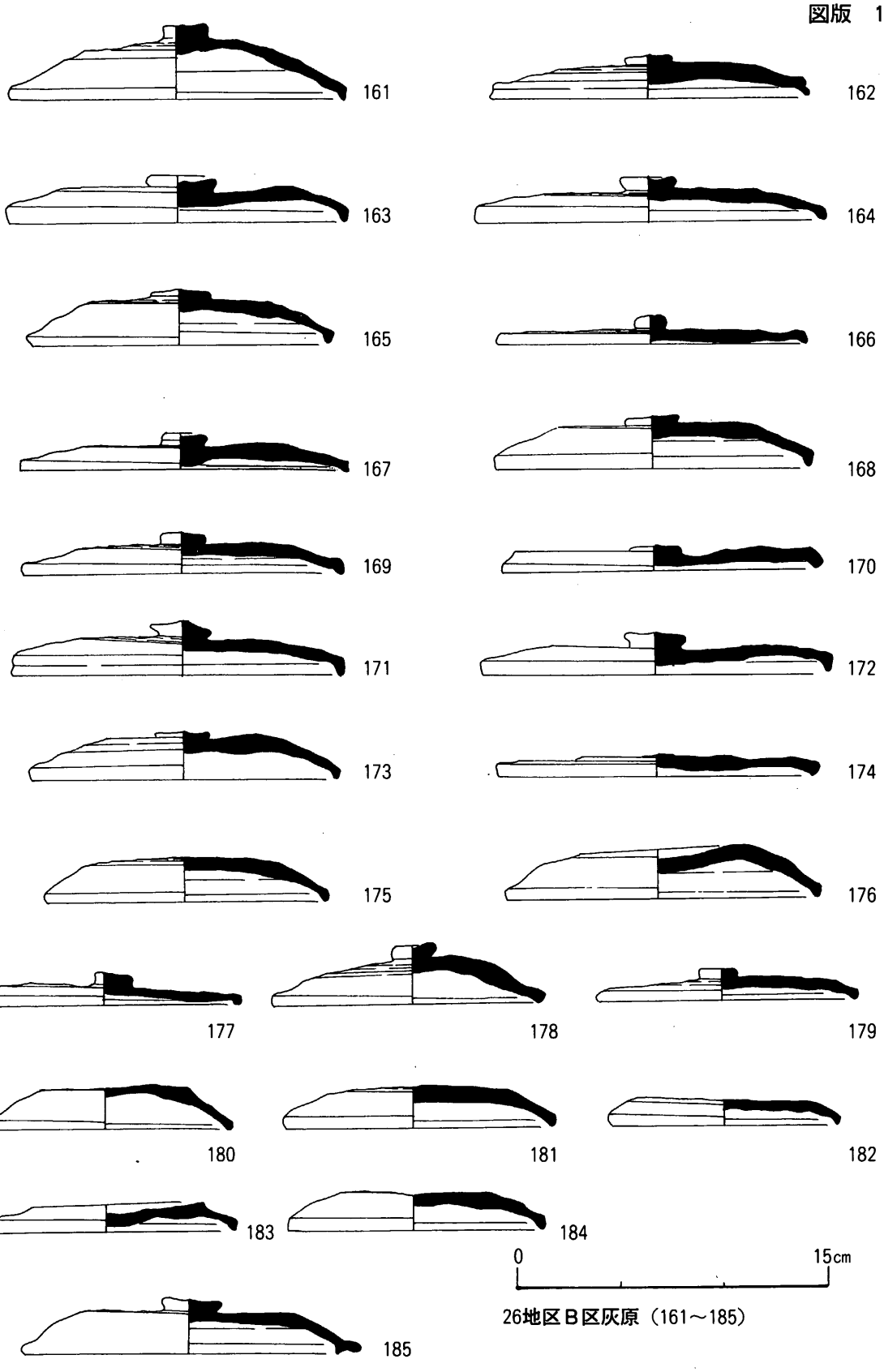
26地区A区灰原　(112)
同上 B区灰原　(109)
同上 C区灰原　(103, 105, 107, 108)
同上 E区灰原　(110, 111)
同上 灰原　(104, 106, 113)



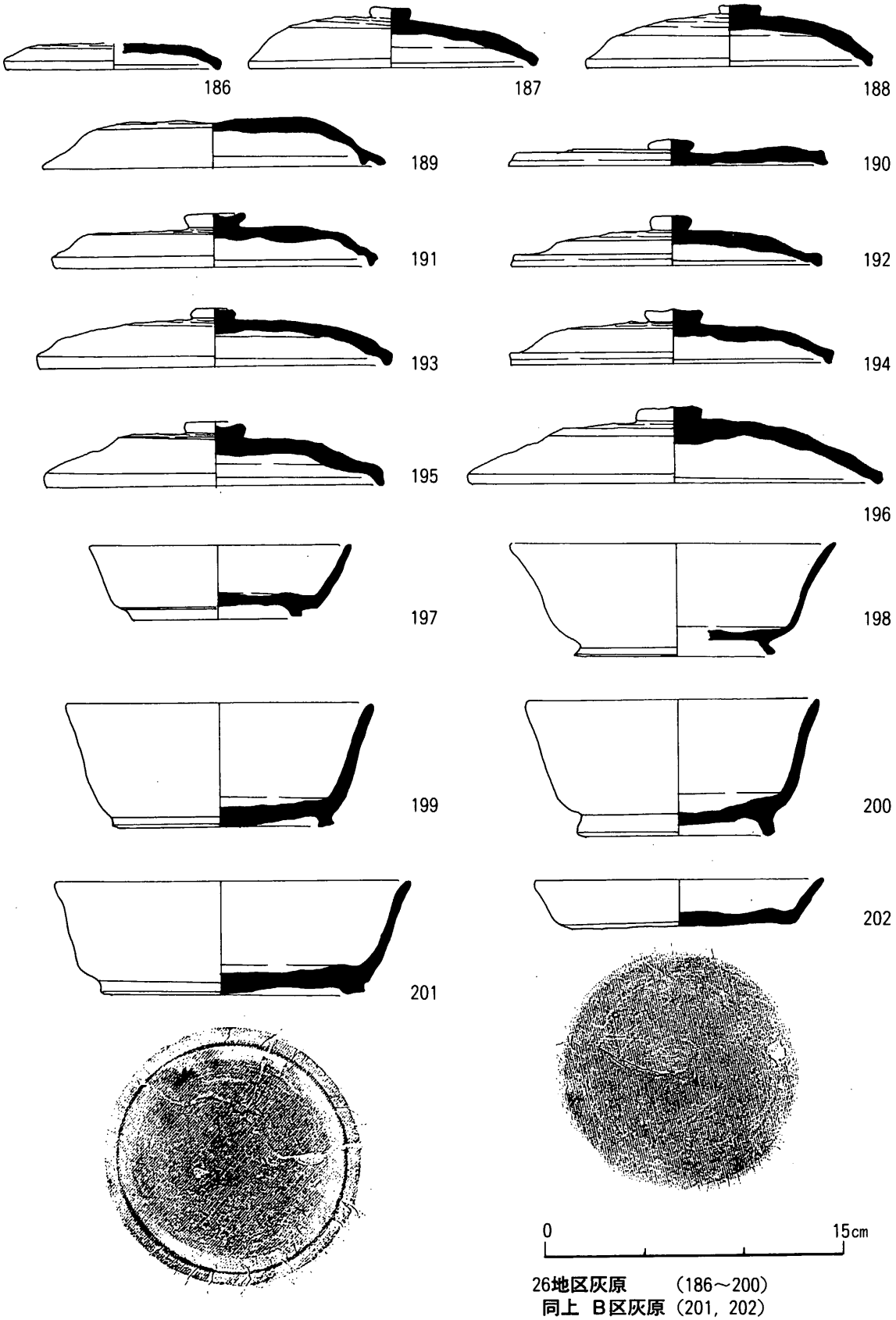
26地区Ｂ区灰原（114～135）



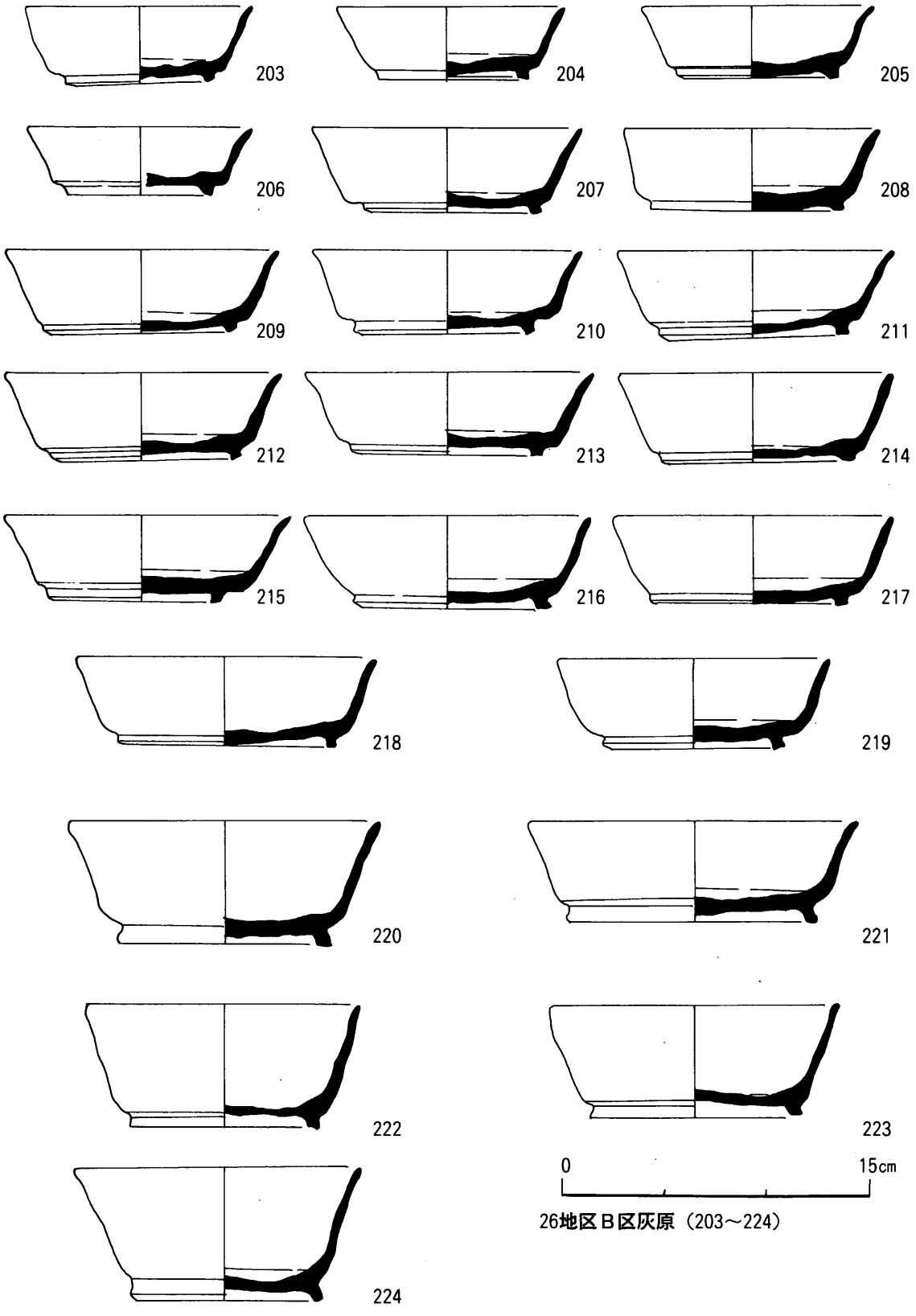
26地区Ｂ区灰原（136～160）



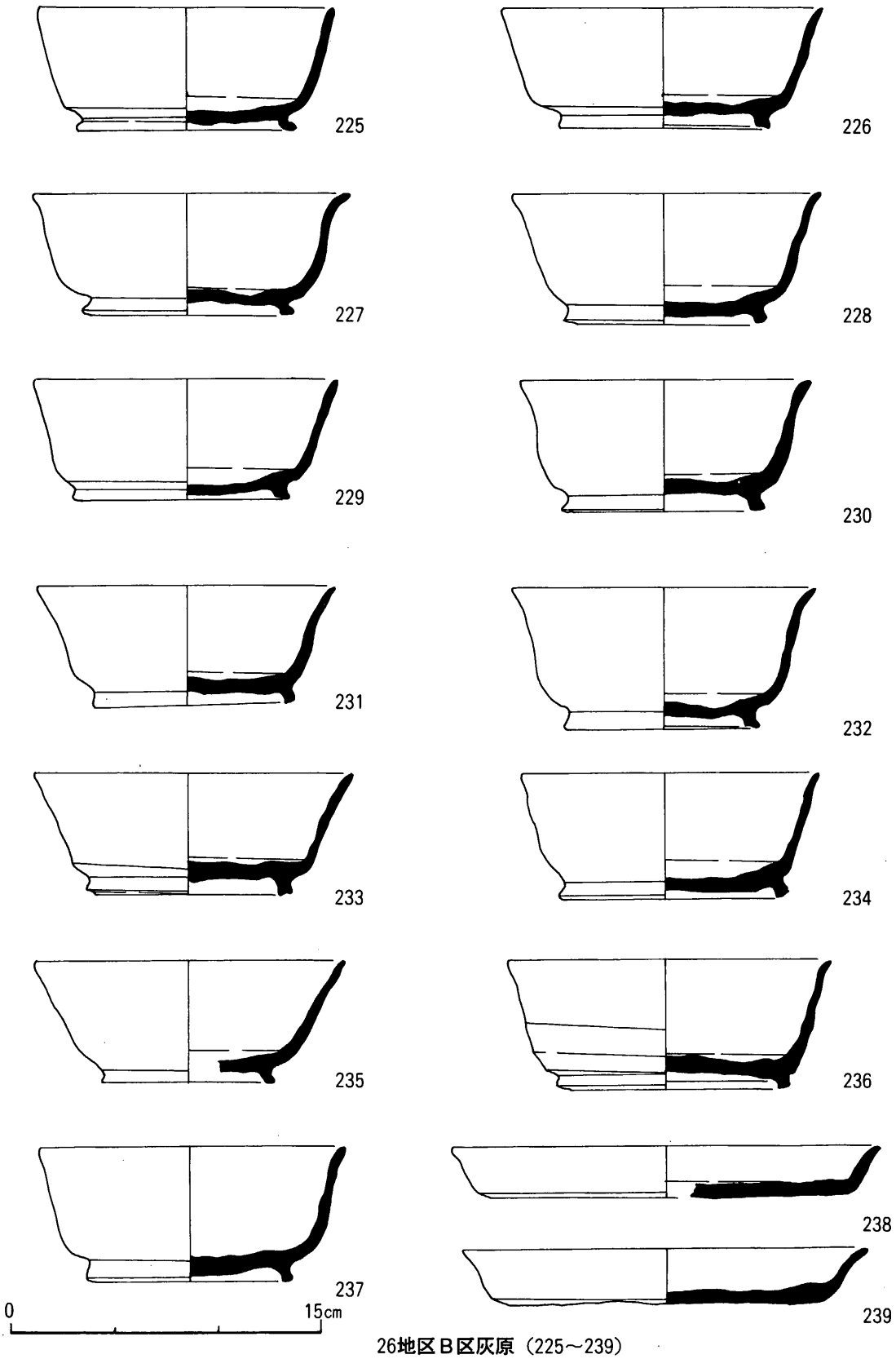
26地区B区灰原（161～185）



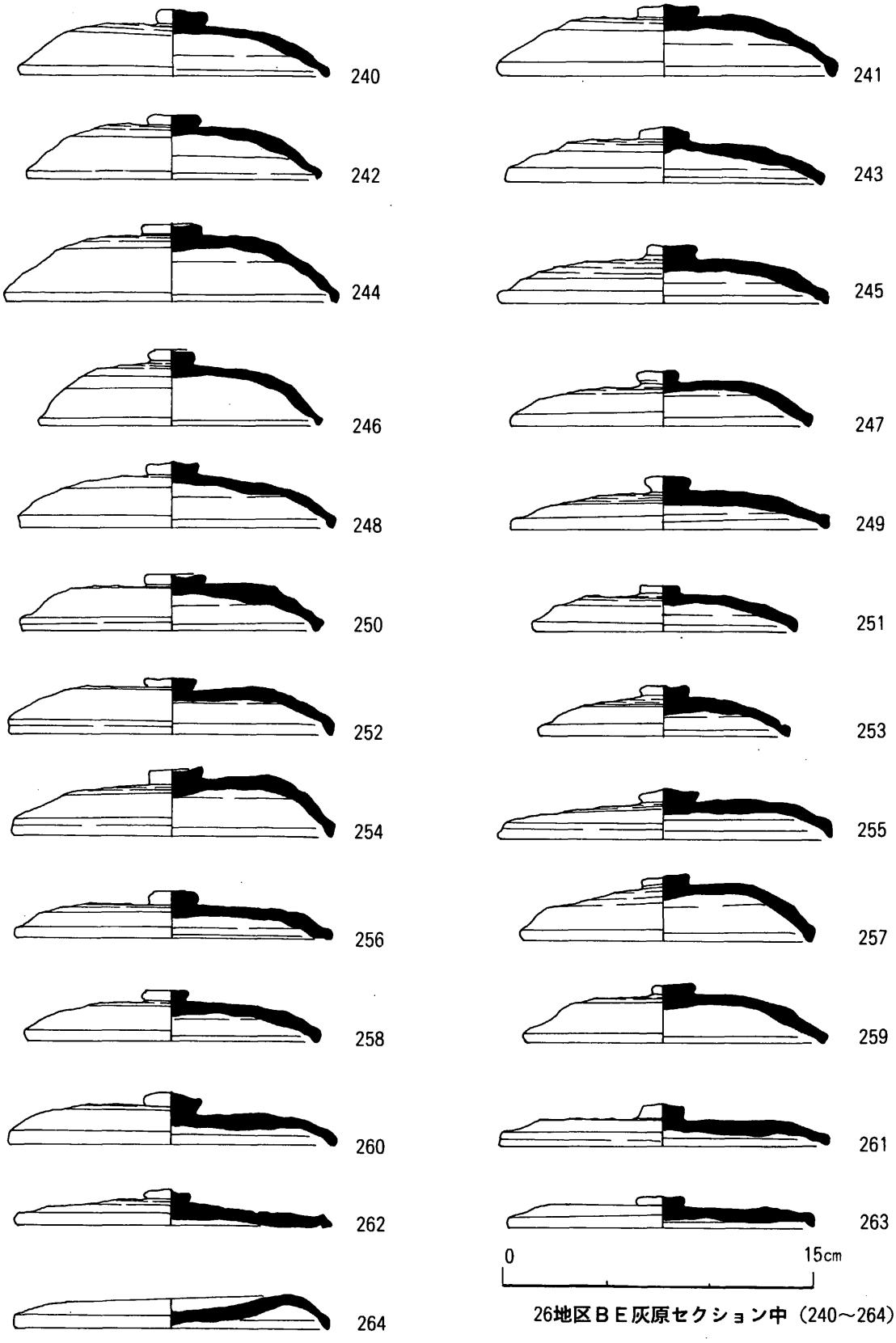
26地区灰原　　(186～200)
同上　B区灰原 (201, 202)



26地区Ｂ区灰原（203～224）

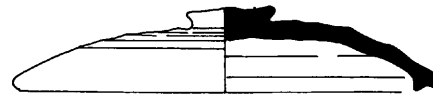


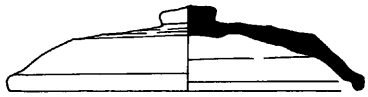
26地区Ｂ区灰原（225～239）

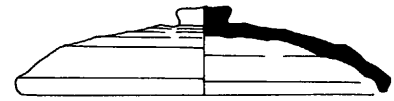


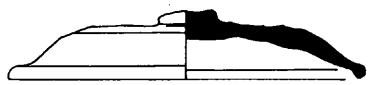
26地区ＢＥ灰原セクション中（240～264）

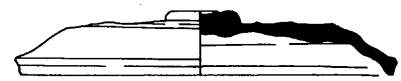

265


266


267

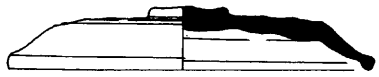

268

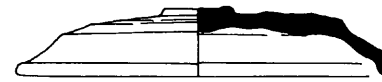

269

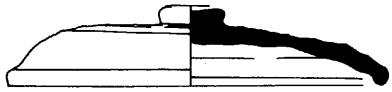

270

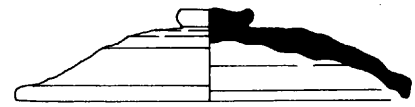

271

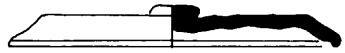

272


273


274

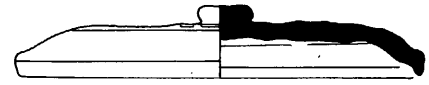

275


276


277

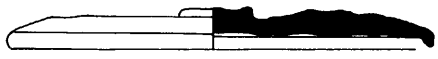

278

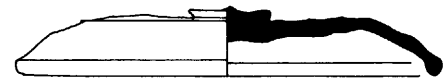

279

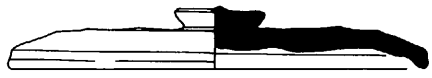

280


281


282

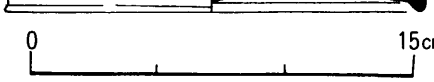

283

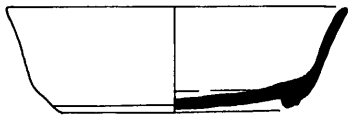

284

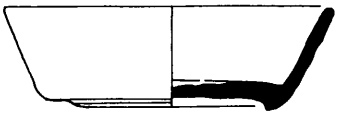

285

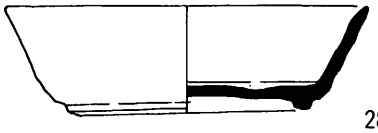

286

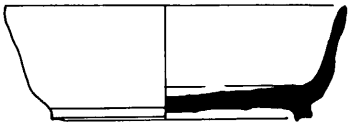
26地区ＢＥ灰原セクション中（265～286）

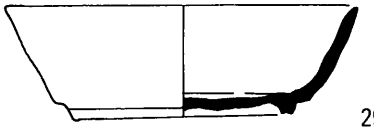


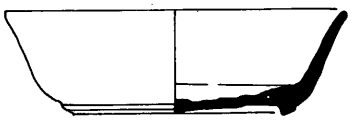

287

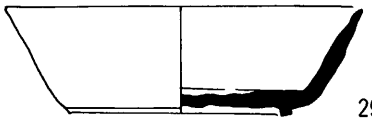

288

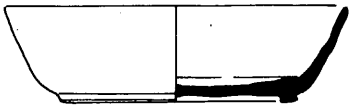

289

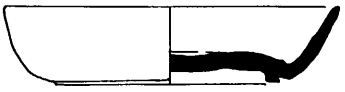

290

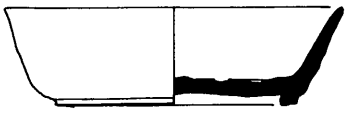

291

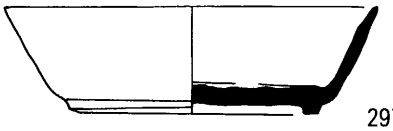

292

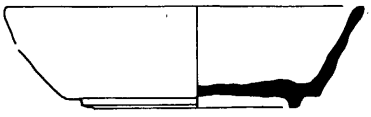

293

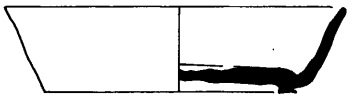

294

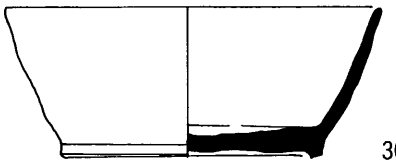

295


296

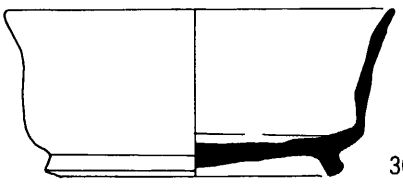

297

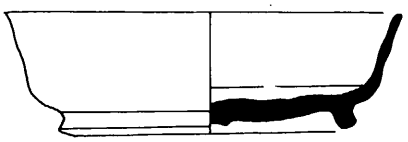

298


299


300

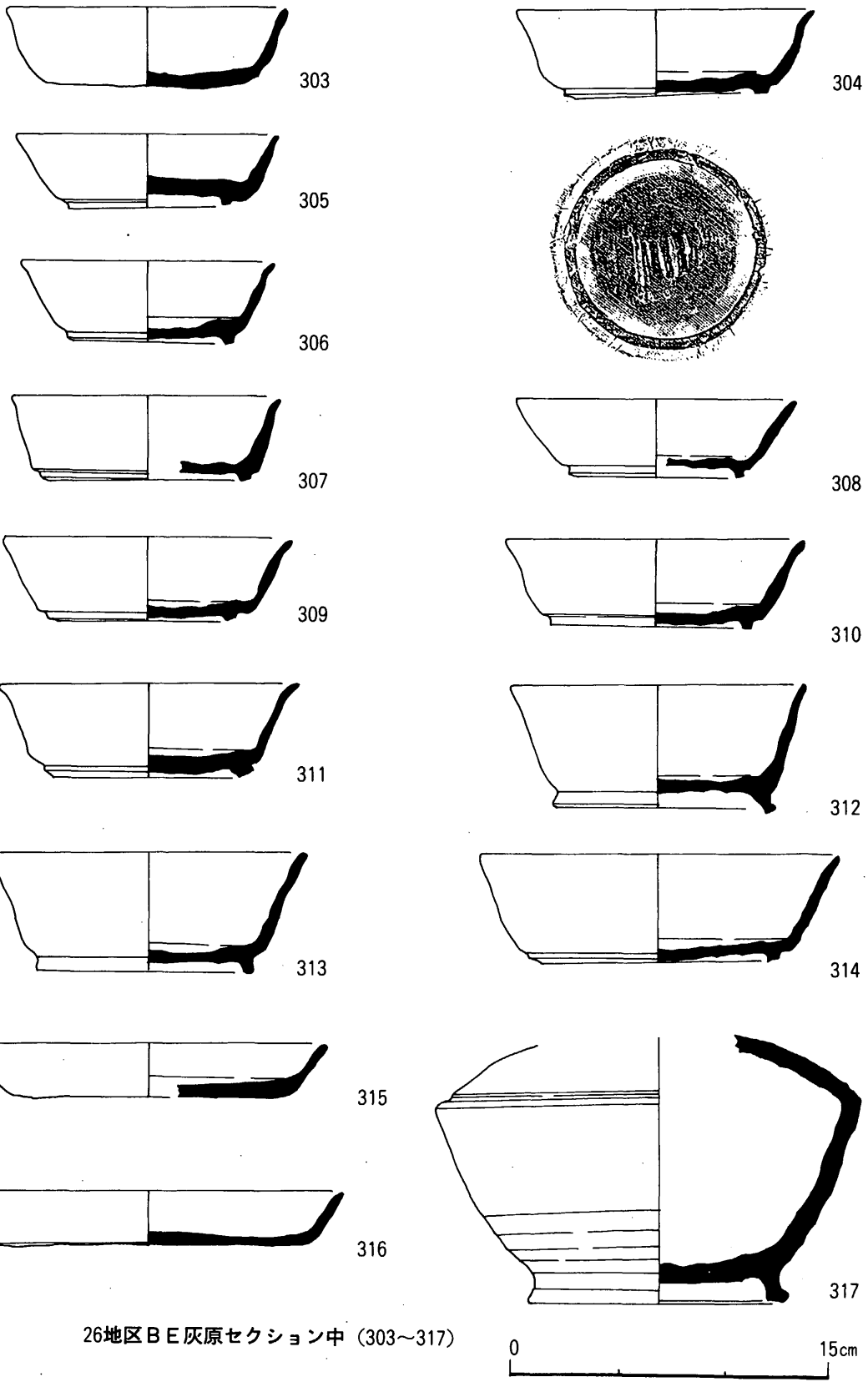



301

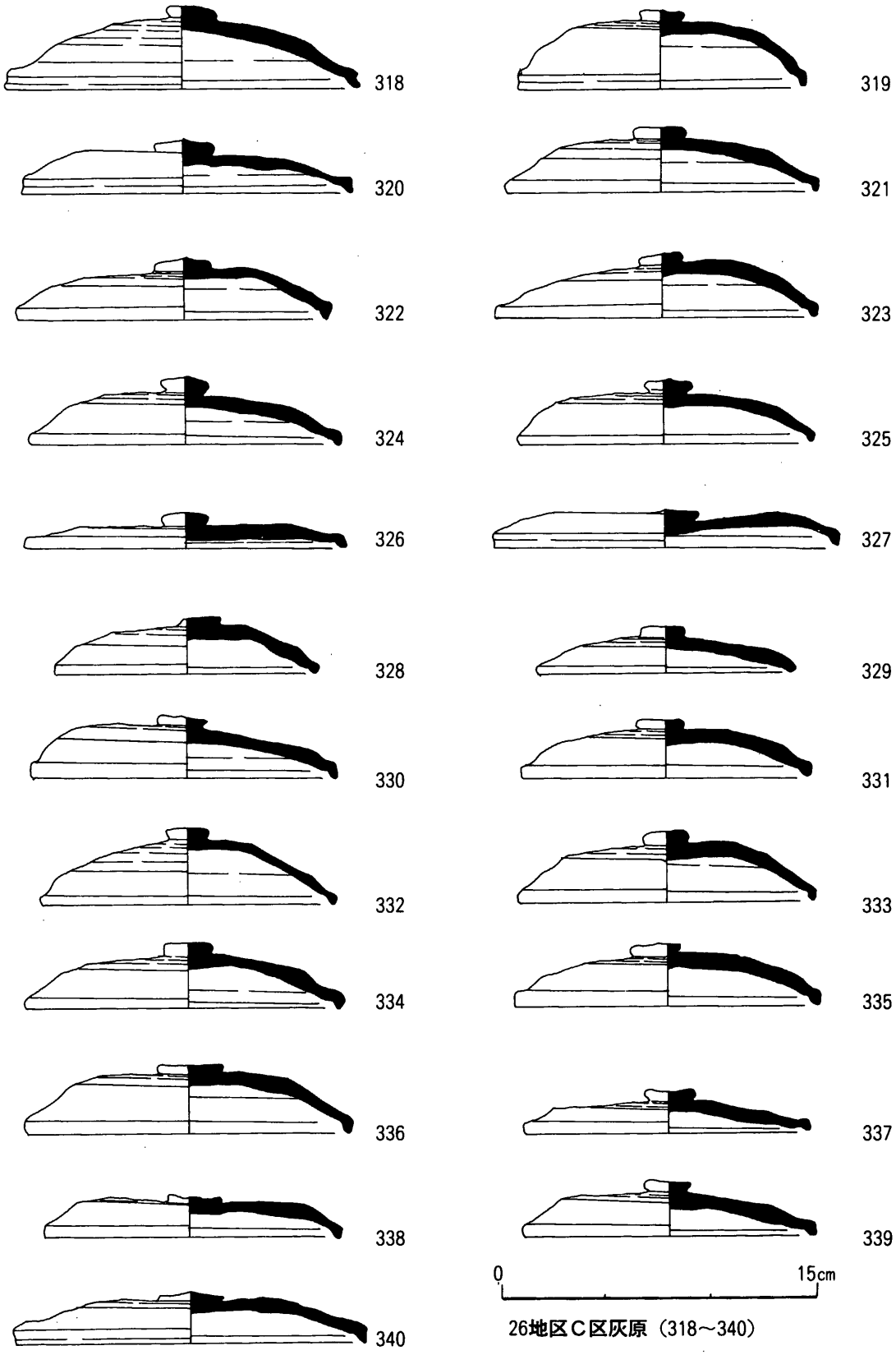




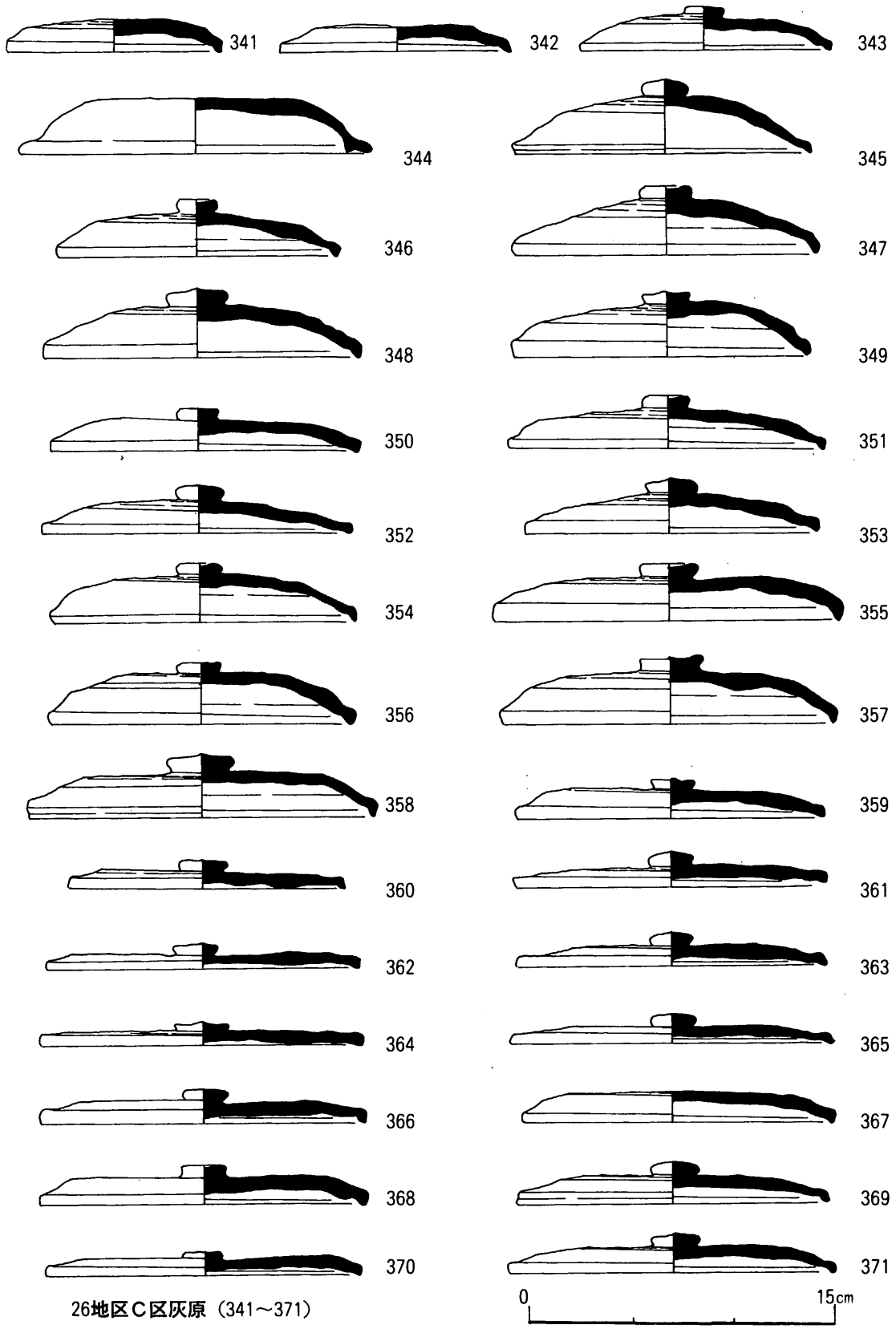
26地区ＢＥ灰原セクション中（287～302）



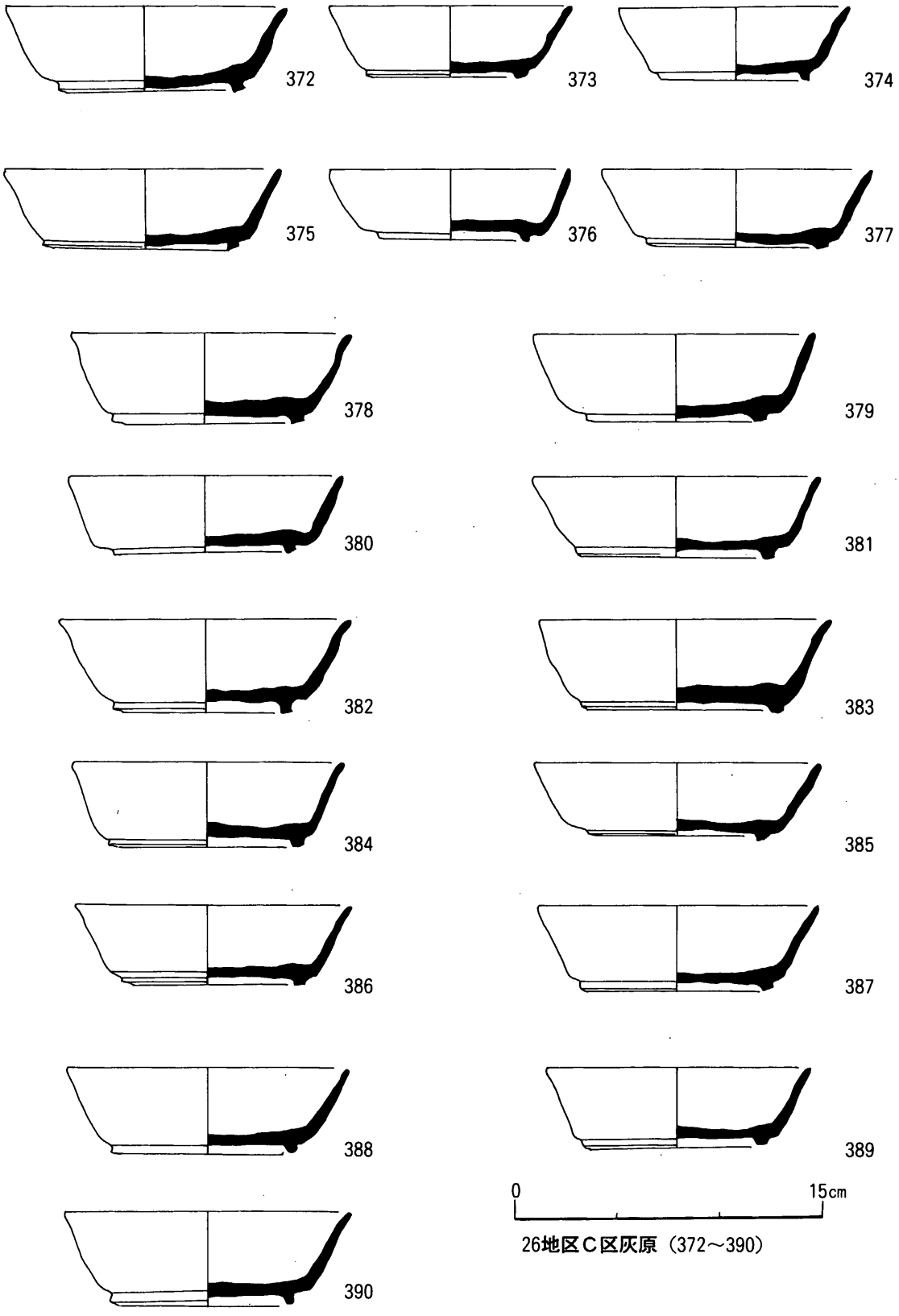
26地区ＢＥ灰原セクション中（303～317）



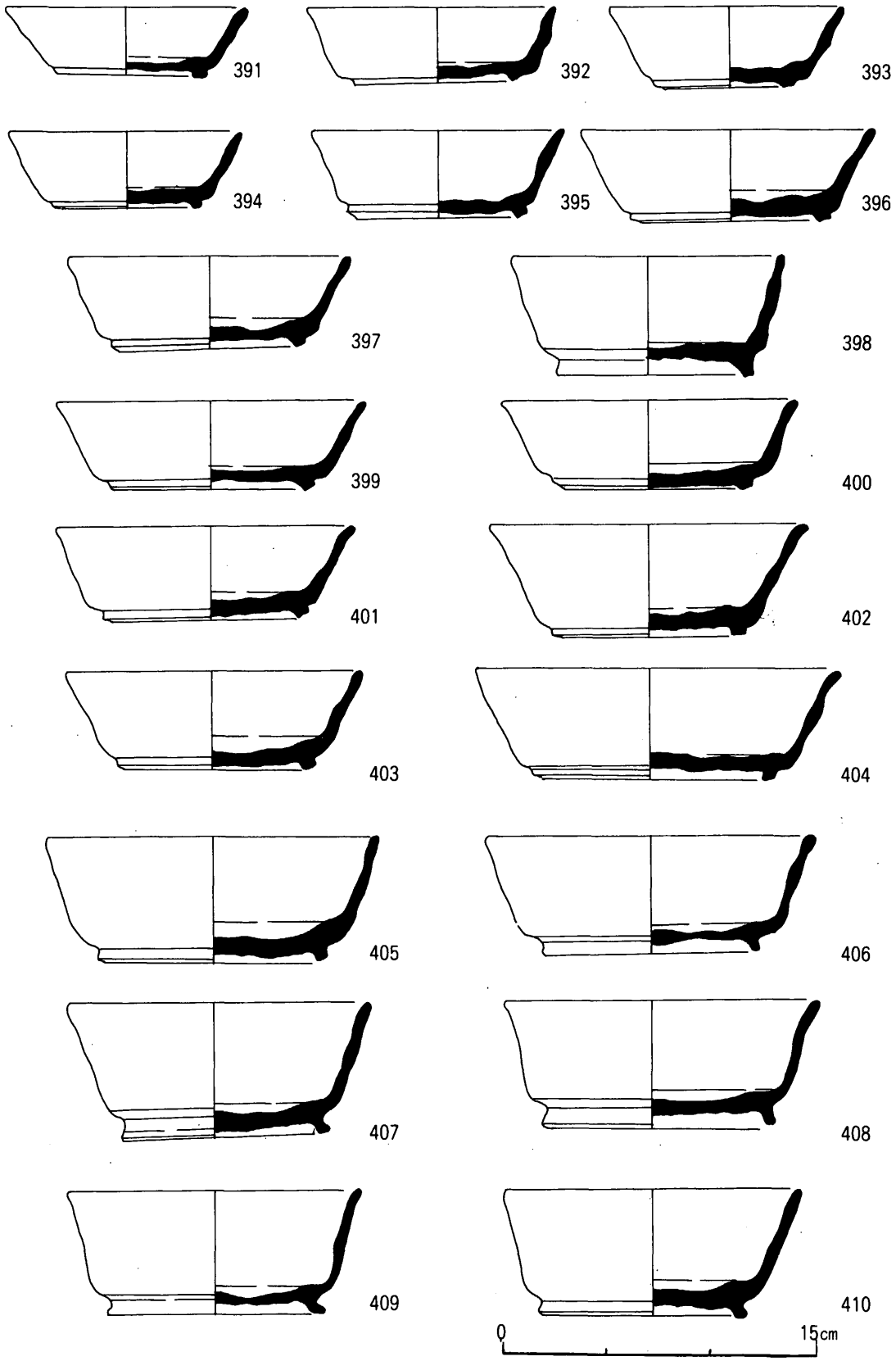
26地区C区灰原（318～340）



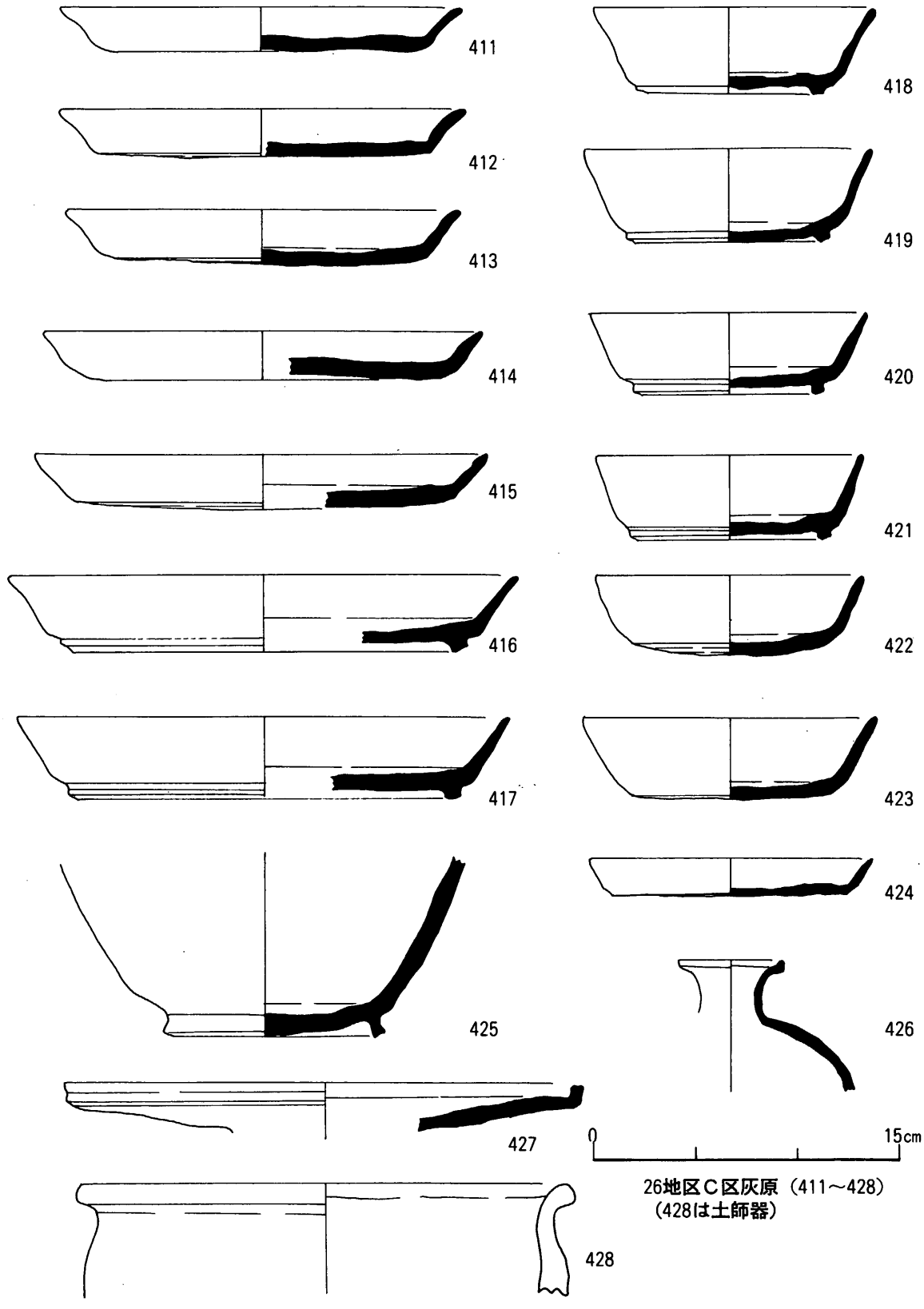
26地区C区灰原（341～371）



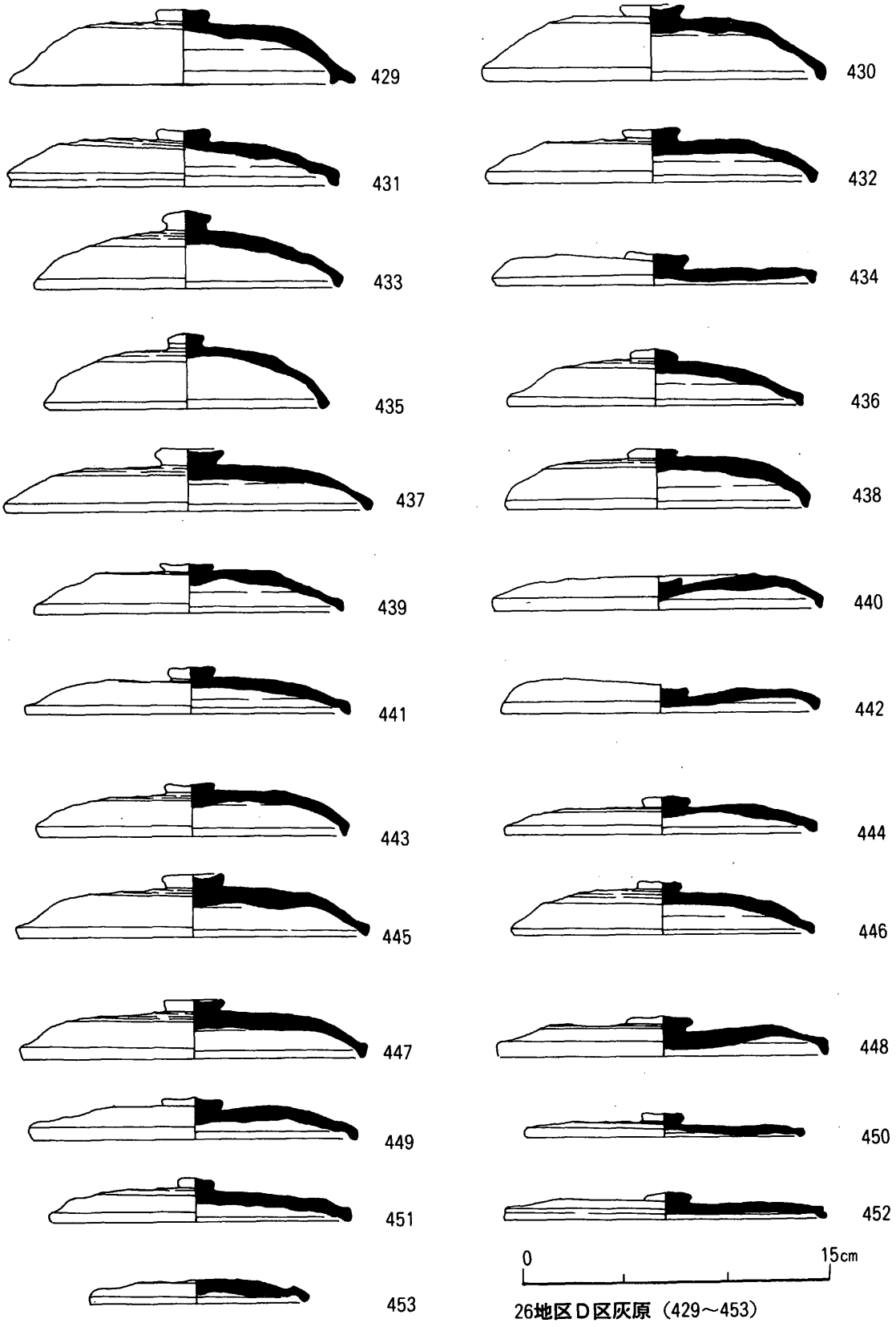
26地区C区灰原（372～390）



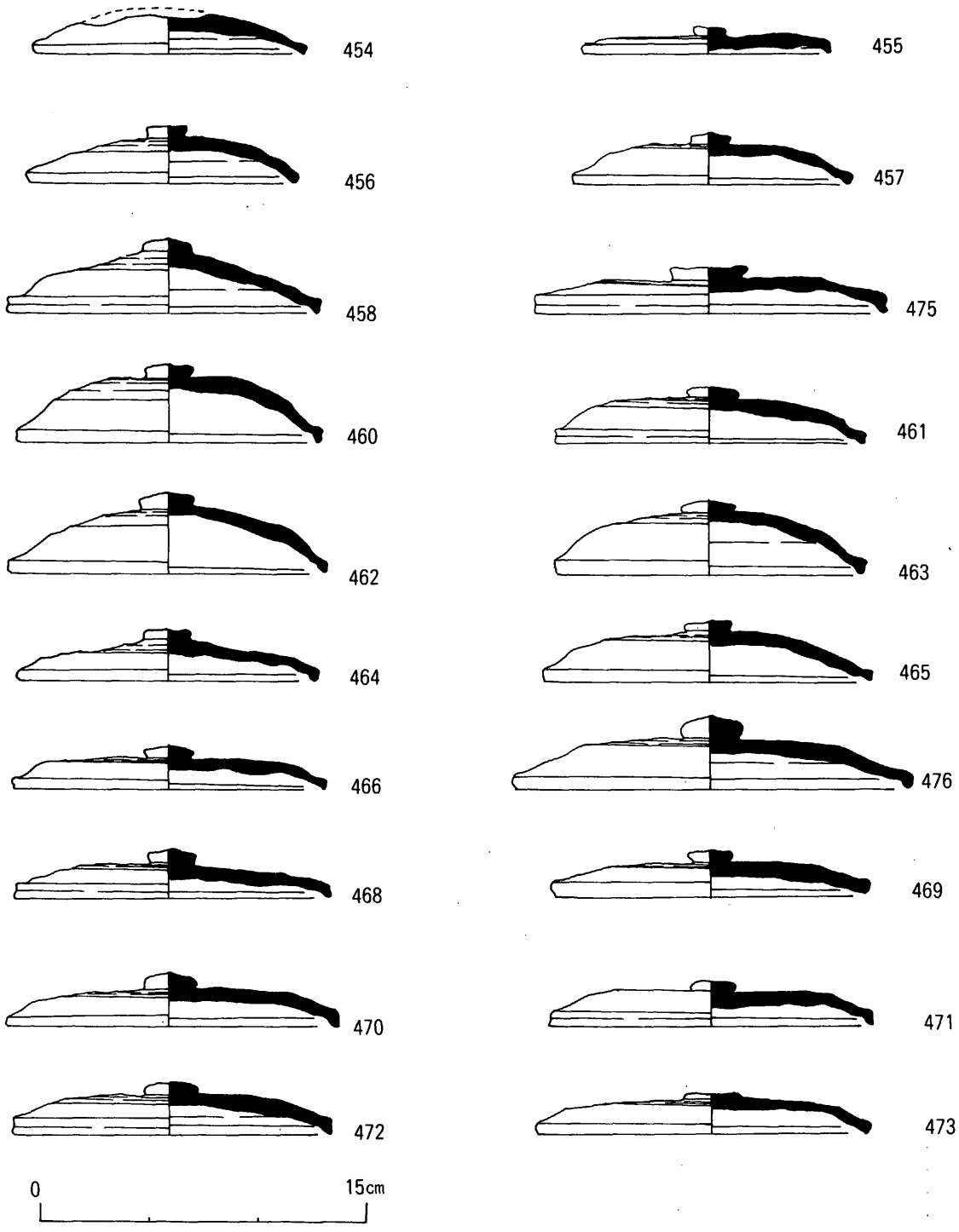
26地区C区灰原（391～410）



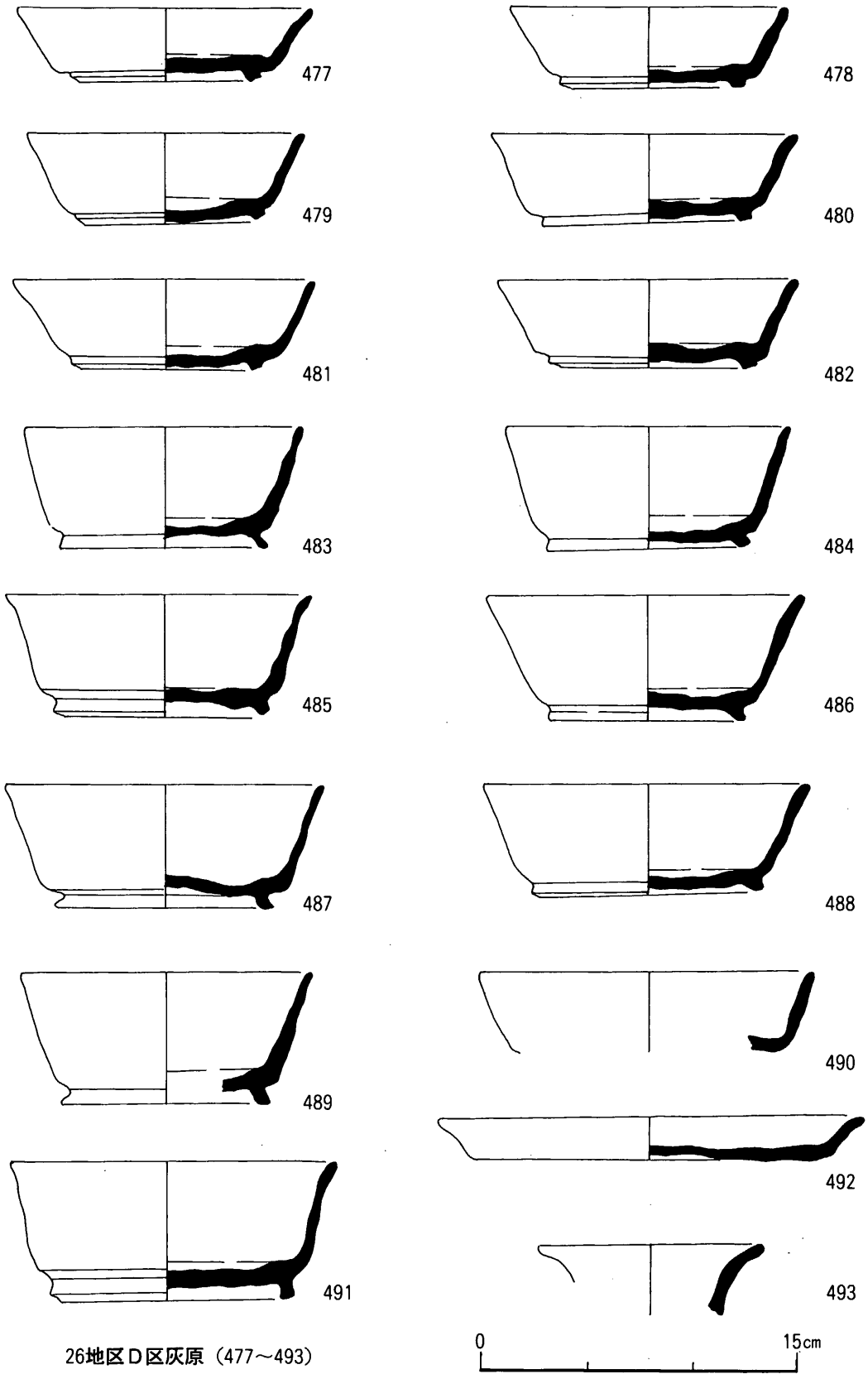
26地区C区灰原（411～428）
（428は土師器）



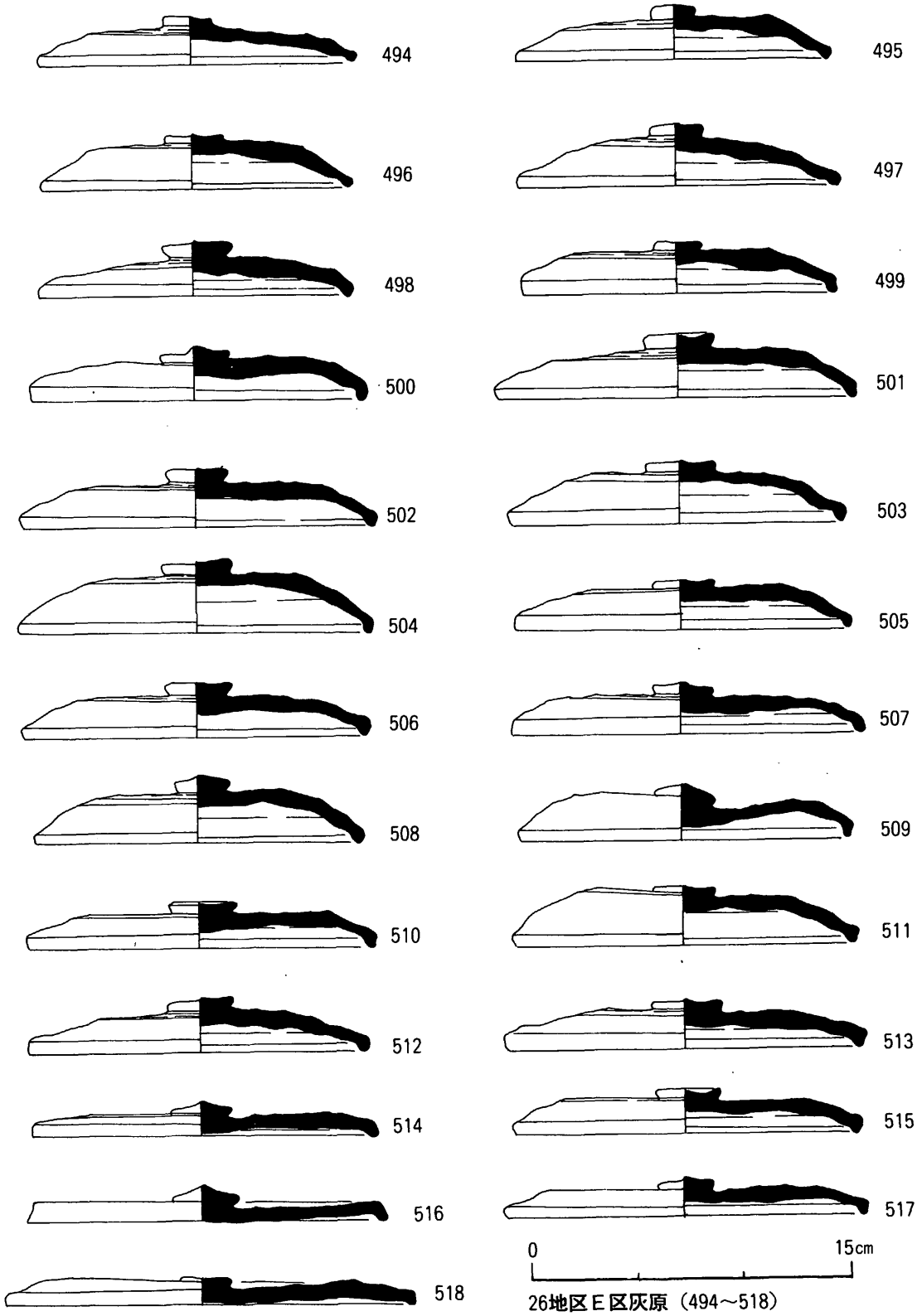
26地区D区灰原（429～453）



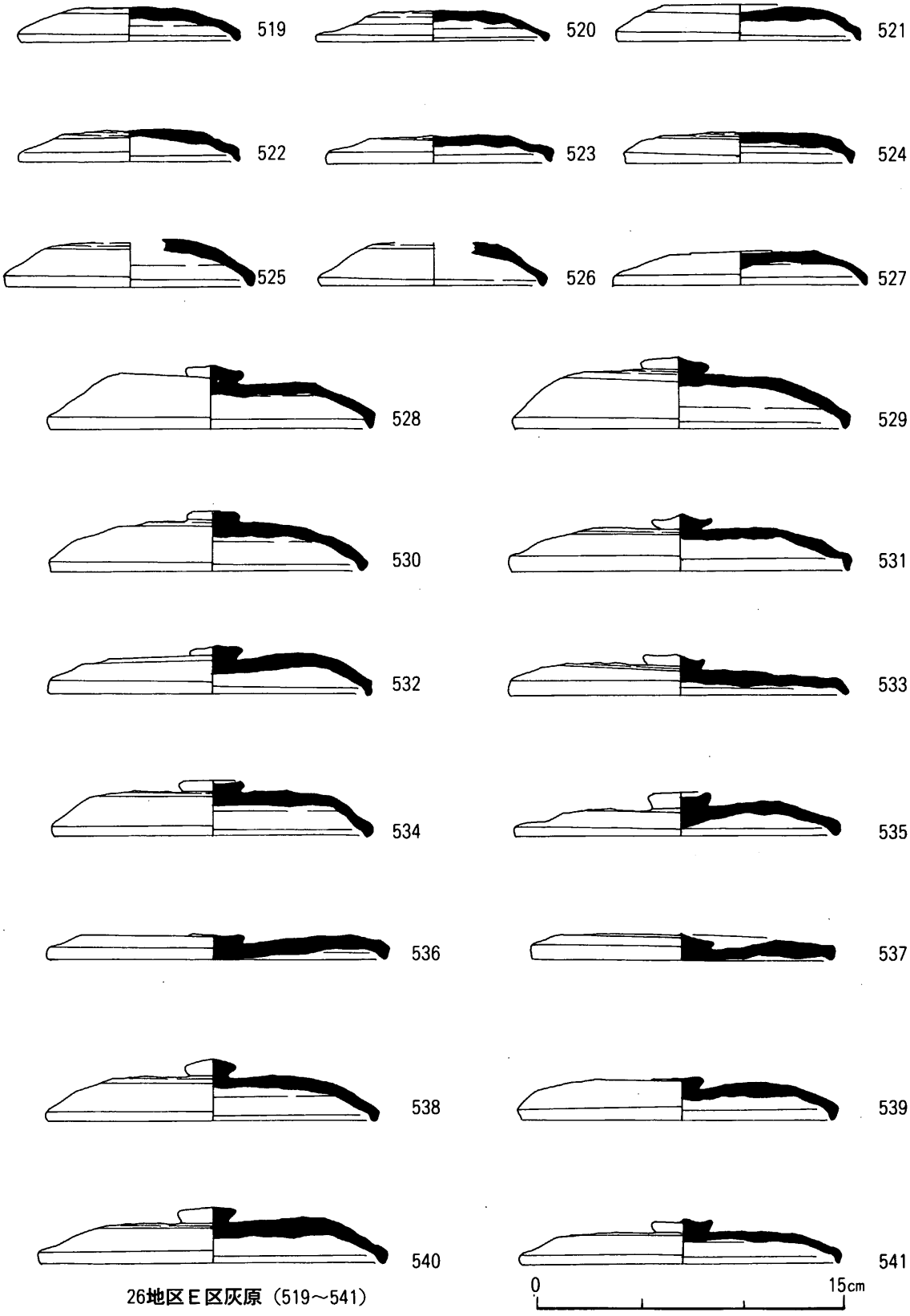
26地区D区灰原（454～476）
（459，467，474は欠番）



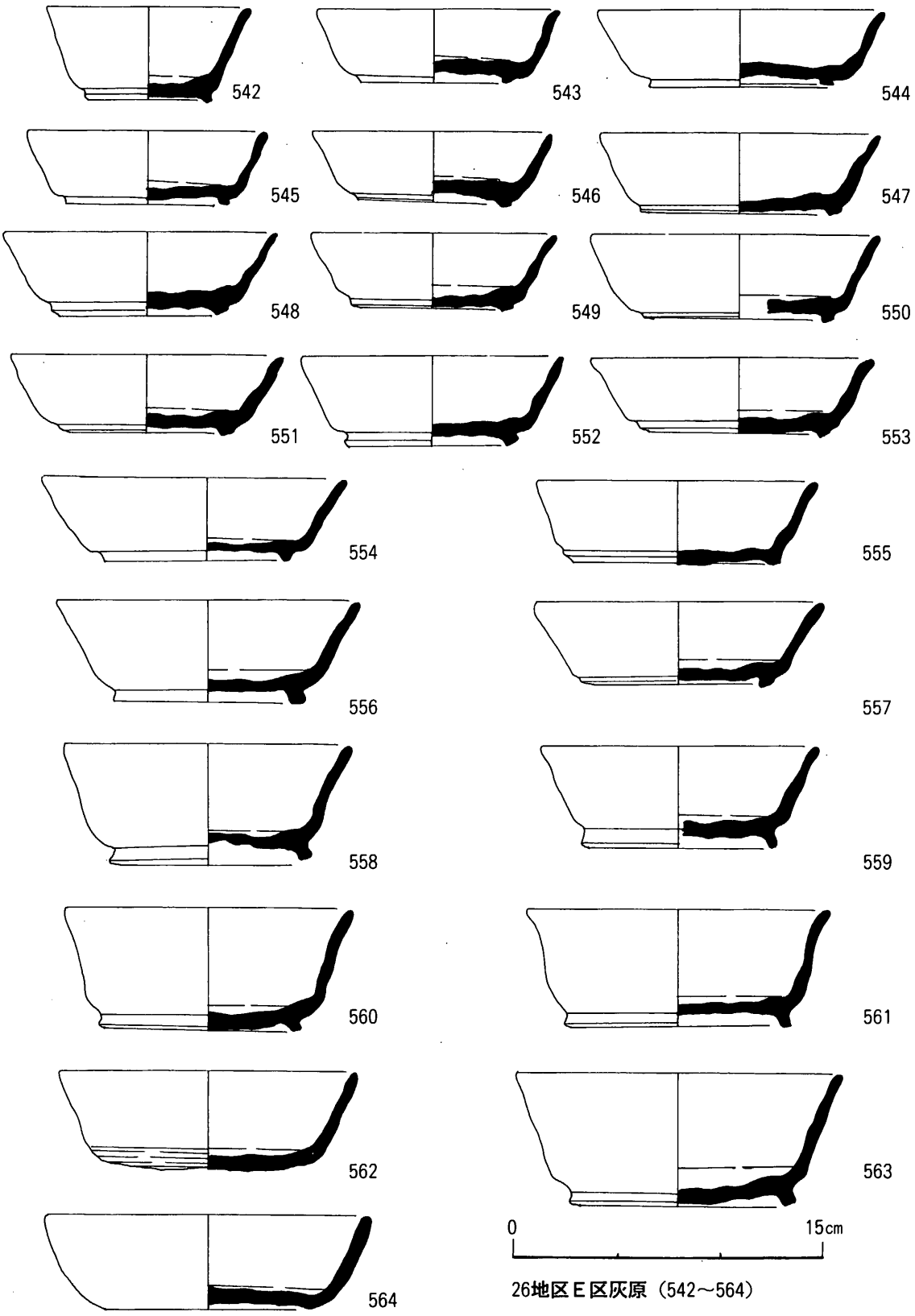
26地区Ｄ区灰原（477～493）



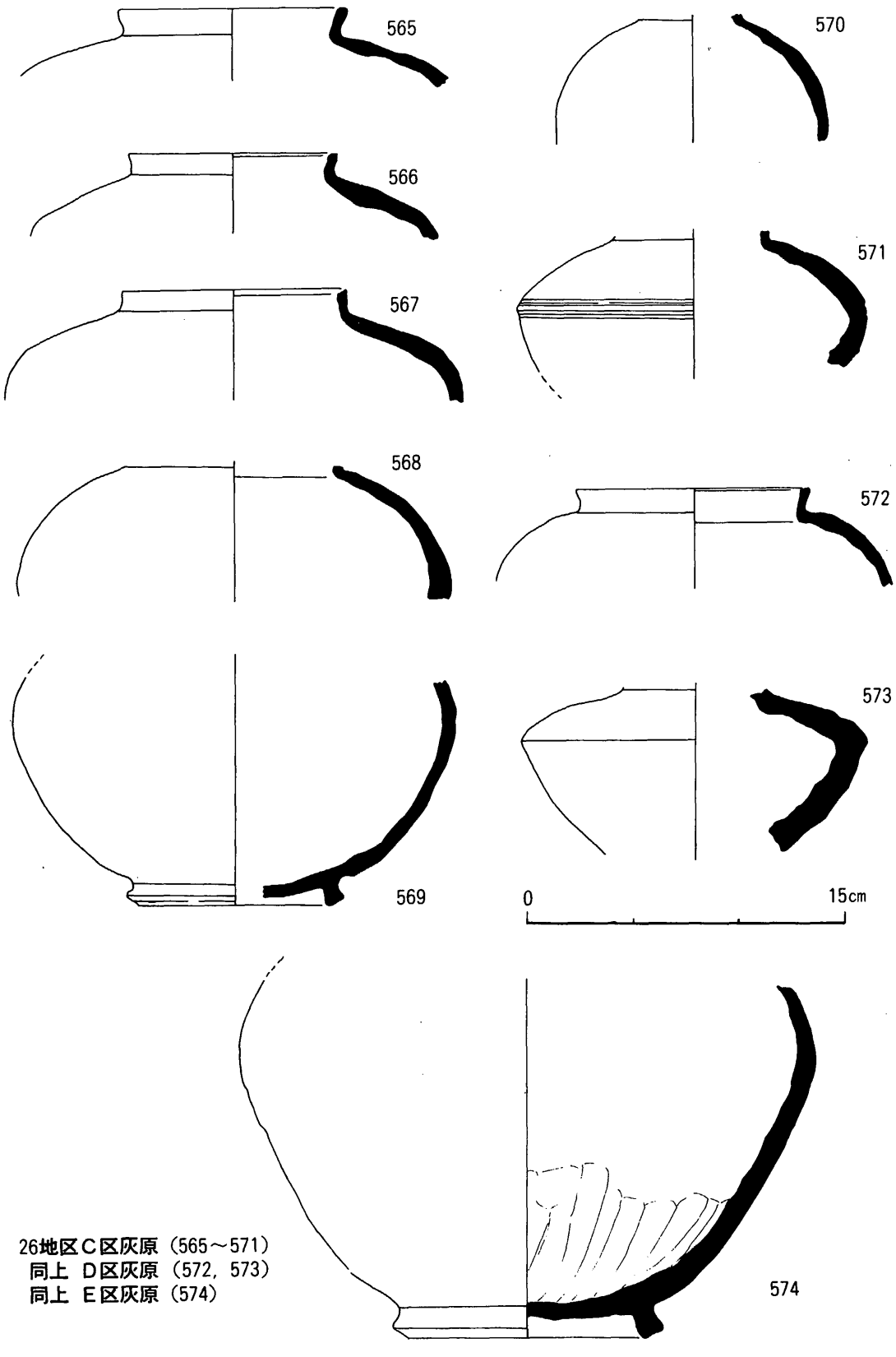
26地区E区灰原（494～518）



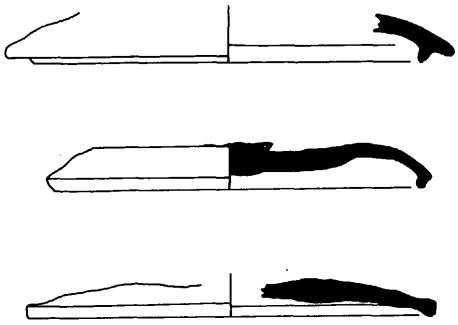
26地区E区灰原（519～541）

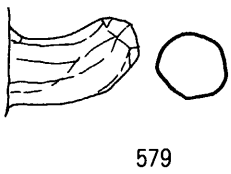


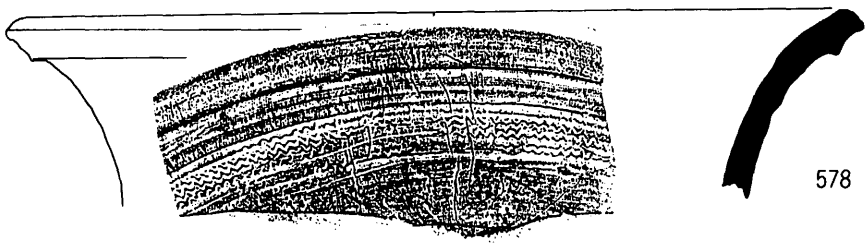
26地区E区灰原（542～564）

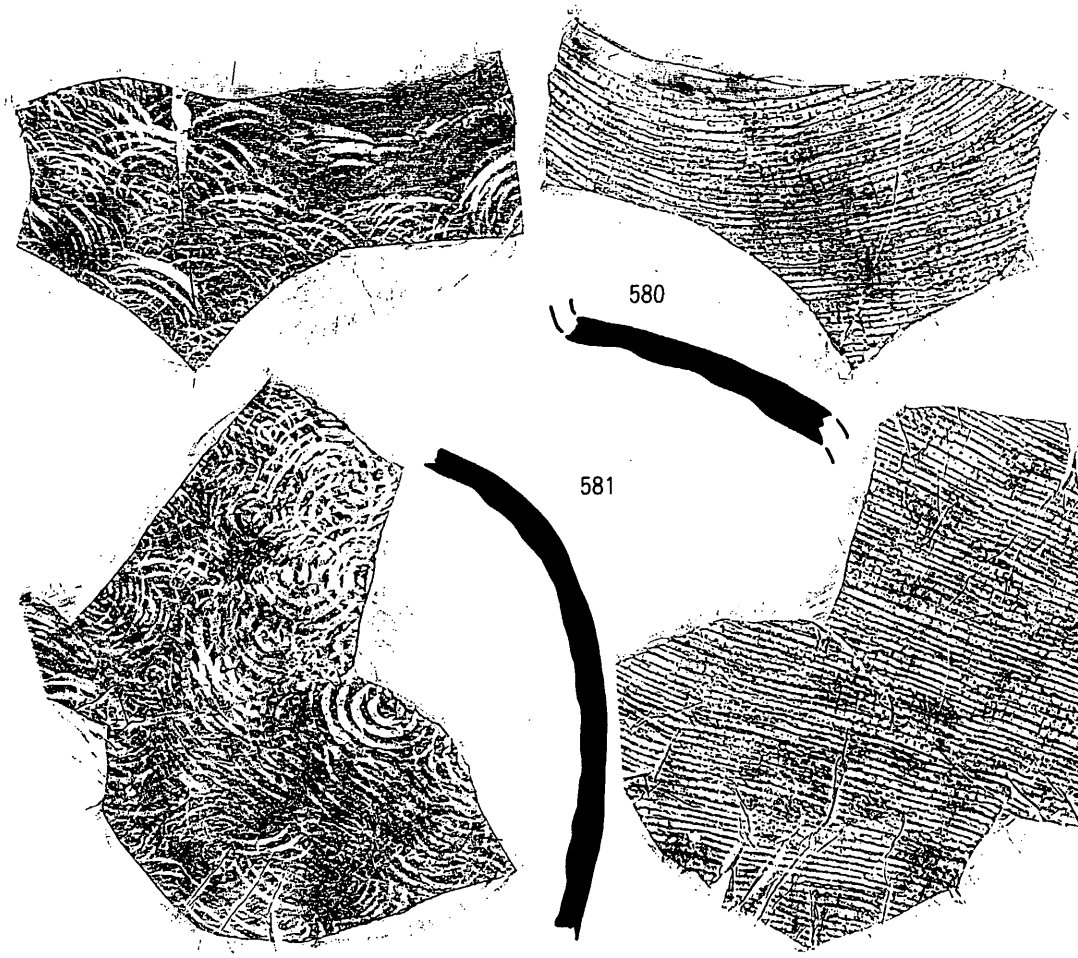


26地区C区灰原（565～571）
同上 D区灰原（572, 573）
同上 E区灰原（574）

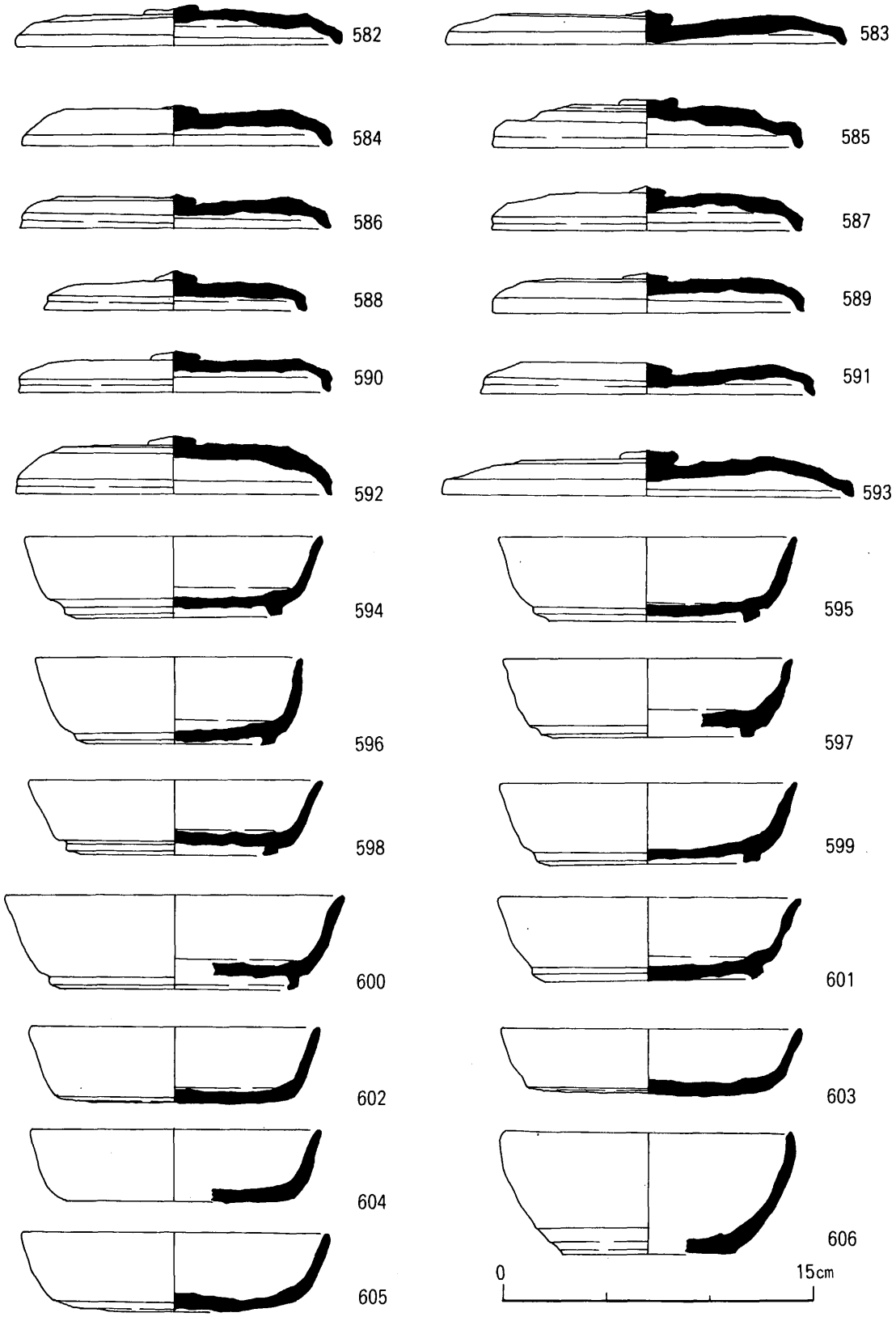




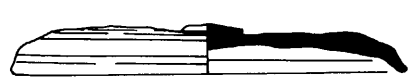




27地区Ａ区灰原（576，580，581）
同上 灰原　（575，577～579）
（579は土師器）

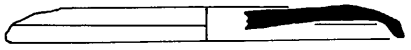


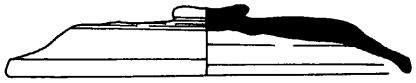
28地区Ⅰ号窯灰原（582, 583）
同上 B区灰原 （584～599, 601～605）
同上 灰原 （600, 606）

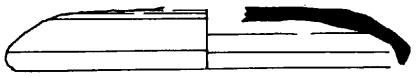

607

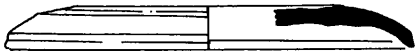

608


609

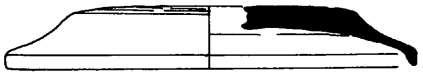

610


611


612

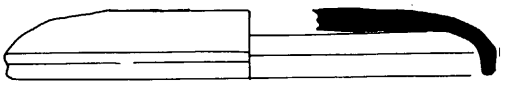

613


614


615


616

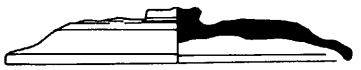

617


618

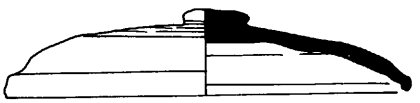

619

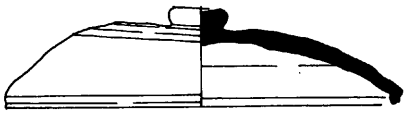

620

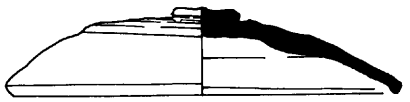

621

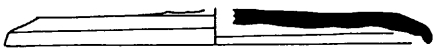

622

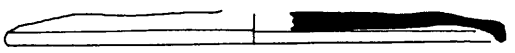

623


624


625

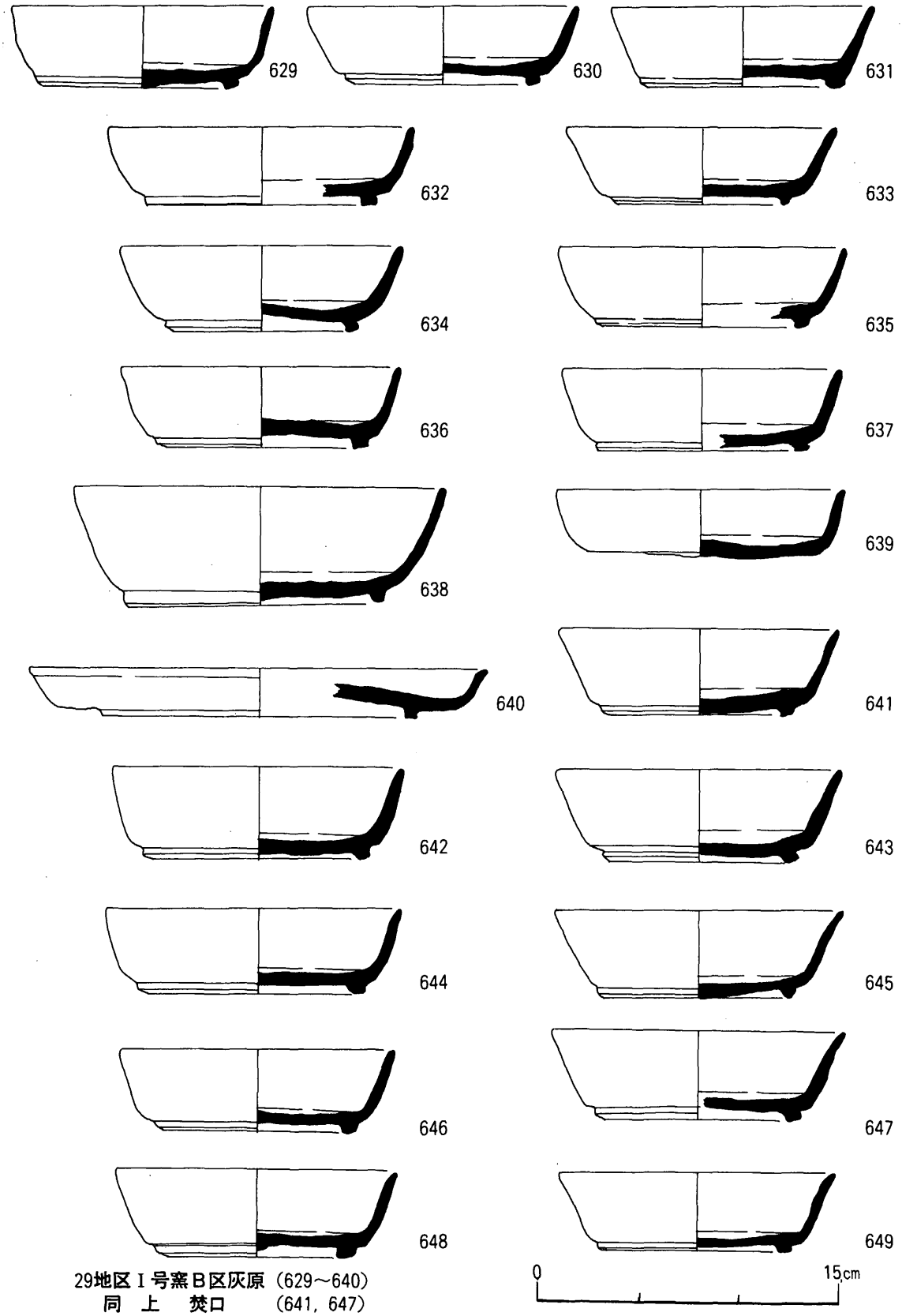

626


627


628

0 15cm

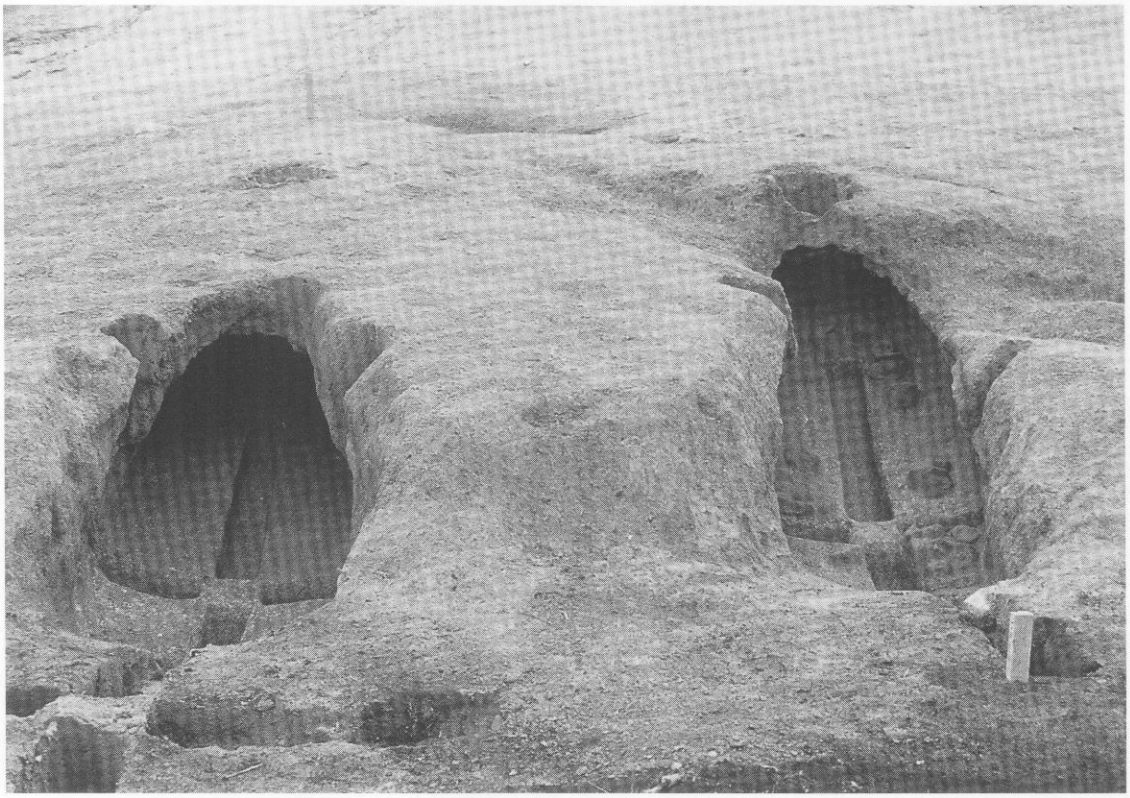
29地区Ⅰ号窯B区灰原 (607～618)
同 上 左土坑 (619)
同 上 焚口 (626)
同 上 周辺 (620～625, 627, 628)



29地区Ⅰ号窯B区灰原 (629～640)
同　上　焚口 (641, 647)
同　上　窯体内 (645)
同　上　灰層中 (642～644, 646)
同　上　左土坑 (649)



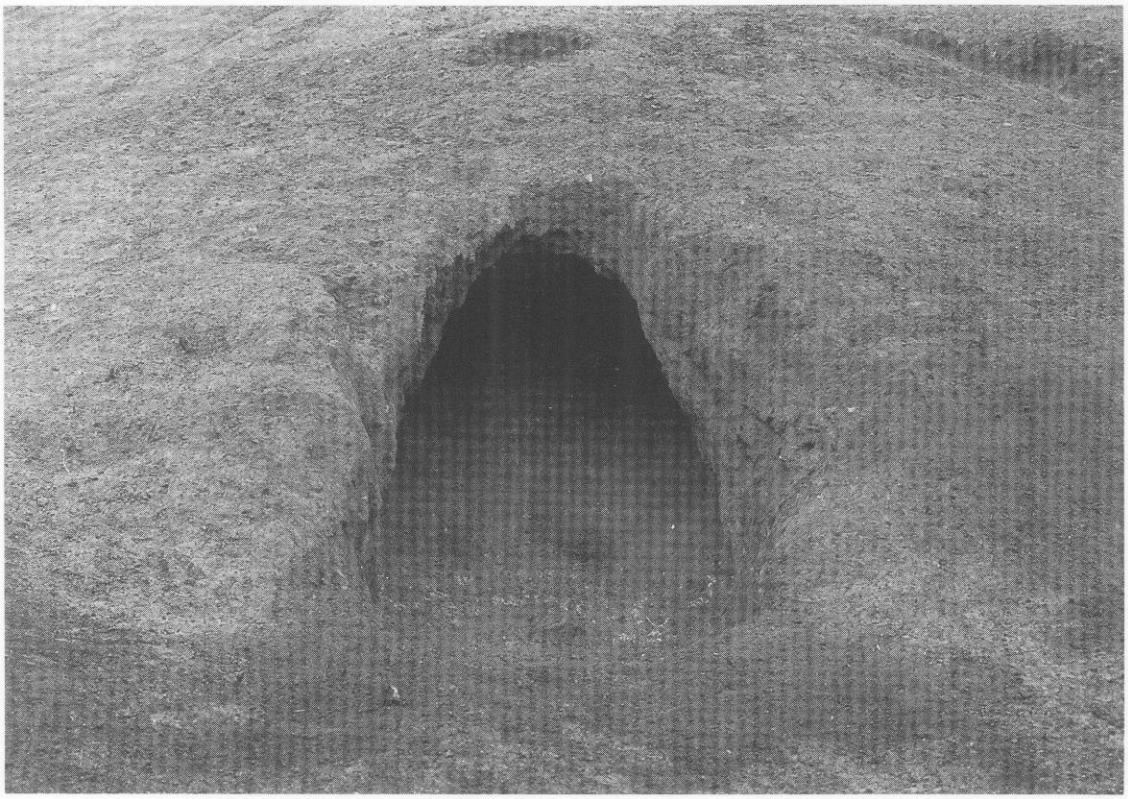
ハセムシ26地区遠景



同　上　近景



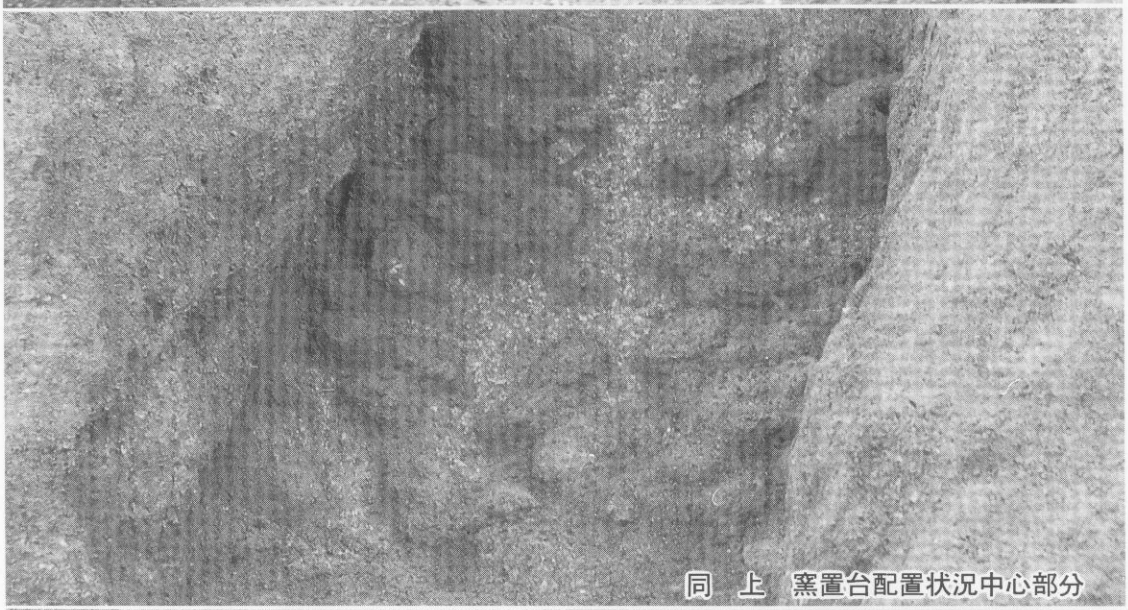
ハセムシ26地区Ⅱ号窯全景



同　上　Ⅰ号窯全景



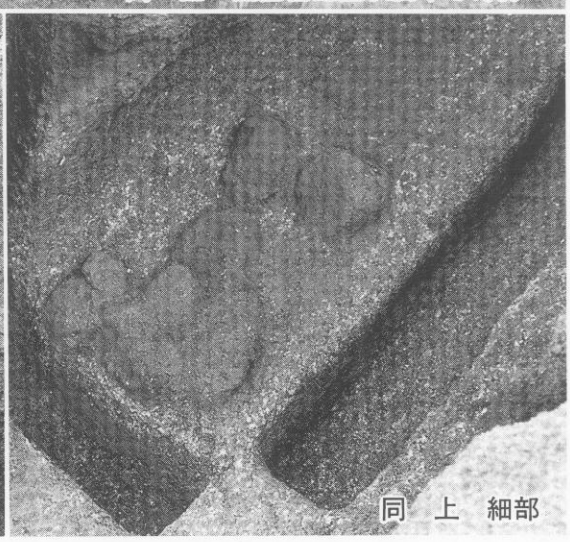
ハセムシ26地区Ⅱ号窯置台配置状況上半部



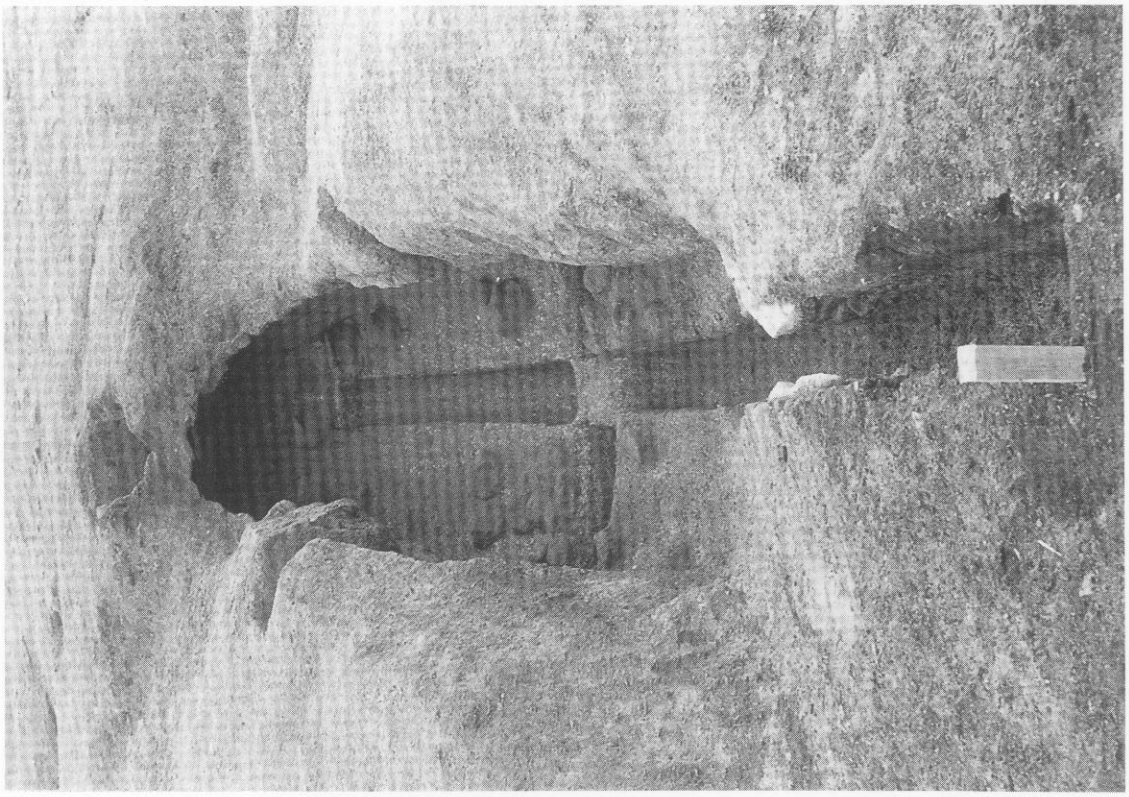
同　上　窯置台配置状況中心部分



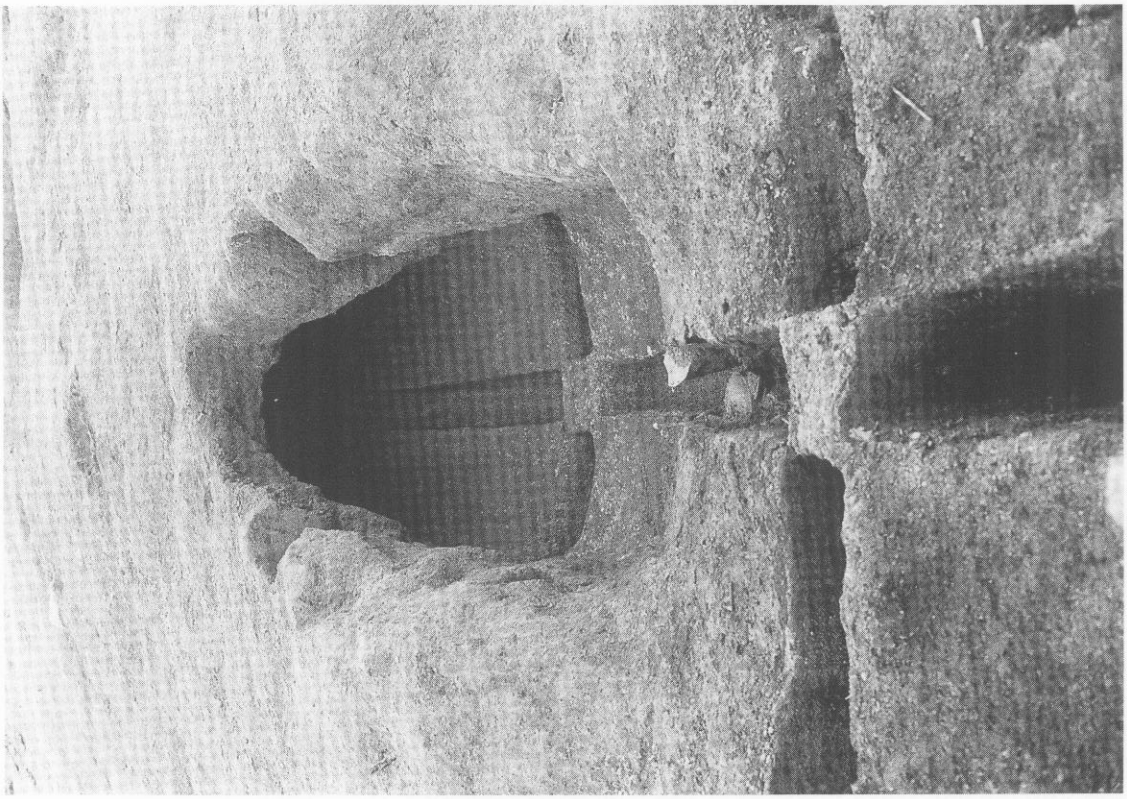
同　上　細部



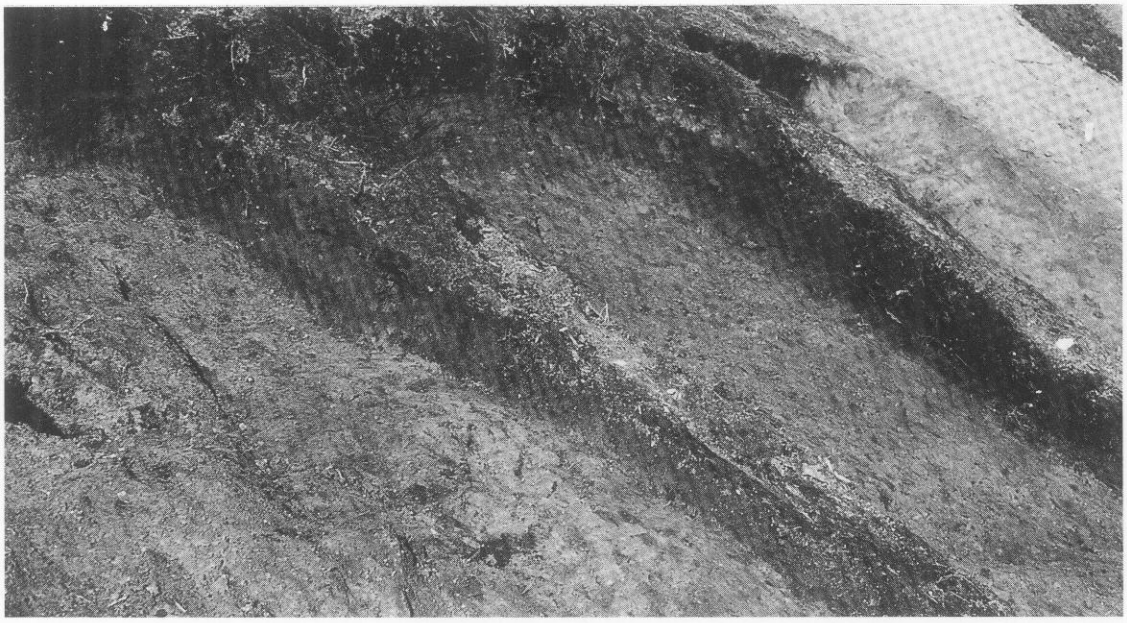
同　上　細部



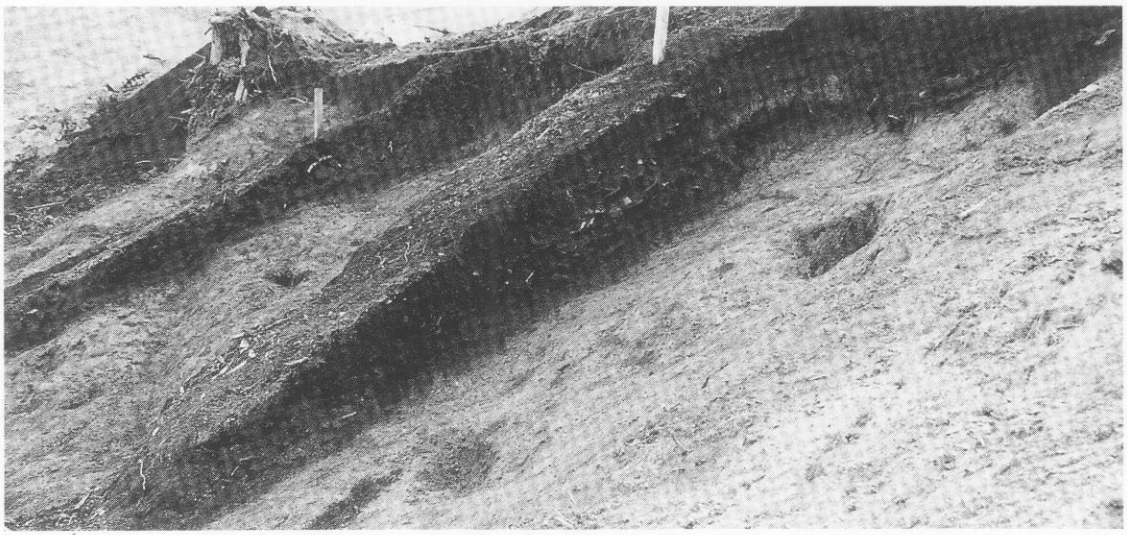
ハセムシ26地区Ⅱ号窯たちわり後の状況



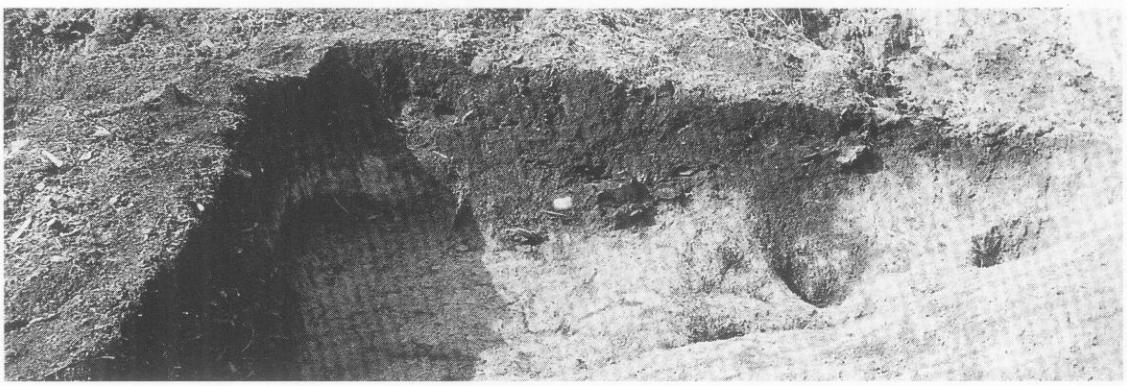
ハセムシ26地区Ⅰ号窯たちわり後の状況



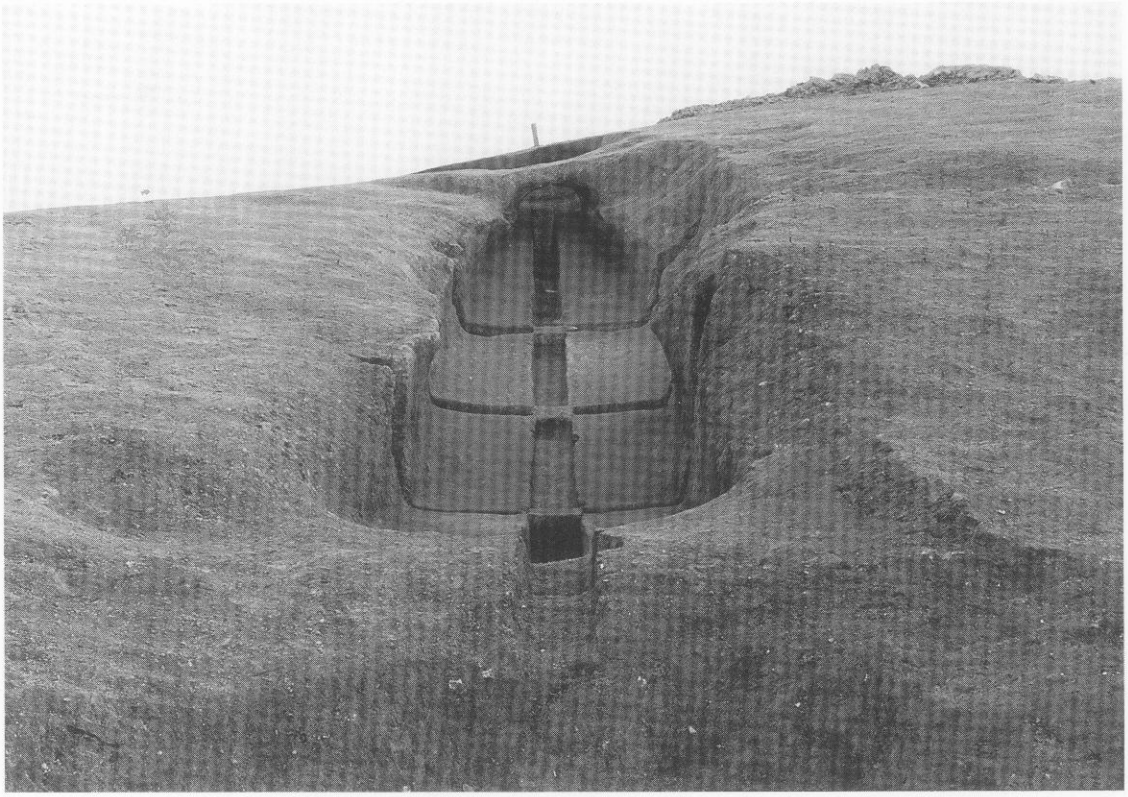
ハセムシ26地区灰原縦断セクション



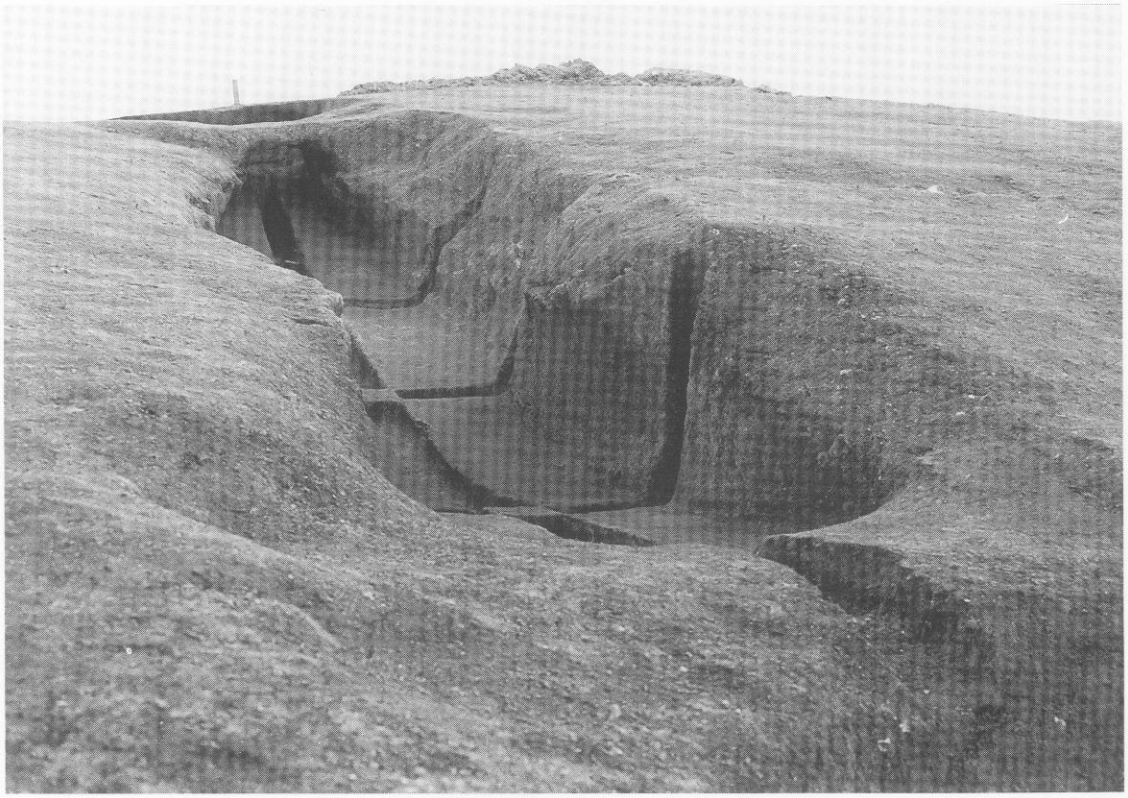
同　上



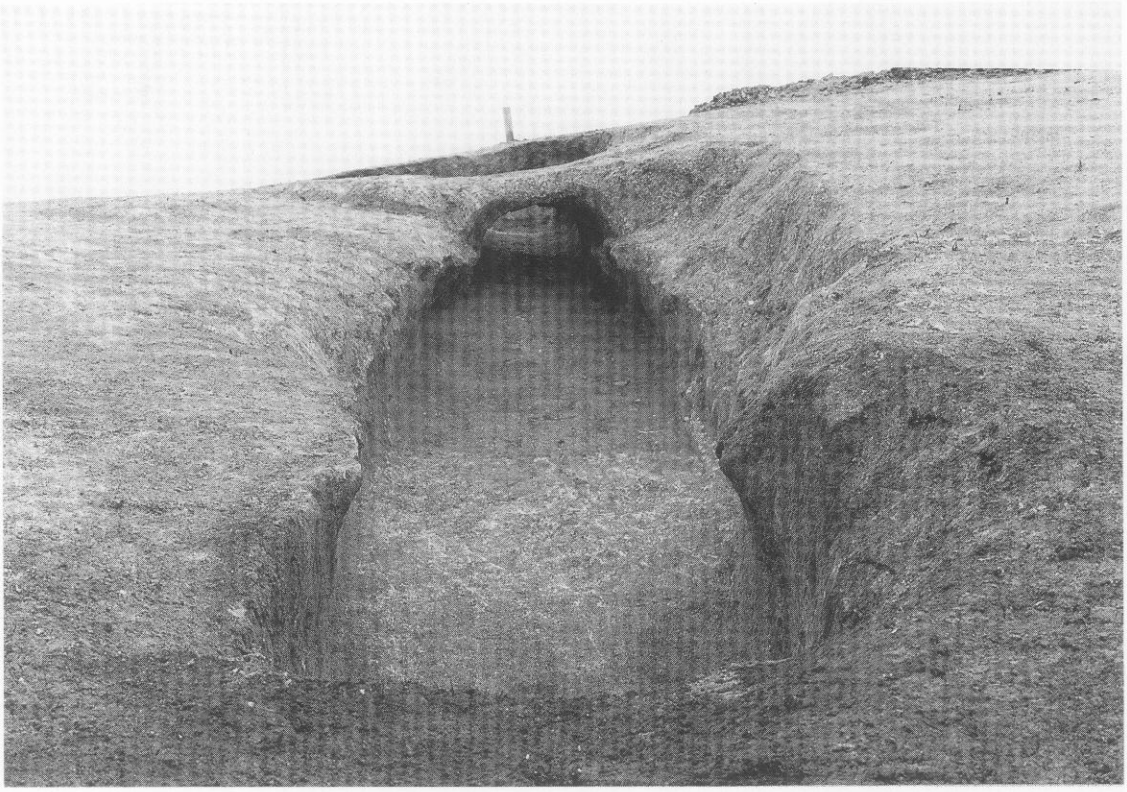
同　上　横断セクション



ハセムシ27地区窯跡全景



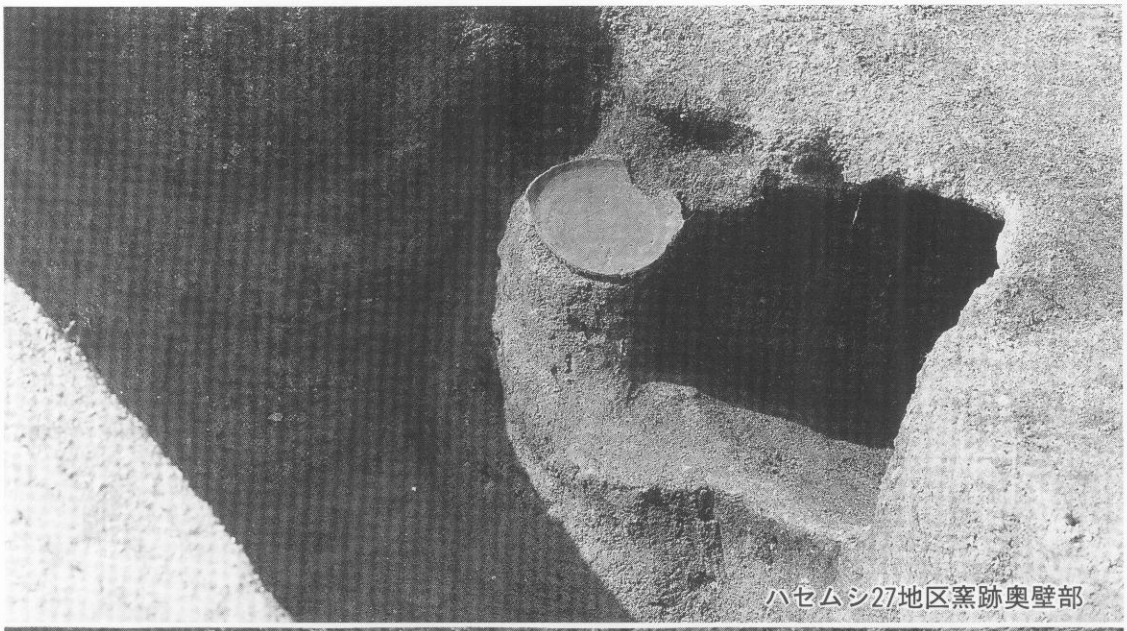
同　上　燃焼部付近



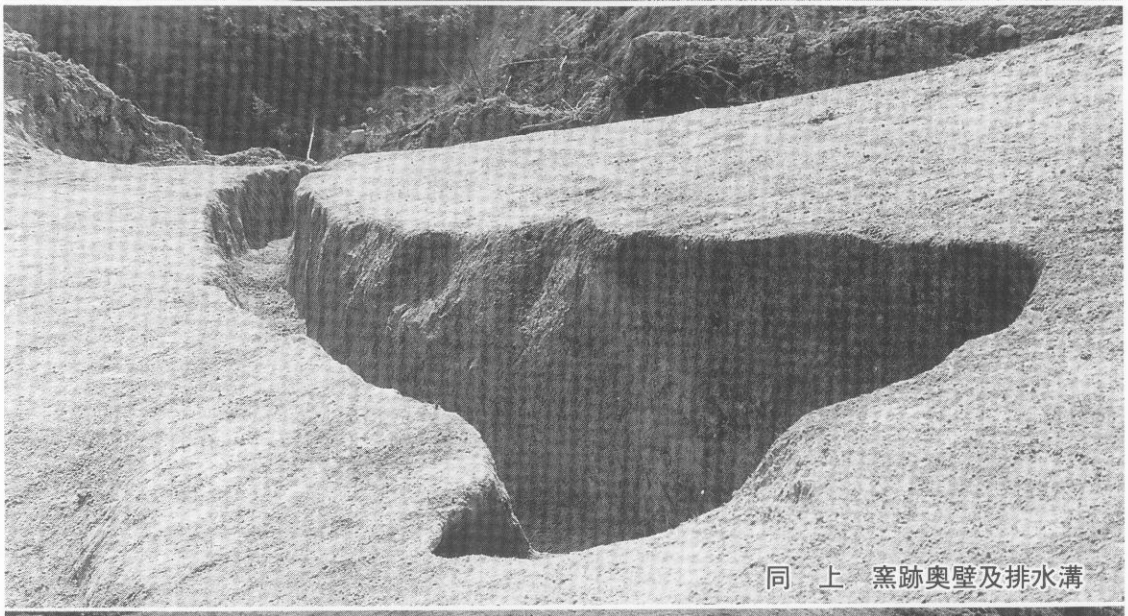
ハセムシ27地区窯跡たちわり後



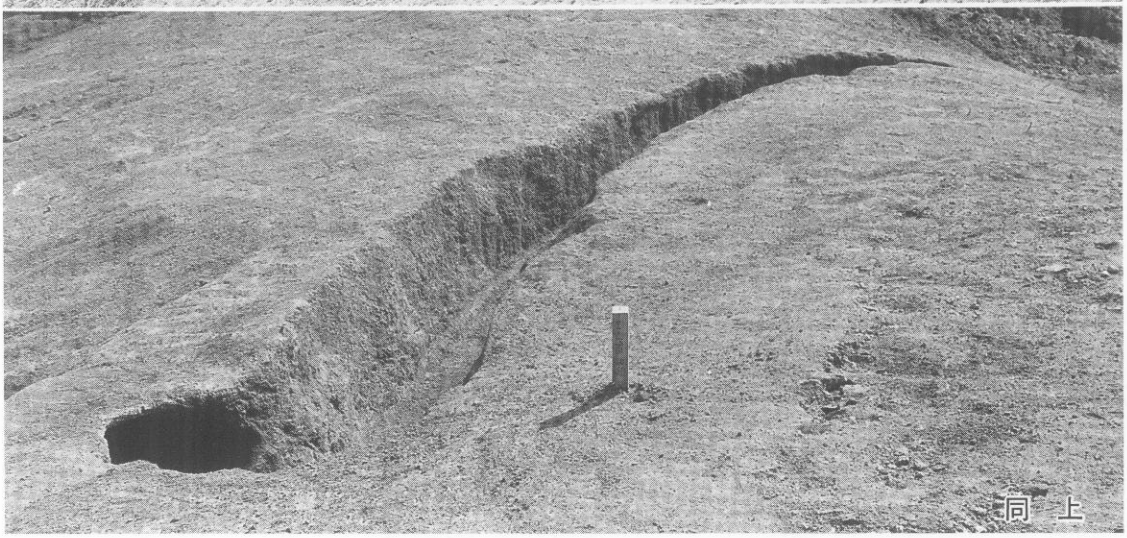
同　上



ハセムシ27地区窯跡奥壁部



同　上　窯跡奥壁及排水溝



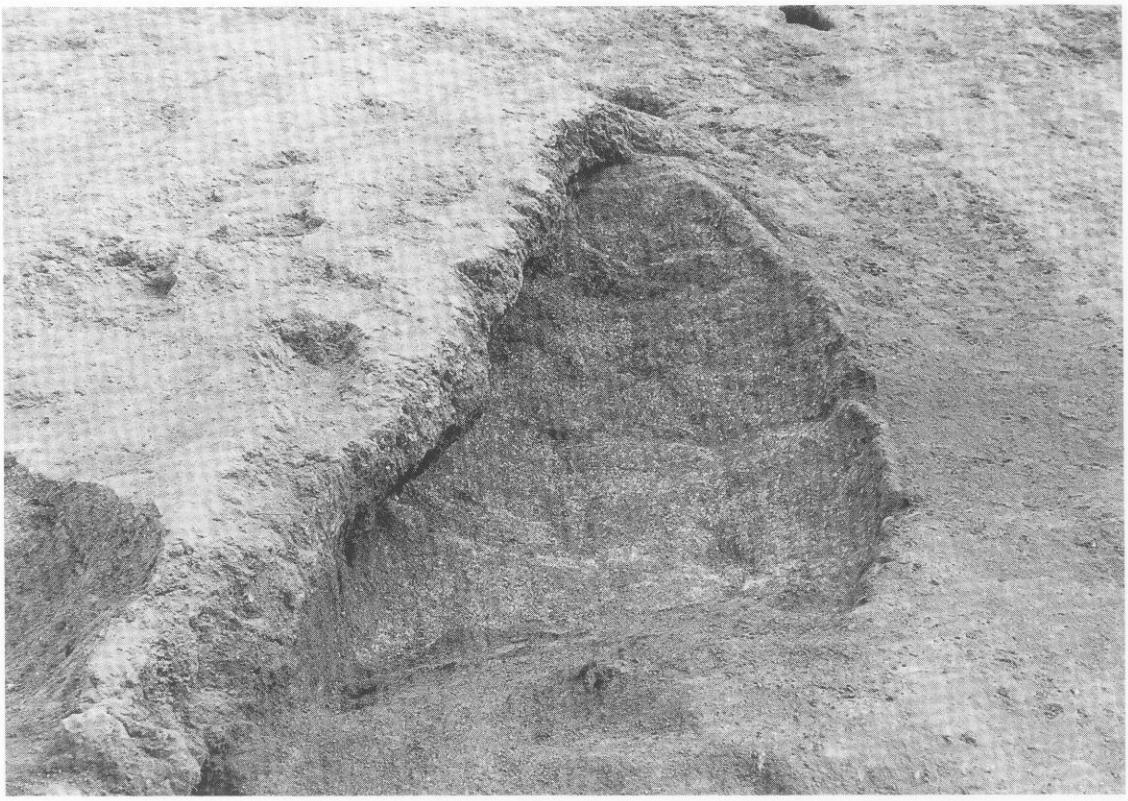
同　上



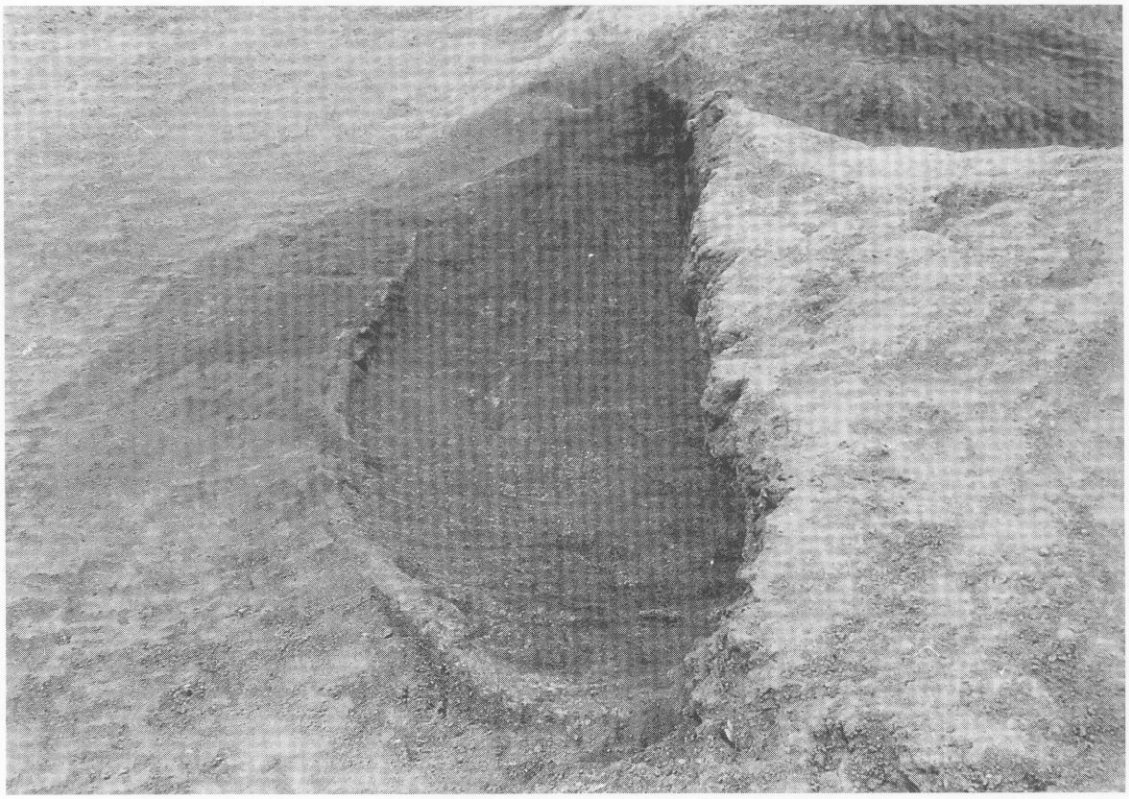
ハセムシ28地区遠望



ハセムシ29地区遠望



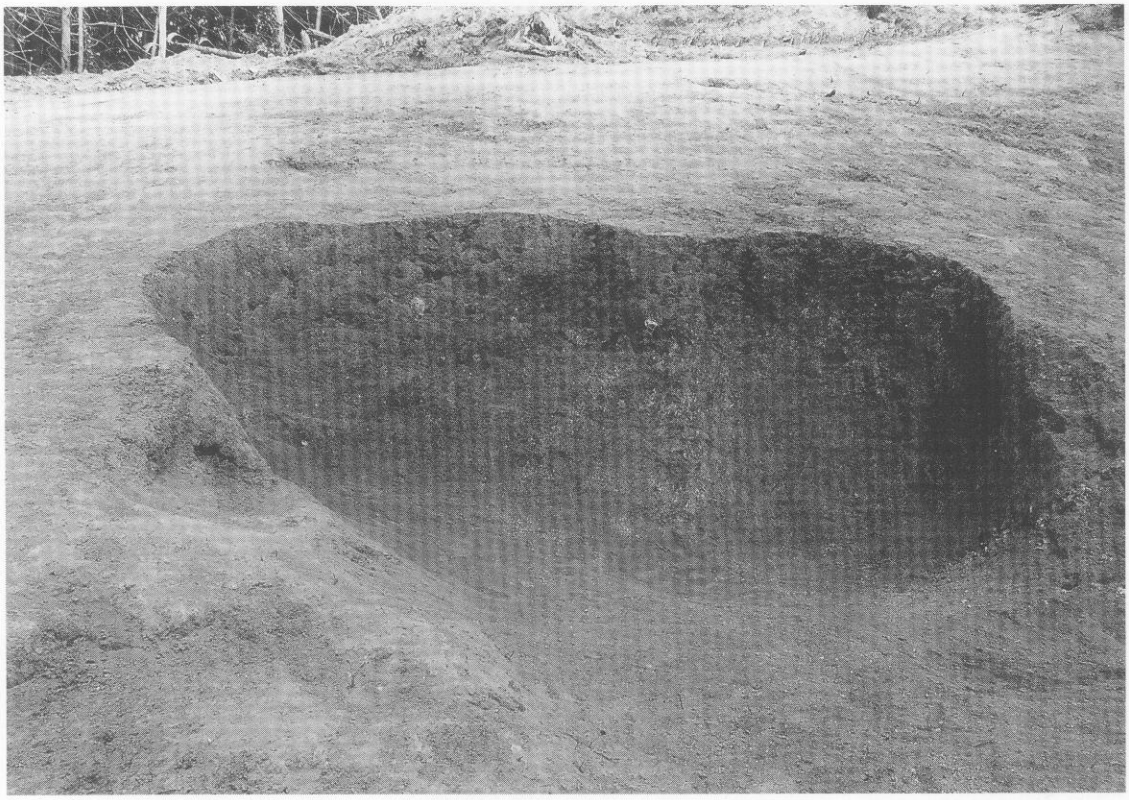
ハセムシ28地区窯跡（焚口側から）



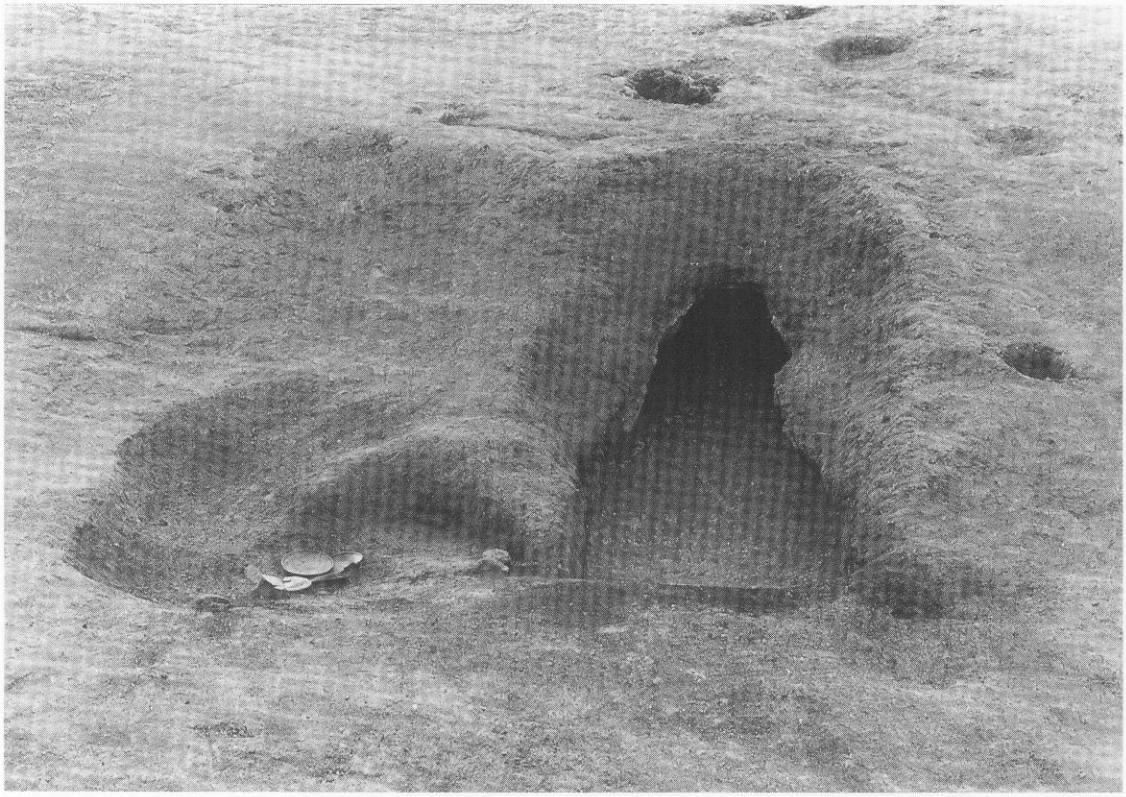
同　上　（煙道側から）



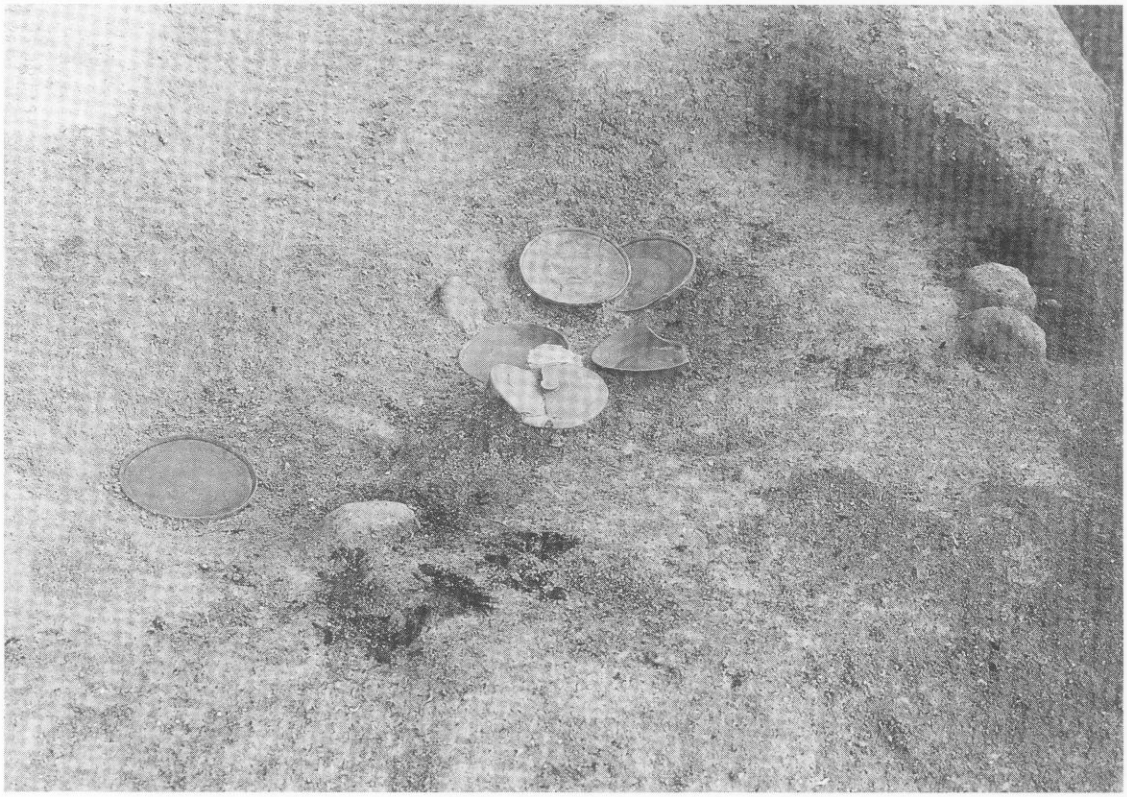
ハセムシ28地区窯跡及土坑



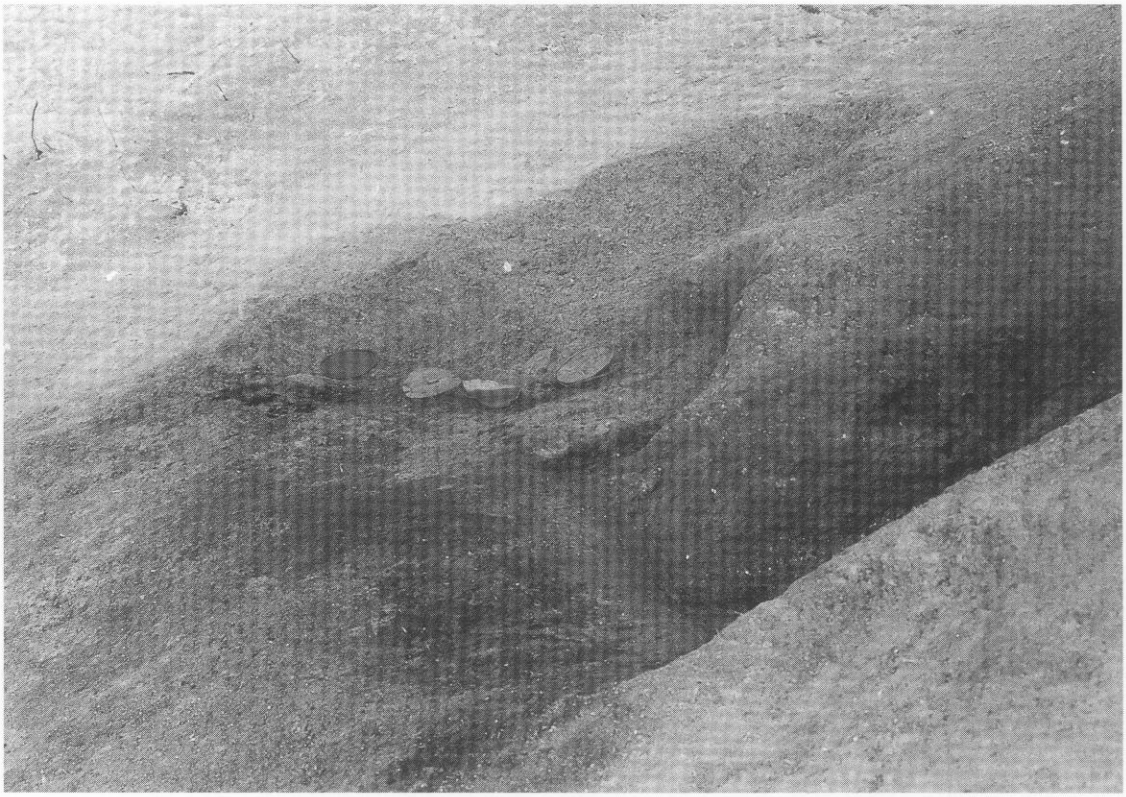
同　上　土坑細部



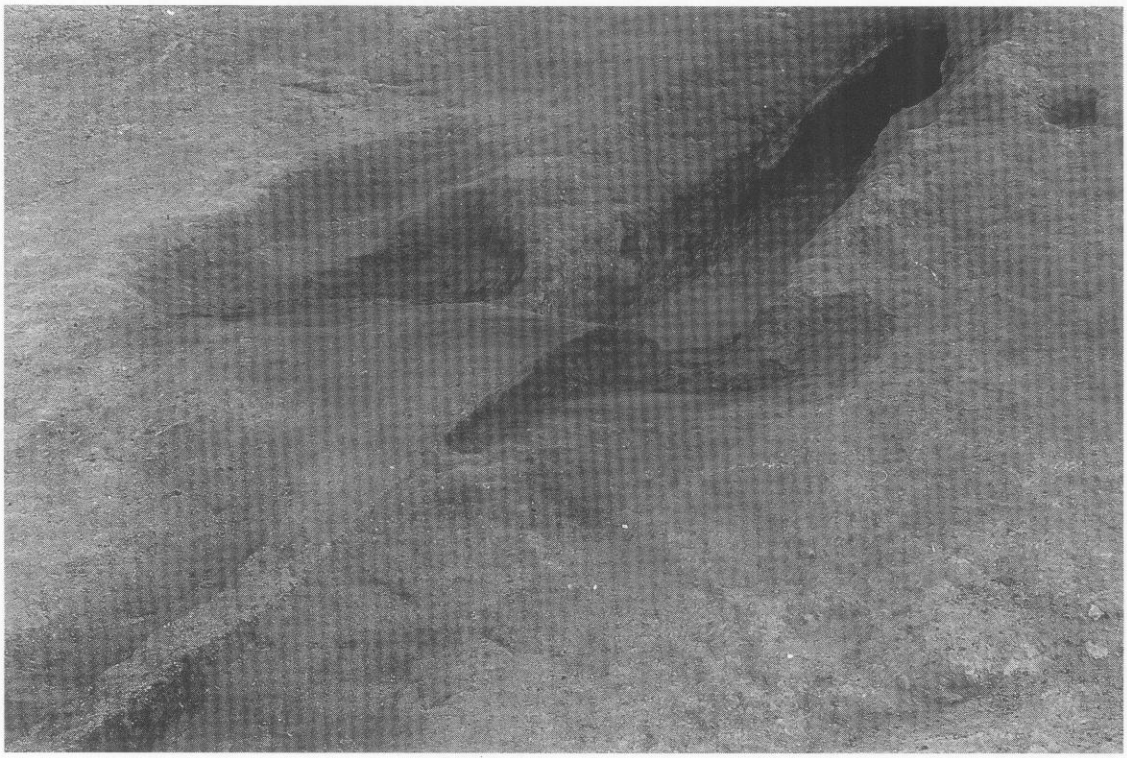
ハセムシ29地区窯跡及土坑



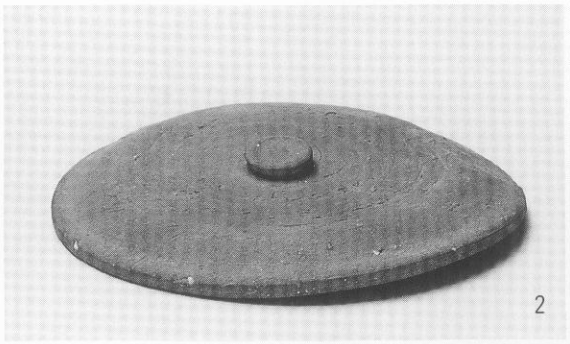
同　上　土坑細部



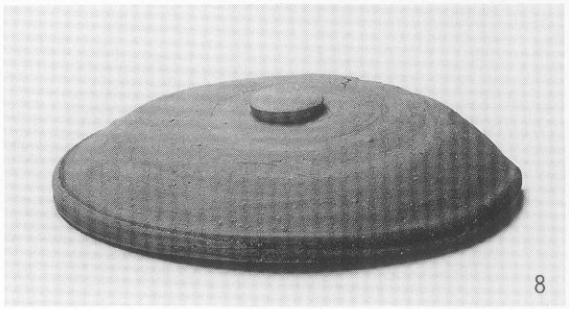
ハセムシ29地区土坑

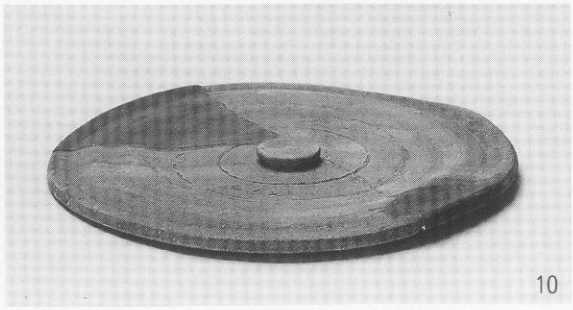


同　上　前庭部


2


3

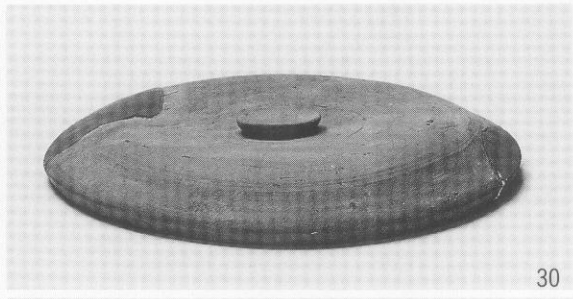

8


10


13


21


23


30


38


43

須恵器（蓋・高杯・杯）

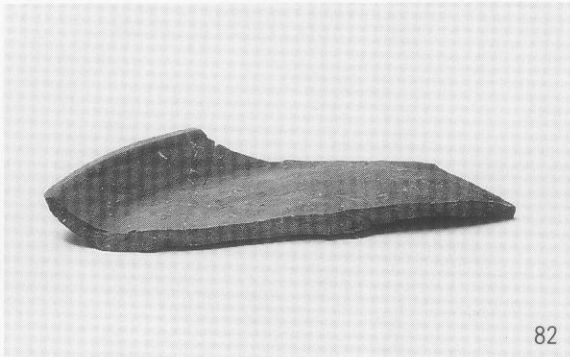

54


68


70


72


79


82


85


92


93


97

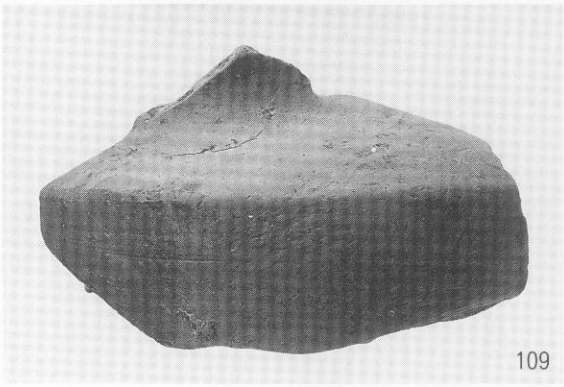
須恵器（蓋・杯・皿）


100

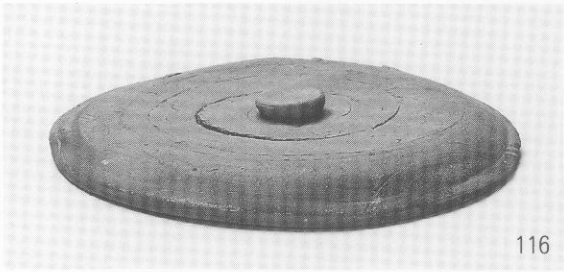

105


100

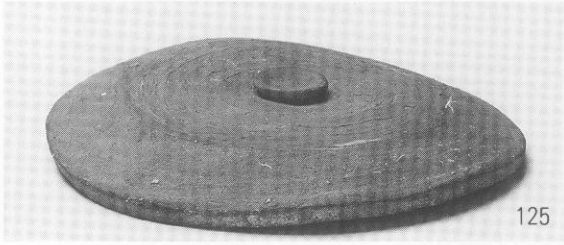

107


109


112

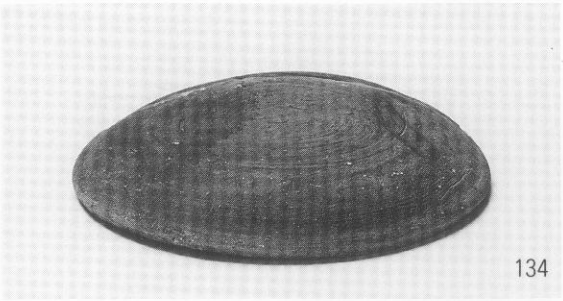

116


120

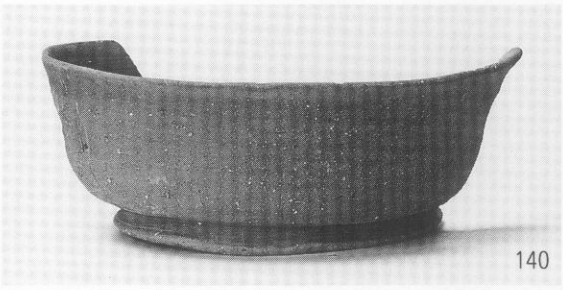

125


135

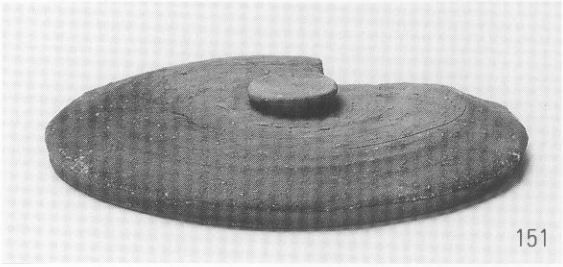
須恵器（皿・杯・平瓶・壺・蓋）


134

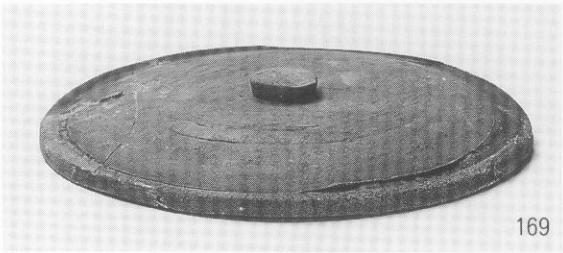

138

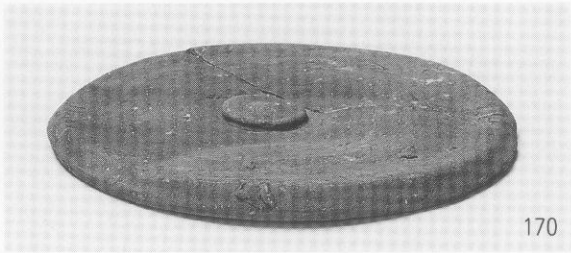

140


142

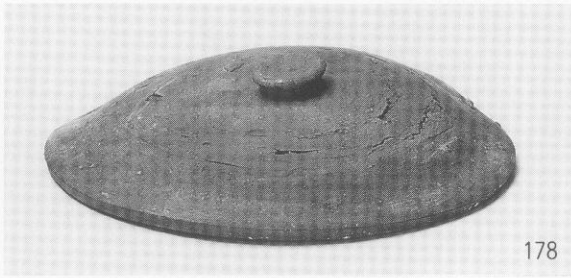

151

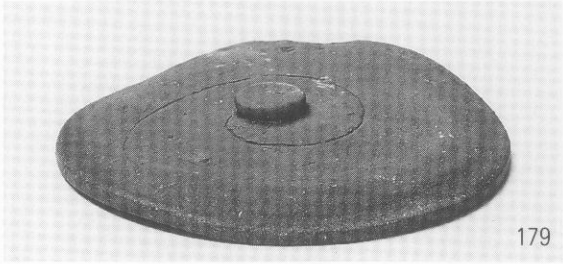

161


169


170

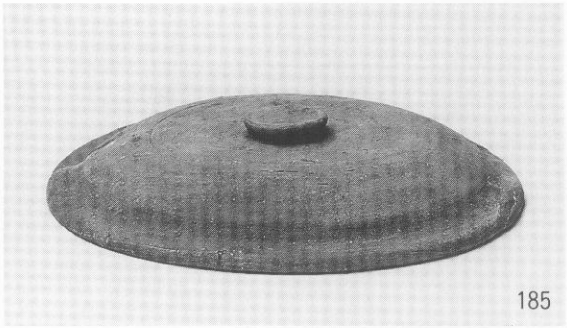

175


178


179


181

須恵器（蓋・杯）


185


188


189


192


202


205


208

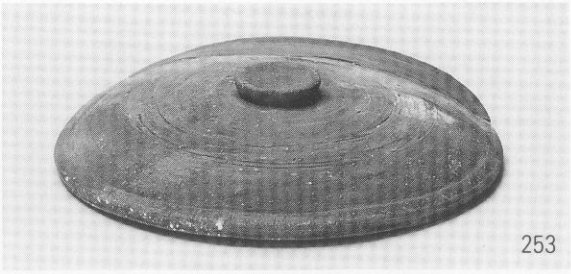

221

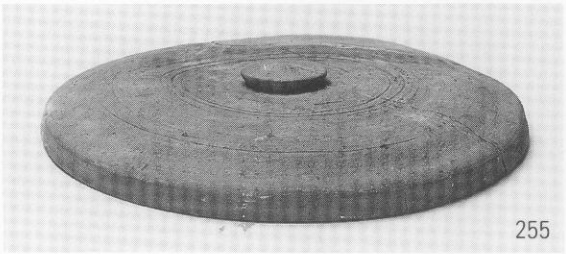

223


228

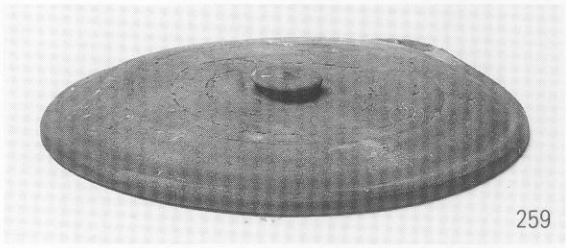
須恵器（蓋・杯・皿）

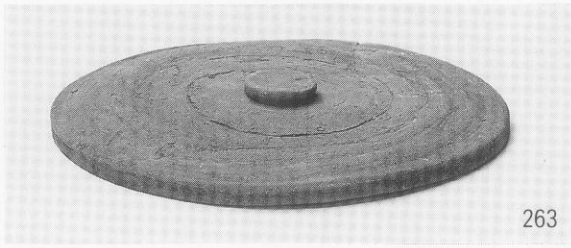

243


253


255

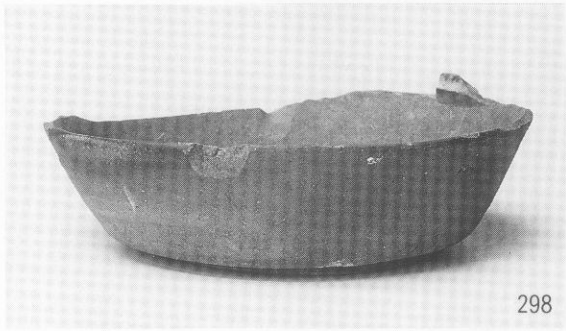

256


259

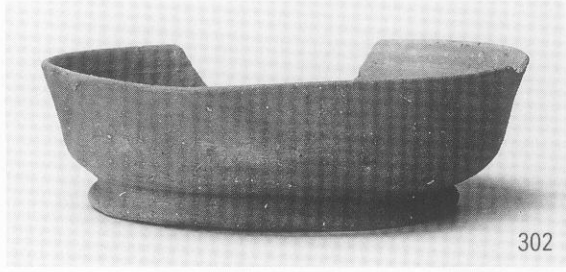

263


272


290


298

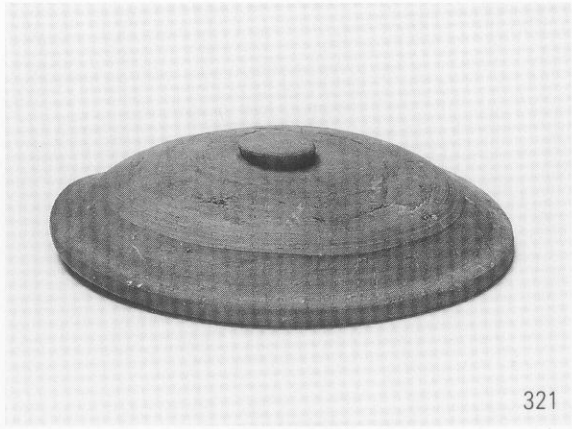

301

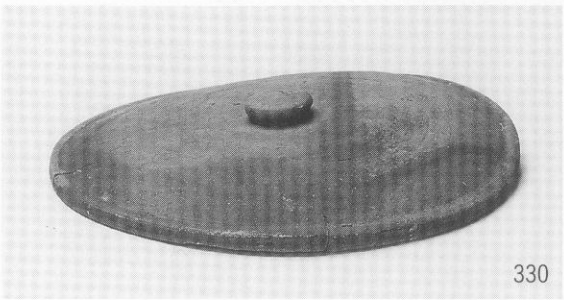

302

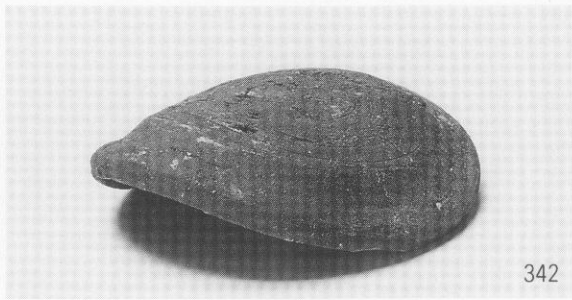

316

須恵器（蓋・杯・皿）


317

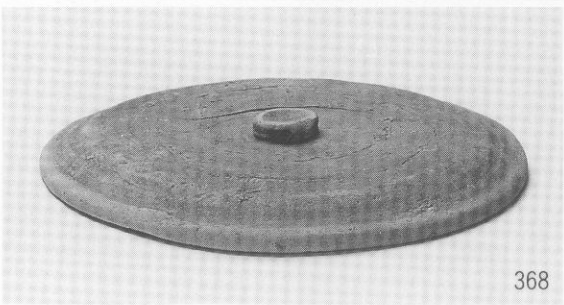

321


330


342


346


355


368


378


380


391

須恵器（壺・蓋・杯・皿）


396


398

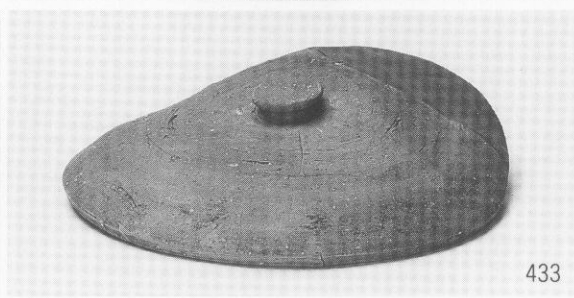

403


407


413


426


431


433

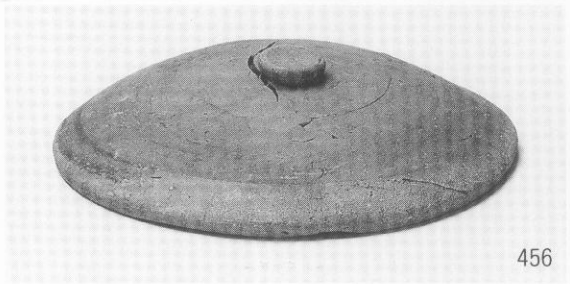

451


452

須恵器（杯・皿・瓶子・蓋）


453


455

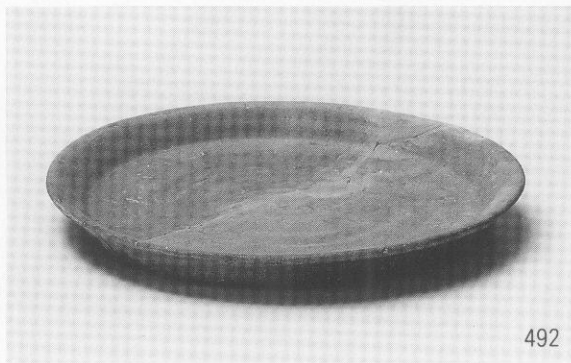

456


465


484


488


491


492


499


500


514


527


532


525

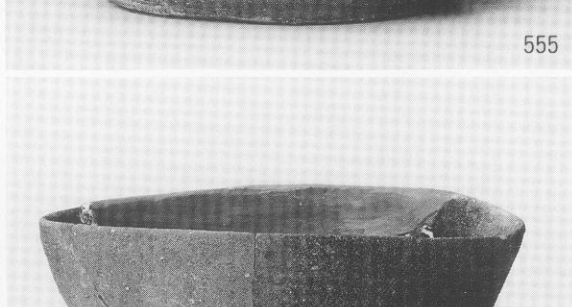

542


543


546

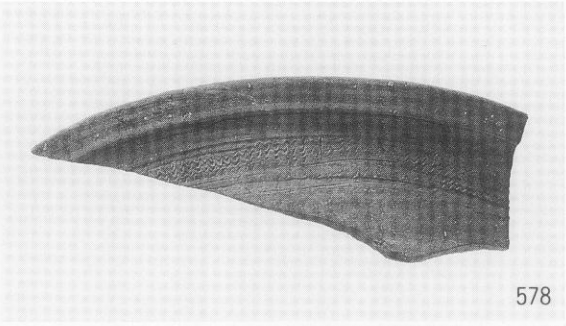

555


560


564

須恵器（蓋・杯・皿）


576

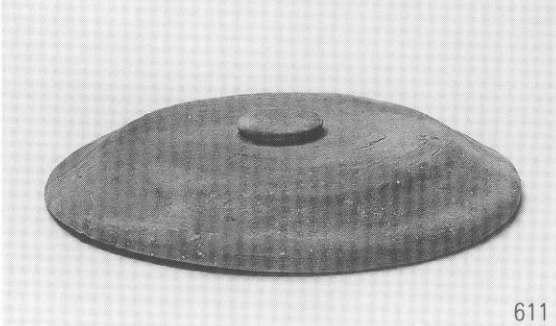

578


583


584


593


607


611


638


635


546

須恵器（蓋・壺・杯・皿）

大野城市文化財調査報告書

第41集

平成5年7月

発　行　大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印　刷　サンキ印刷株式会社